

---

# GAME

春生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GAME

### 【Nコード】

N2624V

### 【作者名】

春生

### 【あらすじ】

インターネットで当たった限定数個のゲーム。起動したら本当にゲームの世界に行ってしまった。

そこから始まる異世界トリップです。

全73話完結予定。

よろしければお付き合ってくださいませ。

## 始まりの過去（前書き）

\* 別作品、『encounter』『share the fate with . . .』に出る人物たちが出ています。

もともと、GAMEが一番最初に完結出来た作品です。上記二作品はGAMEから派生しました。数年前に書いた初完結小説：リメイクで多少マシになってるとはいえ、やりたいようにやっています（苦笑）

\* 過去デンパンブックス様で公開していました。リメイク作品です。

\* インタビュレーションはやわらげてありますが、主人公、関西弁使用があります。ご容赦ください。

## 始まりの過去

この夏、自分の身にありえないことが起こった。

インターネットで販売された限定数個のゲーム。その幻とも呼ばれる物が手に入ったのだ。

しかし実際は、あたるわけがないと、遊び半分で抽選に応募していたため、まさかの当選。

それほど固執こじつしてるわけでもないけれど、とりあえず手に入れた事だしと起動させた。

そうしたら、本当にゲームの世界に行ってしまった。

似た所で例えるなら、中世の町並み。それが一番しつくり来る。

そびえ立つ城や、端正たんせいな顔立ちの人間。幻想げんそう的な雰囲気ふんいきを持つ魔法使い。魔法陣、剣、諸々……

同じくゲームを伝ってその世界に来てしまった人間が数人いたが、

『最高位の魔法使い』とか言う女性に、元いた世界に帰して貰って、事なきを得た。

元々、そのゲームを作ったのは、俺が遊びに行ってたインターネットのHPの管理人で、実はその管理人、ハンドルネーム『プレイジ』があつちの世界の人間だったなんて、信じろって言われても、無理な話だった。

何もかもがまるで夢物語。『実は、夢でした』といわれても、納得できるくらいの出来事だった。

ま、なんにせよ、今現在は、無事に現代の生活を送ってるんやけど……。

## 始まり

夏休みも終わり、新学期。

秋も深まってきたころ、電気街で高校二年生の男子が、珍しくニュースというものに耳を奪われて足を止めた。身長170センチほど、前髪が長めの黒髪、見た目に悪そうな印象を持たせてしまう服装。そんな少年が、ニュースに釘付けになっている姿は、少し不自然さが発生するのか、歩く大人たちがちらちらと伺い見て過ぎ去っていく。

そんな視線はお構いなしで、『さいとう齊藤 ふうらい風来』は、展示のテレビに釘付けになっていた。

「おい、風来？ はよいくで？」

時刻は夕刻になるうとしてしている。パソコンのソフトを買いに来た友人達と居酒屋に行く予定だった。足の止まった風来に気が付いて、友達の一人が声をかけてきたが、風来はテレビから目を離さない。

「何見てるねん？」

再び声をかける友達に振り向かず、ミネラルウォーターを持っている手を後ろ手に振る。

「先行つとけや。後から追いつくわ」

「店は分かっつてんな？」

「前に行つたところやろ？ 大丈夫や」

「ほんなら、すぐ来いよ」

友達が走っていくのを察知しながらも、風来はテレビを見ていた。話題の事件について、メインキャスターが、辛口なゲストと共に話している。

『それにしても、この奇妙な事件、どう思われますか？』

『うーん、何かの事件に巻き込まれたんですかねえ？ 中学生の少年が一人で二ヶ月以上もどこかに出かけるとは思えないし、学校もありませんしねえ』

『それにしたって、最近の親は忙しいのねえ？ だって、こんなに長い期間子供が居なくなっていたことに気が付かないなんて、ちょっと異常じゃないかしら？』

『ええ・・・両親とも、会社の都合で長期出張が多くて、留守がちだったということですが・・・』

『でも、二ヶ月前に一度帰ってきて、自分の子供が居なくなっているのに気が付かないなんて、仕事が忙しいことは理由にならないんじゃない？』

『確かにそうですねえ。 今回の事にしても、ゴミ箱の異臭に気づいて、そのゴミの日付とかが余りに前だったから、おかしいって思っただけ、やっといないのに気が付いた。 って、ねえ』

『私は行方不明の子に同情しちゃうわ。 こんなに気にかけてもらえないなんて。 こんな両親でかいそう』

『そうですねえ。・・・ハイ。 それでは、少年の特徴を公開します。 中学一年生で、身長は153センチ、細身で、髪はかなりの茶髪です。 少年の友達からは金髪に近いくらい染めてあったとの情報もあります。 家には少年しかいなかったため、行方不明時の詳しい服装などは分かっておりません』

『でも、あれですよ。 インターネットもかなりしていたようですから、そっちの可能性も大いにありますよね』

『そうですねえ。 警察もそちらの線も疑って調べたそうなんです。 パソコンのデータが消去されていたそうなんです』

『それはまた、奇妙な話ですねえ・・・』  
『無事に見つかるの良いんですが・・・さて、お知らせの後はスポーツです』

コマーシャルに切り替わった時点で、テレビの前から動いて、友達の待つ居酒屋に足を向ける。 人通りの多い、夕方の電気街を繁華街に向かって歩き出す。 少しだけ残っているミネラルウォーターを飲み干して、専用ゴミ箱に捨て、脳裏を掠めた少年のことを、ありえ

ないと振り払う。

中学生、金髪で153センチと低めの身長。行方不明になった二ヶ月前といえば、夏休みに入ったころ。自分が、限定ソフトで異世界に飛び込んでしまったところと一致している。同じ境遇だという人間の中に、そんな特徴の少年が一人居たのだ。

だけど、全員こちらの世界に戻ったはずなのだ。現に、自分は今、こうして元の世界で普通に生活をしている。

けれど、風来はあの日以来、問題のソフトを起動していない。

異世界に行った事自体、信じなくなかった為、ソフトの販売元のホームページにも行っていない。

つまり、ゲームを買う前、異世界に飛ばされてきたメンバーと出会っていたチャットルームにも行っていないわけで・・・確認は取れない。

「・・・そんなわけ、あるはず無い。大体、パソコンのデータが消去されてるわけ無い」

自分を納得させるように、言葉が口を割った。ゲームソフトを通じて異世界に飛んでしまったのなら、ゲームソフトの痕跡が残っているはずだし、パソコンのデータをすべて消去なんて、本人以外の誰も出来るはずは無い。出来るとすれば他人のパソコンに侵入することの出来る高度な技術を持ったハッカーか、コンピュータウイルスくらいだ。それにしあって、何かしら痕跡が残るはずである。

「オレの知ったことや無い。チャットナカマでも現実は他人や。」

「そこまで心配する義理は無い。・・・無い。ありえへん」

自分に言い聞かせるかの様につぶやきながら歩く風来の目に、一軒の電気屋が映る。インターネット無料体験の大きなのぼりを見つけ、数秒考えてから電気屋に入り、無料体験のコーナーでパソコンに向かう。ここからなら、この電気屋からのアクセスが残るだけで、自分がアクセスした経路はどこにも残らない。もしかしたら、あのホームページの掲示板にゲームを手にした人間の書き込みがあるかも知れない。

少し緊張しながら椅子に座り、マウスに手を置く。

ホームページにアクセスし、個人判別の為の登録IDとパスワードを入力する。いつもの通り、会員用の画面に切り替わった。が、その後、操作をしていないのに勝手に画面が切り替わっていく。

「・・・?!」

切り替わった先の画面に映し出されるその光景に、心臓が高鳴る。マウスを動かしていないのに、カーソルはチャットルームに入室してしまう。

入室者は、先に一人居た。

ハンドルネームは『プレイジ』、ホームページの管理人、つまり、あのゲームを作ったと言われている人物だ。

画面で、言葉が語りかけてくる。

プレイジ：こんにちは。レイス。

「・・・」

自分のハンドルネーム、『レイス』で、語り掛けられた見慣れたチャットルームは、異世界の空気そのものを漂わせていた。RPGのゲームで、ストーリーの重要な場面に出くわしている、そんな気分の高揚と、緊張感があつた。まるで、ここでの選択が、今後のゲームの主人公達の運命を変えてしまう。そんな空気。

ここで、無視を通して席を立つてしまうこともできる。出来るが、この現象は一体何なのか。会話を続ければどうなっていくのか。恐怖と興味が更に混ざつた気持ちの葛藤<sup>かっとう</sup>が、数秒の間を作った。

(いやいやいや・・・！ 待て！ ありえへん・・・。この現象も何かのエラーか、プログラムミスか、そんな感じやろ・・・？ 相手が異世界の住人やなんて・・・ありえへん・・・)

異世界に飛んでしまったこと自体、いまだに信じ込みたくないと思つていた風来の指は、危険を悟りながら、初心者のようにぎこちなく言葉を話す。

空気に気圧されている事など、そこにはないかのように、文字は順調に会話をする。

レイス　：こんにちは、プレイジ。管理者がおるなんてめずらしいやん？

プレイジ　：君がアクセスしたからだよ。レイス。

レイス　：その後勝手に動いたけど？　バグか何かか？

プレイジ　：ずっとこないから、どうしようかと考えていたんだよ。君をこちらに呼ぶ方法をね。

レイス　：まだそんな事・・・冗談やろ

プレイジ　：まだ、信じていない？　ありえないと思っている？

プレイジ　：一人残ってるけど？

プレイジ　：でも、自分には関係ないか。友達面してても、所詮は他人。傍に居てもそうなんだから、チャットナカマなんてどうでもいい？　冷たいねえ。でも、だから、そちらの世界の人間は扱いやすい。

風来は心を見透かされている気がしてならなかった。沸き立つ怒りをやる場所もなく、マウスを動かすと、今度は意のままに動いてくれるカーソルを動かして、チャットを突然退室する。そのまま、足早に電気屋を後にして、友人達の待つ居酒屋へと足早に歩き出す。が、チャットの文字が焼きついて、苛立ちが収まらない。

「・・・あかんわ」

吐くようにつぶやいて、風来は携帯電話で先に店に行っている友達に連絡を取った。ごねる友達に謝り倒して予定をキャンセルし、帰路を急いだ。

## 始まり（後書き）

拝読ありがとうございました。

一つ不安なのですが、『ごねる』って全国共通でしょうか……。  
辞書で引いたら一応意味は出てきましたが……。

## 危険

自宅に戻り、ゲームソフトのスタート画面までパソコンに表示して、風来はマウスから手を離れた。画面は、黒一面、その真ん中に大きく『盗賊の書』と書かれている。これをスタートさせると、次の瞬間、異世界に飛んでしまって、ゲームの中で存在する、盗賊のような服装をしている。

前回、これをごく普通のゲームだと思ってスタートさせたときは準備も無くて大変だった。今回は、とりあえず役立ちそうなものをカバンに詰めて、斜めに背負ってから、スタートを試みることにした。荷物も異世界に持っていけるのかは謎だが、もし荷物ごと行けたら、何かの役に立つかも知れない。

「・・・」

画面を再度見て、クリックするのを少し躊躇する。

全く違う世界に飛んでしまうなど、本当に現実に有り得ない話で、できれば夢物語で終わらせたいたい所なのだ。確かに、漫画やゲームで見る世界に多少の憧れや魅力はあるが、別に現実にそこに立ちたいとまでは思わない。

静かな部屋に、時計の秒針の音だけがしばらく響いた。

行方不明の中学生をこちらに引っ張ってでもつれて帰る。それをするだけにいくんだと、風来はもう一度心に思い、ゲームをスタートした。

直後にパソコンから放出された光に包まれた後、荷物を背負ったまま、風来は異世界にいた。

居たのはいいのだが……。

(……なんや、ここ……)

それが風来の心の第一声だった。ほぼ、闇に近い中に立っていた。とりあえず、見える視界の中確認すると、服装だけは以前と同じように変えられている様子だった。

時を待たずに、ゆっくりとなじんで広がりを見せてきた視界で、周囲を確認をする。

建物の中のように、ほのかな明かりは壁の等間隔に設置されている蝋燭ろうそくからだった。大きく歪いびつな形の岩が積みあがって出来ている建物の中で、自分が立っているところは狭い廊下の様子。壁に触れてみると、湿っていて、水気が確認できる。それを確認して、初めて、風来の意識が湿気を感じ取った。暑いわけではないが、気持ちのいいものではない。重くなった黒髪をかき上げて、風来は毒づく。

「……ていうか、嫌な感じやな」

前回こちらに来てしまったときは、『最高位の魔法使い』がどこかに飛ぶはずだった自分達の軌道をまげて、安全な町の中に変えてくれている事を、風来は思い出した。つまり、あのゲームは元々ここに来るように設定されていたと言うことだ。

これがもし、ゲーム機を通じて自分がコントローラーを握っているなら、間違いなくこの建物を出る事を優先する。こういう暗い感じの場所にはなにかしら、嫌な者が居ることがゲームの定番だからだ。そして、戦うことに関してレベルが低いキャラでは、敵う相手ではないことも分かっている。

(そやけど……)

頭で考えをめぐらせて、風来は肩を落とした。出口が分からない。今しがた、異世界から飛んできたのだから。

道はとりあえず一本道。前に進むか、後ろに進むか。後ろに行くのは性格的に嫌だと風来は前に一歩踏み出そうとした。が、先に動かし左足に連動して、動くはずの右足が動かない。

「　　？！」  
バランスを崩しかけて、あげた左足を何とか地面に着き、同時に異変を感じた右足を見る。

「手・・・?!」

思わず声を上げる。右足は床から生えた手首より先の泥のような手にしっかりと握られていたのだ。手は容赦なく足を締め付け始める。「いつてえ。まじ痛いって!! 離れる!!」  
振り解こうと足を動かしても、泥の手は微動だにしない。それどころか、もがけばもがくほど、締め付ける力が強くなる。

段々痛みに焦りを覚え始めた風来の脳裏に浮かんだのは、一本のナイフ。異世界に飛んだとき、『盗賊の書』で飛んだ自分はそれなりの装いに変わっている。確か、腰にナイフがあっただはずだ。

無我夢中で柄を探り当て、鞘から引き抜き、床から出ている手首に刃を走らせる。

床と切り離された手は、音もなくボロボロと崩れ、やがて腐食を始める。そんな泥の手首の変化を確認してから、風来は荒れていた呼吸を整えた。ここは、確実にまずい。それだけが、理解できていた。恐る恐る掴まれた足首を動かしてみると、思ったほど重症ではないようだ。曲がるし、回せるし、痛みも落ち着いてきた。ほっと一息ついて、ナイフを鞘に戻したら、異様な気配を察知する。見たくないが確認せざるを得ない。背後の道の奥に、目を凝らす。床が、うごめいていた。

いや、無数の泥の手首が、明らかに近づいてきていた。

「・・・マジで？ そら無理や!」

自分でも顔が引きつっていることが分かるくらい、引いて言葉を吐いてから、風来は廊下を走り始めた。

走って、走って、見つけた階段を駆け上がる。螺旋らせんのように続いていた階段が様子を変えたのに気がついて、風来は足を止めた。たどり着いたのは、天井が大きなホール状の階。どうやら最上階らしい。階段から離れ、状況を確認するために少し歩く。だだっ広い階は蟬

燭が設置されている壁自体が遠いため、更に視界が悪い。泥の手はもう出てこないらしいが、石造なんか飾ってあったら、それが敵になって襲ってきそうだと、現実世界のゲームを思い出して苦笑いした。

異世界に來ると服装も変わるが、潜在能力もうんと引き出されることは、以前に來た時に確認していたが、まさか自分がこれほど走れるとは思っていなかった。現実の世界でこれが出来たら世界新記録は間違いない。

泥の手を振り切って安心したせいもあって、そんな事を考えたりしたが、その安堵感は次に襲ってきた感覚に一掃された。変わりに、背中を寒気が走る。

何か居るのだということが、直感で感じ取れた。冷や汗というのが初めて頬を伝う感覚を覚えながら、風来は気配の方に目をやった。

広い空間になっっているフロア、その中央に、気配の元が居た。

それに気がついた直後、中央に設置されていた数個の蠟燭が一斉に火を灯した。並んだ蠟燭がほのかに照らし出すそこには、少し段差があつて、その上に王座のような椅子があつた。

暗くてよく見えないが、確かにそこに人が居る。

「こんばんは、レイス」

かけられた言葉に思い出したチャットの始めの言葉が重なり、同時に、認識する。

あれが、プレイジだ。と。

「・・・こんばんは、プレイジ」

風来は気圧されているのが癪で、あえてチャットと同じ言葉を返事とした。その意識を察知したのだろうか、プレイジが愉しそうに微笑かに笑った。

いや、正確には暗くて視覚で見て取れて居ない為、笑ったと感じたといったほうが確実だろう。

「そんなに怖がらなくてもいい。危害を加える気は、今のところ

は、無い」

(・・・今のところは・・・ね・・・)

僅かに強調されたかに聞こえた言葉を、風来は心で繰り返した。そんな意味ありげな言葉を含ませるといふ事は、今後どうなるかは分からないという事だ。

警戒して黙っていると、プレイジが動く気配を見せた。足元の部分にあまつている布が、床を擦る音が僅かに耳に届いた。ゆっくりと段差を降りて、レイスの前に立ったプレイジの姿を見て、思わず声を出す。

「子供・・・？」

見下ろした姿は身長から考えても、10歳位の子供だった。黒い布で体を覆い、フードで深く頭を覆っている為、顔はまだはっきり見えないが、相手が自分より小さいという事に多少の余裕が生まれてくる。

「なんや・・・こんな小さい奴やったんか・・・」

闇と気配に勝手に想像していた姿との余りのギャップに、素直な感覚を乗せた言葉が口を割った。その言葉に、プレイジはフードの陰から紫の瞳でレイスを見上げ、今度は確実に笑った。

「今、だったらなんとかなるかも。って思った？」

言葉が先か、レイスの前髪が僅かな上昇気流に煽られたのが先か？その直後、レイスの数メートル後ろで爆発が起き、爆風に背中からあおられる。

「・・・?!」

驚いて、後ろを振り返る。立ち込めた土煙はあっという間に外気に吸い込まれ、壁に開いた大きな穴が視界に映る。最初に触った岩壁の感触は、かなりの巨大さを感じさせるものだった。それが完全に穴を開けて、見える夜空に三日月が姿を見せていた。冷たい風が、吹き込んでくる。

「今のは、ほんの下級黒魔法。・・・お前じゃ、どうにもならない」  
言葉をかけてきた紫の瞳を再び見下ろしたレイスは、唾を飲まずに

はいられなかった。これが、プレイジの放った魔法。一瞬の出来事、一瞬の破壊力。対処出来る出来ないの話以前の問題だ。

間をおいて、レイスは自分を落ち着けるために深く息を吐いた。

「別に、どうこうする気もないけど・・・」

そう言っただけで、両ポケットに手をつまむ。ゲームを起動する前、ポケットに入れておいたものが、ちゃんとある事を確認しながら言葉を続ける。

「どうこうされる気も無いんだけど・・・。オレはアイツを連れ戻しに來ただけやし。なんて言っても、逃がしてはくれへんやんな？」

「オレがお前をどうにかすることは出来ても、お前には出来ない。」

ここに來た時点で、お前はオレの言うことを聞くしかないという事だ」

「・・・オレには自由が無いって事や？ そんなじゃ、ま、これをお近づきの印に・・・」

そう言っただけで、レイスが左のポケットから出したのは数個の爆竹。右のポケットから出したのはライター。当然、こちらの世界の住人のプレイジは初めて目にする。導火線に火を灯す姿を不思議そうに見る。プレイジに、それが稼動するぎりぎりのところで放り投げてやる。瞬間、けたたましい音と、暗闇の中で明るすぎる火花が散る。さらにリュックのポケットから取り出した煙だまの花火を持てるだけ持つて、火をつけ、投げ散らかす。効果が切れそうな爆竹も、もう一回、数個火をつけ追い討ちをかける。

煙だまの煙も、爆竹も、たかが子供だまし。そんなこと、元の世界では常識で、当たり前だ。だが、誰しも初めてそれらを耳に、目にしたとき、ものすごく驚き、少し、恐怖した事を覚えている。安全なものだと分かっているにも恐怖を与えるそれらは、ほんの一瞬でも相手の動きを鈍らせ、判断を遅らせてくれるだろうと、レイスは考えたのだ。そして、それらが、思惑道理の効果を発揮してくれている数秒の間に。

レイスは先ほど開いた壁から夜の空へダイブした。

## 危険（後書き）

拝読ありがとうございます。

魔法使いに花火って…ねえ？（苦笑）

でも、爆竹って不意に音聞いたらびっくりしませんか？

小心者の作者だけでしょうか。

花火の仕組みを知らなければ、花火は魔法のようだと思ったことがある作者です。

## 魔法使い

僅かに、甲高い音が発生する。

次いで、魔法力による上昇気流が彼のフードを煽り、脱がせた。

闇には溶け切らない赤黒い髪が、落下していく肢体を見下ろす顔の両側で揺れた。

「…駒にも玩具にもならなかったな…」

濃く深い黄金色の球体が下へ向かって開いた手のひらに宿った。

たった5ミリにも満たないそれは、強い破壊力を持つ魔力が凝縮された魔法の姿だった。

その魔法が構成され始めてすぐ、魔法力を断ち切るような強い横風が上空を駆け抜けた。

「っ  
っ」

以前、夏休みにこちらに来たとき、身体能力も、潜在能力も、うんと引き出された自分は町の屋根から屋根に飛び移れたし、普通じゃ出来ない動きが出来た。自分が、知りえる『盗賊』というものの動きが出来ていた。

何もせずに殺されるより、選択した行動。一か八かで、三日月に向かってダイブした体は、重力に従い、落下を始めた。

建物は、思った以上に高かった。

周囲は、うっそうと木々が多い茂る森。その木々の刃のような枝に身を切り刻まれながら、レイスはただ、身を縮めることしか出来ずに落下した。

何度も何度も木々の枝にぶつかり、折りながら、時には太い枝にぶつかり、呼吸が止まる位の衝撃に襲われた。

最後に一番大きな衝撃が来た後、ようやく落下が止まった。着地どころか、受身すらまともに出ていないわけが無い。錯乱状態のまま、

天地を探し、両膝、両手を地に着いたら、上手く取り入れられない酸素を吸い込もうと、脳も体も必死になる。

むせ返りながら呼吸を繰り返していると、今度はなんともいえない気持ち悪さがこみ上げてくる。流れのまま吐き出すと、口の中は鉄の味で一杯になる。たまらず、唾液で絡めてそれらを吐き続ける。

その間も、激しく揺れている感覚が止まらない脳が、酷い眩暈を誘い、更なる吐き気を催す。

森の中は蝋燭などなく、弱い三日月の光も差し込んでこない真の闇だった。

短く荒い呼吸音が、闇に吸い込まれる。感覚は僅かに正常に戻り、地に付いている腕が二の腕まで湿った落ち葉に埋まつていることによくやく気が付く。これが無かつたら死んでいたかもと、頭のどこかでそう思った。

近くの木の枝が、小さな音を立てて折れた音で、そちらを見る。落ち葉のクツシヨンの上に、自分の鞆が今頃落下してきていた。それに体勢はそのまま、四つん這いでたどり着く。運が良かったのか、どこも破損せず、無事なりユックサックを背負う気にもならず、ひと時、眺める。体のどこが痛いとか、そんな局所的な痛みなら、処置も出来たかも知れない。だが、今、脳が訴えてるのは、ただ、だるさ。体を動かすのに、これほど精神力を使うことは皆無に等しい。

(・・・生きてる・・・)

相変わらず気持悪いが、眩暈も先ほどよりはマシになった。生きている限り、じっとしているわけにも行かない。本能から、思うより早く、少しずつ体を動かし始める。

まず、指を動かし、それから腕に力を少し入れてみる。それから、ゆっくりゆっくり、いつか来るかも知れない痛みにおびえながら上半身を起こしていく。鞆の紐を掴み、すぐ脇の木に背中を預け、空を仰ぐ。そこで、ようやく悪い視界の中、辺りを見回すことを思い立つ。

数歩先は木。360度、木。それも、かなり背の高い木ばかりで、

それに絡んで幾つもの気味の悪いツタが絡みあっている。地面はすごい量の落ち葉に埋め尽くされていて、座った今は、腰まで埋まっている。それなのに、木々の上の方は葉が沢山ついていて、月明かりが差し込むことを一層、拒んでいる。

そう遠くないところで、夜だというのに鳥の羽ばたく音も聞こえた。鳴き声も聞こえるが、決して美しい鳴き声とはいえない、気味の悪い不安を煽るこえだ。

動かなければ。

とにかく、動かないと。

そう、思う心に反して、脳は体を動かすことを同意してくれない。気味の悪い鳥達の声も動きも止み、辺りはまるで生き物が居ないかのように静まり返り、静寂に覆われる。

嫌な空気。

薄く浅い呼吸を繰り返し、意図せず目を閉じそうになった時、ふと、名を呼ばれた気がしてそれを中断した。

(・・・空耳?)

もう一度、闇に耳を凝らす。

『聞こえる? レイス』

確かに聞き取れるその女性の声には覚えがあった。『最高位の魔法使い』の声だ。

「・・・スイ?」

闇の中、自分がとうとうおかしくなったのかと思いつつ、声の主の名を口にする。と、闇の中から返事が返ってくる。

『ああ、よかった。無事なのね?』

かけられる人の声に、少しだけ口元が緩んだ。

『今、あなたの精神に語りかけているの。状況は?』

「最悪」

『レイス、以前あなたが泊まった部屋を覚えているかしら?』

「・・・記憶力は悪いほうやない。・・・と、思うけど?」

『なるべく、鮮明に部屋の様子を思い浮かべて欲しいの。こちらに

あなたを移動させるわ』

言われて、半信半疑なのはもちろんだが、それに賭けるしか手はない。レイスは目を閉じ、以前泊まった部屋を思い浮かべる。

来客用だとは思えないそろった調度品、それらに飾られている高そうな装飾。縁に綺麗な彫りが入っているベッド。そのクッションは最高にやわらかくて、テーブルは綺麗な石で出来た、傷も埃も一つもないもので、足元は靴で踏むのが申し訳ない柔らかな絨毯……。それから……。思い描いて、思い描いて……。

まぶたの向こうが、明るいと感じたレイスは、恐る恐る目を開けた。暗闇の中に居たせいで、光がまぶしすぎて、なかなか瞼が上げられない。

ようやく開いた視界の中に、白い法衣をまとった女性が居た。電気がまぶしいだけではない、彼女の白が、更に視界を眩しく見せていたのだ。

顔を見上げたが、光に慣れていないせいか、焦点が定まってくれない。

「……………」

何か言葉を口にしようとしたレイスの額に手をかざして、彼女が微笑んで語りかけてくる。

「もう、大丈夫よ。少し、眠りなさい」

言葉を聞き終えたレイスは、深い眠りに誘われた。

魔法使い（後書き）

拝読ありがとうございました。

## 現状

各国の王が出席した会議が、つい先ほど終了した。全員が出て行くのを確認してから、一番最後に部屋を出たレオンハルトは小さくため息をついた。

彼、『レオンハルト：ヴァルス』は、世界を統括するスカイゲートの城の王である。

晴れ渡った穏やかな空を連想させる髪色と瞳、過去は剣士として名を馳せた、鍛え上げられた体躯。

強さと優しさを持ち備えていると評価されるが、本人は大きな会議が一つ終わるたび、つくづく自分が王というものに合っていないと胸中で毒づいていた。

先ほどまでの会議の主題は『黒魔法使いプレイジについて』

黒魔法についての彼の才能は秀でていて、師について学んでいたころからその進歩は目を見張るものがあつた。

だが、秀でた力は、元々彼が持ちえた探究心と合わさり、外部に漏らすことを禁止としていた禁断の魔法を手にしてしまった。それから、あとは、彼自身が気づかないうちに彼の心が『黒』の引力に飲まれていつている。持ち備えた器用さで、その力を異世界にまで影響させ始め、少々の事では自体は収められなくなっていた。

各国とも、プレイジを抹殺することを早々から話しに盛り込み、当然のように戦いに、世界の魔法使いの頂点の証である、最高位の称号を持つ、『スイ：レン』を狩り出せという。

魔法使いには、魔法使いを当てると。

そんなに殺したかったら自分の国で何とかすればいいのに。

レオンハルトは喉まで出たその言葉を、幾度飲み込んだことか。だけど、どの国もプレイジの黒魔法を恐れて兵を出すどころか、足

踏みをするだけだった。

事実、数百ほどの兵がブレイジに襲い掛かったとしても、彼の魔法の前にはあつという間にやり返されてしまっただろう。そんな馬鹿げた事は、さすがに誰もやるうとはしないが。

（・・・いや、ある意味それくらいやるうと言いつく国があつたほうが世界の活力にはなつたかもな・・・どうせ止めるけど）  
廊下を歩きながら物思いに耽る。

どこの国も、手を出した後の報復を怖がって何もしようともしない。たつた一人の黒魔法使いに対しての、各国のなんとも情けないことか。

だけど、それは自国も例外ではないと、レオンハルトは先ほどのため息をついた。勝てないと分かっている相手に兵を向けて、無駄に命を落とさせるなんてばかげている。それはただの命の無駄遣いなだけであつて、称えられる事ではない。

自室に戻ると仰々しい上着を取り装飾品をはずして、ソファに身を預ける。襟元を締めている飾り布を緩め、シャツのボタンを2個ほど外すとようやく肩の力が抜けて、深い溜息が落ちる。会議のやり取りが、もう何度も頭の中で勝手に繰り返されている。

『魔法使いの最高位であるスイ様なら、ブレイジと渡り合えるのでは？』

『過去、魔族の主を倒した実力のあるスイ様なら・・・！』

王達にさえ、『様』を付けられる魔法使いの頂点に立っている魔法使い、『スイ：レン』は、レオンハルトの城、スカイゲートに住んでいる。彼女の実力は、レオンハルトもよく知っている。『魔族の主を倒した』とき、共に戦っていたのだから。

彼女も自分も稀に見る特殊な種族で、不老長寿の命をそれぞれの属性の精霊達に授かっている。それと同時に、精霊達の力も与えられ

ているので、並の人間よりずっと能力は高く、秀でている。

そんな人間に対して、各国の期待を集めるなどというのは無理な話であって、だけど、国々をまとめているレオンハルトに万が一のことがあつては困るといふ、各国の思惑もあり、視点は、スイ一点に注がれているのだ。

スイは頼めば必ず動く。そういう性格を皆知っているからこそ、皆、彼女に願いを集める。

不老長寿の種族には、レオンハルトと、スイと、あと一人。『クレージュ：クライシス』という男が居る。この三人以外は、すべて戦いにその命を絶たれてしまった。不老長寿は不死ではないのだ。それをどうも、理解してもらえていない。

『しかしご存知の通り、スイは過去の戦いにおいて魔法力をかなり消費してしまっていて、回復にはまだ時間がかかる状況に居ます。』

『その彼女をプレイジに向かわせるのは、あまりにも分が悪すぎる話です』

『『風竜の騎士』は？ まだ行方不明なのか？』

『・・・全力を尽くしていますが、未だ、行方不明です。申し訳ありません』

風竜の騎士・・・つまりクレージュのことをつつかれて、レオンハルトは苦い思いをした。彼もまた、過去の戦いで共に戦った一人だが、現在行方不明である。ひとところじっとしていられないのは、彼の昔からの本質だった。レオンハルトは今更彼にずっと城に居るとは言わない。だが、プレイジ討伐に、当然彼の名も挙がっているのだ。

まあ、城内に彼が居たところで、討伐の命を下すかといわれれば、答えは「くださない」なのだが、どちらにしろ、その放浪癖のせいで、現在も行方知れずという結果だ。

結局、すべての国をまとめ上げているはずのレオンハルトが、一番

突かれ放題、苦い思いをして、会議は前に進まず終わってしまった。  
「オレが動くわけにもいかないしな・・・」

もう一度ため息をついて、立ち上がったレオンハルトは、部屋の窓を押し開けた。秋の風が舞い込み、晴れ渡った空の色の髪を流していく。

ようやく落ち着いてきた空気の中、ドアをノックする音が響いた。あまりに楽な姿すぎて、普段から『王らしくない王』のレオンハルトも、さすがにあせる。そんな部屋にドアの向こうから響く声はよく知った声だった。

「レオン、私よ。入っていいかしら？」

「スイ？」

少し急いでドアに寄り、ひき開ける。そこに、白い法衣、白い髪ของ 最高位の魔法使いが微笑んでいた。

とりあえずと、部屋に迎え入れ、ソファを勧める。

「一息ついてたところだったのね？ ごめんなさい。」

姿を見て、スイは申し訳なさそうに言葉を口にした。レオンハルトはそれに、緩やかな笑みを返す。

「いや、別にかまわないよ。それより、今日はあまり部屋から出歩かない様に言っておいたはずだけど？ 姿を見られたら、プレイジについて声を掛けられてしまうから・・・」

「ここに来るまでに5人ほどに言われたわ。 適当に返しておいたから平気よ」

そういつてスイが小さく笑った。こういった臆すことない一面は彼女の魅力の一つだ。

そのスイの顔色が少し悪い事に気が付いて、レオンハルトは彼女の体調を伺う。

「どうかした？ 顔色が余り良くないけれど・・・？」

「・・・実は高度の転移魔法と、回復魔法を使ってしまって・・・」

「どうして...あれほど魔法力の回復に時間を費やすようになって言っ

ておいたのに…！」

「ごめんなさい、ちゃんと理由はあるの。以前、異世界から来た子達を覚えている？あの子達の中に居た一人、レイスの気配をプレイジの近くに感じ取ったの。それで急いで保護をしたのよ。そのために転移魔法を・・・保護をしたら、彼、命が危なかったのよ。それで・・・」

「・・・それで、回復魔法を…？確かに回復魔法は誰それと使えるわけじゃない。けれど、即座に完全回復させなくても良いなら、医師に見せることでも人間の体は回復する…！」

「本当に危なかったのよ！見捨てるわけにいかないじゃない！たえそうでなくても、治療できる私が居るのにそれを放っておけとでもいうの?!」

強く言い返されてレオンハルトははっとした。スイを氣遣うあまりとはいえ、酷いことを口走ってしまった。

ここ数日、過密な日程が詰まっていたせいもあり、疲労のため視界が狭くなってしまっていたようだ。

そんなことではいけないと外では気持ちを立て直しているつもりだが、よく知った相手で気が緩んでしまっていたらしい。

考えなくても分かるはずだ、自分が治療の術をもっているなら、傷ついた誰かをそのままにしておくなんて出来るはずもない。

傷ついた相手、彼に遭遇したスイの事を考えるより、スイを心配する自分を優先してしまった落ち度の結果だ。

「…ああ、そうだよな。すまない」

「…私こそ、キツイ言い方してしまつてごめんなさい。…プレイジのせいでまったく関係ない彼があんなに傷ついてしまつて・・・なんだか、申し訳なくて・・・」

「それは、スイが一人で抱え込む事じゃないよ」

一瞬、部屋の空気が沈んだ沈黙に包まれた。その中でスイが立ち上がり笑顔を見せる。

「休んでたところにごめんなさい。レイスがきた事を報告しなきゃ

「思ったただけだから、部屋に戻るわ」

そういつてドアに向かって歩き始めたスイに、見送る形で後に付いたレオンハルトが声をかける。

「魔法力が尽きれば、また、魔法を使うのに生命力を使わないといけなくなる。あまり無茶をしないでくれ」

「無茶はお互い様でしょ？ あなたもこの所忙しすぎるわよ、レオン」

言葉に驚いて返す言葉を失ったレオンハルトに、スイは緩やかな笑顔を見せた。

彼女の長い髪と、床に引きずるほど長い法衣のすそが見えなくなり、ドアが閉まっても、レオンハルトはしばらくそこから動けなかった。城内の誰もが見破れない自分の疲労を見抜かれてしまった事に、本気で驚いていたのだ。

今も昔も、彼女だけには何もかもを見透かされる。

「・・・ほんとに、かなわないな」

僅かに笑みを含んだ咳きが、溜息と共に漏れた。

## 現状（後書き）

拝読ありがとうございました。

UPまでに何度読み返し修正するんだろうか…。  
軽く2時間はそうして過ぎていました。

## 風竜の騎士

赤い法衣の脇に、一冊の書物を抱えた少年が客間に忍び込んだ。少年の髪色はその赤に不釣り合いなほど金髪だった。反して瞳の色は黒い。

もともと、百科事典ほどの大きさのある魔道の書はそれなりに大きい物だが、少年の幼い顔つきと体つきのせいで、より大きくみえた。幾つもの窓から秋の緩やかな光が差し込み、部屋中を柔らかかに照らしていた。部屋のベッドに見える黒髪に、そつと歩み寄って顔を覗き込む。

大変傷ついて、一時は命も危なかったらしいと聞いたレイスの寝顔は穏やかだった。傷も完治されて、跡すらない。

数ヶ月前、初めて顔を合わせたレイスとは、チャットで頻繁に顔を合わせていた。定期的に会話をしていたので、もう、ずっと知り合っていたような感覚を覚えていた。チャットルームの中では目立たなく存在感のある人間で、居ないと皆が気にするような存在だった。そんなレイスが、以前こちらの世界に飛ばされてしまったと知った瞬間に、すぐにもこの世界に帰ることを要求し、全員、帰る事が決定した。

誰もが同じ意見だった。現実でどれだけ嫌なことがあつて、チャット仲間と一緒に居心地がいいと言っても、存在自体が全く違い、知り合いすら居ない異世界に居座り続けたいとは、誰も思っていないなかった。

まして、誰もが最初、作り物のゲームの世界だと思い込んでいたのだから。ここが全くの別世界で、作り物ではない世界だと知ったときの驚きは想像を絶した。

そんな中、ソルだけ、嬉しくて声を殺して笑った。

帰る準備が着々と進められ、魔法を使う時になってスイが皆に言い渡した。

『帰るべき場所をイメージして、帰りたいと強く願って。その意思があつて、初めて私の転移魔法は成功する』

俺は願わなかつた。帰りたいと思える場所が無かつたから。

皆は帰って、俺はこつちで生きる。

そう思つてたのに。

「・・・どうしてまた来たのさ？」

チャットハンドルネーム、そして、異世界での名、ソルは寢息を立てるレイスに言葉をかけた。

魔法で穏やかに眠り続けているレイスからは、返事はもちろん返つてこない。沈黙の間が、ソルの中に僅かに疼いている思いを大きくした。

けれど、ソルはそれを押し殺す。元の世界で、自分にとって期待という思いは、いつも打ち砕かれていた。だから、誰かに打ち砕かれる前に自分の中でそれを壊すことは、当たり前になり始めていた。起きたレイスが、期待通りの言葉をくれるなんて誰も保障してくれない。だつたら、最初からそんな物もつていないほうがいい。

ソルが部屋を出ようとしたその時、窓の外のざわめきが微かに響いてきた。いつもは静かなスカイゲートの城で、ざわめきなどめずらしい。

ソルはそつと窓から中庭を見下ろし、騒ぎの種を探した。そして、驚き、見開いた瞳を輝かせた。

「ドラゴンだ・・・！」

城の広い中庭には、一部だけ、芝生の場所がある。それは、稀に帰ってくるただ一人の竜使いの着地の場所だつた。周りの植物が強風で負けてしまわないよう、巨大な竜がゆつたりと降り立ち、その背中から青年が芝生に着地した。

淡い水色の髪色と瞳、例えるなら浅い水溜りのような色だろうか。澄んだ綺麗な髪色だった。

瞳は少し大きくて、そのせいで童顔に拍車がかかる。竜を見上げて微笑む表情は少し幼く見えた。

青年が首の辺りを優しく叩いてやると、竜は頭を下げ、青年と頬を擦り合わせる。そして、空気に溶け込むように姿を消した。

芝生の周りには兵士や女官らが集まって、ざわめきをもらしていた。

「クレージュ様だわ」

「今までどこに居られたんだ？」

「何度見てもすごいよな、あの竜」

「帰ってこられたのかな？ またすぐ出て行かれるんじゃない？」

「……！」

取り巻きのざわめきが色を変えて一瞬大きくなって、次の瞬間、静まり返った。姿を見つけて駆けつけたスイが、クレージュに歩み寄ったからだ。

柔らかな風がクレージュの淡い水色の髪を通り、スイの長い髪を通り抜けていく。

「スイ！ 迎えに来てくれたんだ？ うれしいなあ」

クレージュが誰もに好評である人懐っこい笑顔になると、集まってきた女官達が見惚れてため息をついた。ただ、スイ一人だけが、クレージュを見上げて表情を緩めない。

「あれ？ もしかして怒ってる？ いつもの事じゃん？」

そう軽い言葉を続けるクレージュの頬をスイの右手が叩こうと動くが、図ったように後数センチのところまで手首を捕まれる。

「……相変わらず気の強い事で」

にっこりと笑ったクレージュに初めてスイが口を開く。

「クレージュの放浪癖なんて、怒る対象になっていないわ。プレイジの側に近づいたでしょう？！」

スイの言葉に周りのざわめきが再び起こり、クレージュのニヤついた表情も一瞬硬くなる。が、その表情と声色はすぐに茶化したもの

に摩り替わる。

「さつすが、最高位の魔法使い様。魔法力を持つてる人間は駆け落ちもできないなあ。バレバレじゃん？ オレの行動。探るくらい心配してくれた？」

「誰もあなたの心配なんてしてないわよ。私は、レイスの転移をするとき、傍にあなたの魔法力を感じ取っただけで……」

「えー、心配してくれてないの？ それはそれで寂しいなあ」

「人の話は、最後まで聞い！」

捲し立て始めたスイの唇に、クレージュが自分の人差し指をそつと押し当て、言葉を堰きとめた。あまりに意外な行動にスイが毒気を抜かれると、唇から離れた指に自分も軽く口付ける。

「帰ってきたのに、怒ってばかり。すねちゃうよ？」

「……もう、そうやってすぐに茶化す！」

「小言はたつぷりレオンにもらうよ。疲れてるんだろ？魔法力が前より落ちてる。それなのにここまで出向いてくれてありがとう。部屋まで送るよ」

「…相変わらず察しはいいのね」

「風が教えてくれるからね」

会話をしながら城内に入っていく2人を見送った兵士や女官達が、眉を下げて会話をする。

「相変わらず、手が早いというかなんと言うか……。すごいなクレージュ様」

「ホントだな。だけど、オレには耐えられないけどなー」

「何が？」

「あら、知らないの？ スイ様は、純潔を失うと精霊の力がなくなってしまうという噂よ。キス一つもだめなのよ」

「え？ じゃあ、相思相愛でも手が出せないって事じゃないか」

「そうなんだ。だから、オレには耐えられないって」

「クレージュ様はまだいいわよ。ああして気持ちを表現できるんだから」

「そうよね、一番つらいのはレオンハルト様だわ。王だもの、手

どころか言葉も出せないわ」

「つらい恋ねえ・・・」

「切ないわ・・・」

女官達が夢と憧れをこめて遠い目をするのを見て、兵士達は複雑な表情で顔を見合わせた。

## 風竜の騎士（後書き）

拝読ありがとうございます。

城に仕える人たちはきつと仲がいいと思うんです。

通りがかりとか休憩室でちょっと噂したりとか…

休暇が重なったら仲間内できつと、広場でバーベキューとかしてる  
と思います。

そういう本編にない楽しげなところも想像したりします（笑）

クレージュが城に帰ってきている。

レオンハルトは昼過ぎにはその報告を受けていた。クレージュには出かけることには口うるさく言わない代わりに、帰ってきたら必ず報告に来ることを約束させていた。

だが、待てども待てども一向に姿を見せない。

もしかして、またすぐに出て行ってしまったのではないかと思い、レオンハルトが彼の部屋を訪れたのは夜遅くになってからだだった。いくらノックをしても返事が無いので、ドアを開けて部屋に踏み込む。

姿を探して寝室を覗き、ベッドで気持ちよさそうに寝息を立てているクレージュを発見して、思わずため息をつく。

「起きろ」

もちろん、声をかけただけでは起きる事は無い。それを知っているレオンハルトは、クレージュの頬を掴むと強めに引っ張った。

「んん…いひゃい…」

「おはよう。夜だけだな」

痛みに涙目で起きたクレージュは間近で聞こえた声に、はっとしてレオンハルトを見上げた。笑っているが明らかに怒っているレオンハルトと目が合った瞬間に、ごまかすように笑う。

「・・・あれ？ レオンじゃないか どうしたんだ？」

「どうしたんだじゃない！帰ってきたら報告にくらい来いって言うてるだろう！せめてこれくらい守れ、何回言ったら分かるんだ？」

「ごめんごめん、行こうと思ったんだけどさ、つい寝ちゃって・・・」

「それから、プレイジのそばに近づいたそうじゃないか。何を考えてるんだ」

「何って…ほら、…放っとけなくて？」

「何かあつてからじゃ遅いんだぞ！」

「ちゃんと無事に帰ってきたじゃん」

「帰ってきたから言えてるんだよ！言えない状況に居たらどうするつもりだ」

「…はい、すみません…、…とか言つて、自分も絶対助けるくせに…」

「何か言つたか？」

「いえ、何も…」

「お前に万が一があつてみる、今の均衡が崩ればプレイジはますますやりたい放題になるし」

「まー、そうカリカリすんなつて、折角のいい男が台無しだぞ。そつだ、お土産があるんだぞ、レオン」

「またお前はそうやって逃げる・・・話はまだ終わつてないぞ」

「いそいとベッドを逃げ出してクレージュは寝室を出る。レオンハルトが後を追つと、クレージュは早々と『お土産』を棚から出してきてテーブルの上に運んでいた。

「今日、仕事は？」

「いいよ、もう大方済ませたし明日でも平気だ。・・・そんな物出してから聞くか？」

ワインボトルをテーブルに出しながら聞くことでは無いだろうつにと、レオンハルトは呆れて笑つた。

クレージュだからこそ、許される。そんな独特のものを、彼は持ち合わせている。風の力を持つためか、非常に場の空気に敏感なクレージュは、場を悪いほうへと流したことはあまり無い。

「仕事詰めもいいけどさあ、疲れすぎるといいことないぞ」

「大して疲れてなんていないさ」

「目に見えるところを隠すのうまいからな、レオンは。でも人の変化つて、しばらく離れていたほうがよくわかる事もあるんだぞ。お前少しやつれたよ」

「そうか？」

「うん。痩せた。だから太れ」

綺麗な曲線を描くワイングラスに、赤いワインがゆるりと注がれる。そして、悪びれず自分の前に座って、グラスを軽く持ち上げたクレージュの笑みにレオンハルトの怒りも静められる。こうやってくだけた雰囲気で話せる人間は、レオンハルトの周りには少なかった。

「とりあえず、無事帰還したことに乾杯だな」

二人はワイングラスを掲げた後、一口、喉を潤した。少し甘めの後味を残し、すばらしい香りがいつまでも続く。一緒にお皿に出したチーズを食べながらクレージュが言葉を切り出す。

「いいワインだろ？最高峰の地方でお土産に買ってきたんだぜ。あ、買い物ばかりしてたわけじゃないからな？ちゃんとやる事はやってきた」

「やる事？」

「そう、南の方角の魔物退治。 あっち方面、ちょっと問題になってたじゃん？ 陸路じゃ兵の皆が行くの大変な場所だし、こりゃ、空から行くしかないかなと思って。 とりあえず大型の噂がついてる所は手当たり次第につぶして来たよ」

「そうか、ご苦労様。 怪我は？」

「魔物ごときに怪我なんてありえないね。 楽勝」

「いつも言わずに出て行くから、どの辺に何をしに行っているのかさっぱりなんだが・・・」

「だって出て行くときは何も考えてないから、行って来るって言いた方が無いんだよな。 ちょっと散歩程度の気持ちで出て、思い立って動くんだしさ」

「散歩の長い犬の飼い主は気苦労が増えるよ」

「悪い事はしないし、いいじゃんよ？」

久々に合った旧友。そんな雰囲気ワインも進み、会話も途切れることはない。

クレージュが外出していた間に、双方にあった苦楽を話し分かち合う。半々とまでは行かないが、それでもこうして会話をすることが、

色々な事の最高の薬になることをお互いが理解していた。その証拠に、数時間も経つと、久しぶりにレオンハルトの顔に自然の笑みが戻ってきていた。

そうして些細なことを話し終えると、自然と話題はプレイジの話、国同士の話が変わってくる。

ふとクレージユが真顔になってレオンハルトをまっすぐに見た。

「スカイゲートの城の王として、風竜オレの騎士に下す言葉があるんじゃないのか？」

つまりは『プレイジ討伐の命』を示すその言葉を聞き、レオンハルトはクレージユから目をそらした。

「・・・確かに、お前ならプレイジと渡り合えるかもしれない。

だけど、一人で行っても必ず勝てるという保障はない・・・」

「かといって、スイは、今は当然無理だろ？」

「分かっているんだ、分かっている、居る。・・・だけど、俺はもう、仲間を失いたくない。何かあればすぐに狩り出されるのはオレ達の中の誰かだ・・・。そのたびに、俺は動く事も許されなくて・・・。ただ、誰かを戦いに向かわせるだけだ。先に死んでいった仲間も、俺が殺したも同然に思えてくる」

搾り出された声にクレージユは奥歯をゆるくかみ締めた。クレージユは持ちえた風の力のせいで、風が運んでくる他人の内情を肌で感じてしまう。今のレオンハルトからは重く痛い風が吹いていた。

「先に逝ってしまった奴らが戦いに行くときに、俺、居合わせないこと多かったからな。居たところで、あいつらのほうが強かったし手出すなって怒られただろうけど...。レオンがそう言っただけを責めるなら、俺は自分の実力の無さに悔いて生きなきゃならないな」

「お前には責任は無いよ」

「俺も、同じ事を思っている」

即答された言葉に、レオンハルトはクレージユを見た。正面には、いつもと変わらず笑顔のクレージユが居る。

「な？ きつとスイも同じ事を思っている。皆同じだって。堂々胸を

張っててくれよ、王様なんだからさ。レオンがそんな顔してたら、皆が不安になるだけだぞ！」

「・・・ああ、そうだな。全くだ・・・ありがとう」

「酔いが覚めてきたな、まだ飲めるだろ？」

ぶつかつてくる風を避けながら、クレージュは違うワインを取り出すためと棚に向かった。背を向けた立ち居地で、僅かに眉を寄せ、レオンハルトに顔を見せる次の瞬間のために、笑顔の準備をする。なにより、誰より、風竜の騎士が人気を集めるのは、その平和を運ぶ雰囲気のためだった。彼に笑顔を分けてもらう人は、城にも町にも溢れかえっている。

クレージュは振り返ると、穏やかな笑みで重い空気を振り払う。

「切り出しといてなんだけど、ややこしい話はこれで終了！」

言いながら、レオンハルトのグラスにワインを注ぐ。風は、まるでクレージュの意思を継ぐように、穏やかな空気を創り出した。

## 風竜の騎士 2 (後書き)

拝読ありがとうございます。

小ネタです。

スイに「小言はレオンにたっぷりもらうよ」とっていたクレージユさん。

レオンの小言もさらっとかわしました。

その辺のところ、どう考えてたのかクレージユに聞いて見ました。返事はこうでした。

「え？小言なんてもらう気あるわけないじゃん」  
「こやつ、計画的犯行でした…。」

## 策略

結果として、レオンハルトはクレージュにプレイジ討伐の命を下さなかった。

過去、大掛かりな戦い時には同じ種族の仲間を3名失っていた。3人とも、精霊の力を授かっていて、長い長寿の人生を共に生きるはずの仲間だった。

小さなことには『わが国の優秀な兵をお使いください』なんて、媚を売りに来る王も多いのに、敵が大きいとなると、どの国も、どの人間もそんな言葉は吐かなくなる。

言われたところで負ける戦に命を払う気は毛頭無いのだが、それでも、そのクルリと方向転換する王達の性質は、レオンハルトにとって許せない事柄だった。

国を、国民を大事に思うからこそ、そう言って来ないというのなら、レオンハルトにだって胸中では分からなくない。でも、では、各国が手を組んで動きましよう。とは、どこも話しに出さない。

利益、不利益が王達の脳内を占領している。だから、どこもが牽制けんせいし合い、状況を見守る側に立っている。

（一国の王としては、当然といえるべき行動なのかもしれないけど・・・）

そう思いがよぎって、心が押し黙る。

血族から代々王となっている人間なら、歴史上、国に最悪の事態を招いた人物とは書物に名前を残したくないのは当たり前なのだろう。様々な思惑と思想が絡み合い、プレイジ討伐という責務は精霊の力を持つものへと確実に投げられたのだ。

能力の差、力の差。

目に見えて大きいそれらが、種族が違えど何も変わらない所を見えなくしている。

もしくは、ちょうどよい目くらましとされているのか。  
後数ヶ月もすれば、どうしてクレージュを動かさないのかとついでくる国が出てくるだろう。

書類に走らせているペンを止め、窓から青空を見上げる。

プレイジが名を通すようになってから僅か数年。

行方知れずになるまで、プレイジは、スイの下について魔法を学んでいた一人だった。

すぐにプレイジの強い黒の力に対する性質を見抜いたスイは、プレイジに魔法を教えることをやめた。もちろん、全世界の魔法使い達にプレイジに魔法を教える事を禁じた。

だが、どこにでも私利欲だけで動く裏の職業は存在する。

裏社会に潜んでいた黒魔法使いがプレイジの手を取ってしまった。

それを知った時には、すでに関与していた黒魔法使いはプレイジによって殺されていて、プレイジは再び行方を眩ませていた。その沈黙の間に恐ろしい力を手に入れた事が知れたからこそ、レオンハルトは各国に手配書を出し、プレイジの行方を追っていた。

なかなか見つけることが出来ない間に、プレイジは異世界に手を出し、異世界の人間を操り、恐ろしい事件を起こさせてしまっていた。異世界にまで手を出せる人間は稀にしか現れない。魔法力が著しく高くなければ、まず成功しないからだ。プレイジは数年でそこまで上り詰めてしまった。

現実的に、クレージュとスイと自分、3人かかってならプレイジに勝てるだろう。けれど、命を懸けた戦闘に『絶対』という言葉は無いのだ。

レオンハルトが世界を治めるまでにらみ合っていた国も、今はようやく戦わずに手を取り合っている。やっと安定した平和な世界に、自分達が魔族の主を倒す前のような暗闇の世界は、もう訪れさせられなかった。まして、それが人の手によって訪れるなどもってのほか

かだった。

だから、レオンハルトは動けずにいた。

スイは魔法力が完全に回復していないし、クレージュも一人では勝てない確立のほうが高いとレオンハルトは見ている。よって、向かわせる事は出来ない。

レオンハルトは、ただひたすら、そのときを待つことにした。

プレイジは、まだ若い。

若くして力を手に入れた者は、そのほとんどが力におぼれ、敵が動かなければ自分から動く。

その動きを止める人間も、プレイジの周囲には居ないはずだ。

プレイジから見れば、敵とは自分の魔法力を凌駕する力を持つ、高位の魔法使いであるスイだ。彼女が魔法力を回復させればさせるほど、それはプレイジにとって脅威になる。黒魔法使いにとって、属性が光のスイほどやっかいな敵はいない。

いつか必ず、出てくるはず。

それも、早い時期に。

チャンス  
機会はそのとき。

誰に何を言われようと、それが誰も命を落とさない、プレイジ討伐の方法なのだ。

「……そろそろ、イライラしてるんだろ？ レイスにも逃げられて、自分の居場所は知られて。けど、討伐指示が出ない限り、こちらの戦力は削れないし……あぶりだしてやるよ。早く殺されに来い」

瞳を細めてレオンハルトは一人つぶやいた。

策略（後書き）

拝読ありがとうございました。

今回ちょっと短いです。すみません。

ちょうど区切りがいいもので…。

レオンハルトさんは、意外と怖い方ですよ。（たぶん）

## ソルとレイス

数日後、ようやく目が覚めたレイスは自分の体を確認した。うっすらと残っている記憶ではかなり重症だったはずだが、体に傷など一つもなかった。それどころか疲労すら吹き飛んでいるらしく、普段より体が軽く感じられた。眠りにつく直前に、白い魔法使いを見た記憶がある。彼女、スイの魔法で回復したと思われたが、やはり何か、恐ろしいものだと思えた。レイスは思った。

体を起こすが、幸か不幸か部屋には人がいなかった。

（相変わらず広い部屋やお…）

驚きはしないものの、半ばうんざりという感じで客間とよばれる部屋を見渡した。

元の世界の自分の家もかなり広がったつもりだが、ここにくるとその部屋が自慢でもなんでもなく感じてしまう。

高い天井、アイボリーの壁紙。窓には柔らかな日差しが差し込み、外の木々が葉の影を部屋の床に落としている。その床には、絨毯が惜しげもなく敷かれていて、その感触は芝生のように柔らかでやさしい。

靴で絨毯を踏む日常を送っていなかったため、悪いことではないと分かっていても申し訳ない気持ちが消えなかった覚えがある。

そして、この城のすごいところは、それらのすべてから高級感が漂い、埃や塵がない事だ。

とにかくもこちらに来た目的を果たす為にレイスはベッドから降りようとした。そのときになって、ベッドの横に靴が数足そろえてあるのに気がついた。微妙にサイズが違うようで、合うものを履けということだと理解する。

靴を選ぶと絨毯を踏み歩き、棚のガラス扉を鏡代わりに自分の姿を確認してみる。白いシャツと濃い青の布のズボンを履いていた。こ

こちらの人間がよく着ているゲーム世界のような服装を着せられていないのはありがたかった。

そして、半そでを着ている自分に違和感を覚える。

元の世界では長袖ばかりだった。

腕を返してその理由があつた手首辺りを見おろす。

「……」

魔法は外側の傷をすべて癒していた。

傷のなくなった箇所にとつと触れてみる。

喜んでいいはずなのに、嬉しさはこみ上げてこなかった。逆にあがつてくる気持ちは、違和感ばかりだ。

見える傷がないのが、不安を煽つてしまう。

「……いやいや、ここまで来てそれはないやろ……」

こんな現実味のない世界にきてまで、現実に襲われるなんて。

湧き上がる感覚を押し込めて、苦笑いする。この感覚を抑えるために一番効果があるのは、自分を心配してくれる友人を思い出す事だ。自分が傷つくとき悲しみ、怒ってくれる相手を思い出して、風来は深呼吸をすると要らない気持ちを振り払った。

癖で首もとのボタンを2つほどはずしてから、レイスは廊下に出た。一度来て見ているとは言え、磨かれた床や、豪華な額に入った絵画などに目が奪われる。元の世界のテレビ番組で見た、海外の歴史的建造物などを髣髴ほうふつとさせる城だ。それらが目新しい為、しばらく長い廊下を歩いてきたが、数分もするとソルの居る場所の検討も付かないことに気が付いた。彷徨たぐひうように歩いていたところで出会った女官にソルの部屋を教えてもらい、案内までしてもらって、ようやく部屋の前に到着する。ノックをして入室許可の声が届くと、ドアを開け踏み入る。

「広……！」

ドアを開いた瞬間、レイスは思わずそう言葉にした。テレビで見たことがあるホテルの最高の部屋……いや、それよりもっと広いだ

ろう部屋がそこにあった。明らかに一人で使うには広すぎるリビングルームの大きいソファに、ちゃんと金髪頭のソルが座っている。その金髪頭がレイスを見上げて笑顔を見せた。

「レイス！来てくれたんだ！」

「来てくれたんだ！やないわ！ このアホ！」

声をかけてきた笑顔に、眉間にしわを寄せてレイスは返事をした。

「まあまあ、そんな怒らないで。これ、見てよ！」

手招きされて、レイスは渋々テーブルへと歩み寄る。そんなレイスに差し出しだされた一冊の本は、ソルがこちらの世界に来た時から小脇に抱えていた『魔道の書』だった。辞書くらいの分厚さがあり、少し重い。

前回こちらの世界に来たときの記憶が正しければ、開いた1ページ目にしか文字が書かれていなかったはずだ。そして、一文を読み上げると、実際に魔法が発動してしまう。当時のソルが読み上げても、魔法とは呼べない程度のものしか出なかったが、初めて魔法が発動した時は驚いて混乱したものだ。その本をテーブルに広げて、少し得意げに話します。

「この本、魔法力が上がると次のページの文字が浮かび上がる仕組みになってたんだ。最初はレベルの低い炎の魔法だけだったけど、頑張ったおかげで、今、中レベルまで読めるようになったんだぜ！」さすがはつい半年と少し前まではランドセルを背負っていた子供らしく、なんとも楽しそうに話をする。この2ヶ月足らずでソルはレイスから見れば、非現実的すぎる世界にかなりなじんで居るようだ。

「それからさ・・・」

「ちょっと待て。別にそんな話をしに来たわけちゃうんや」

「・・・」

2ヶ月、新発見が多くて話す事が沢山ある様子のソルの言葉を、レイスが途中で断ち切った。ソルが敏感に空気の変化を感じ取って、言葉を止める。

「回りくどいのは苦手や 直球で聞くで。なんで2ヶ月前、一緒に

もどらんかったんや？もとの世界では中学生が行方不明やって大騒ぎやで」

「・・・帰りたく、なかつたんだ」

「お前、あの時全員一致で帰るって言うたやろ？」

「帰りたくなかつたんだ！」

レイスの言葉にソルが叫びかえした。予想外の強い反論に少し驚いてしまったが、なるべく落ち着いて次の言葉を探す。

「お前、家族も居るやろ？ 今頃心配してるで」

「心配なんかしてないよ。母さんも父さんも仕事で忙しいし、オレはただの飾りなんだから！有名な学校に入って、優秀な成績で進んで・・・礼儀正しくして、親の言うままの将来のために生きて・・・！そんな勝手な親の元に帰りたく無かつたんだ！あんな親、要らない・・・だつたらいつそこっちで生活してる方が・・・っ！」

そこでソルが肩を竦めて言葉を止めたのは、レイスが拳でテーブルを殴りつけたからだつた。

静まり返った部屋の時間を、レイスの呟きが再び動かす。

「お前がこんな子供や無かつたら、マジで殴れるのに・・・」

レイスは小さく震えた声でつぶやき、拳をやり場なく左の手の平に収めた。少しおびえてしまったソルの様子に気づきもしないで言葉を続ける。

「親が居るだけ、有難いと思え」

「・・・え？」

「オレは、お前よりもっと小さいところに両親を亡くしたんや。だから、お前みたいな奴を見ると、心底腹が立つ！」

「...!!」

「どうせ、なんも意思伝えもせんで愚痴口いうてるんやろ？ なんでもっと親と分かり合おうとせんのや？嫌なら嫌やつて言えばいいやろ！それに大体、親が子供のために生きるって、誰が決めたんや？ 子供が親のために生きて、それはそんなに不幸な事か?!」

「・・・」

思ったことも無い考えだった。その言葉にソルは驚いたが、それでも、固まってしまっている心はそう簡単に違う感覚に塗り替えられたりしない。うつむき、唇を噛んだら、自分の想いが否定されてしまったことに腹が立ち始める。

「親が居るのにどの行事にも出てもらえなくて、帰っても誰も居ないなんて寂しい思い、知らないでしょ？ 帰ってくる日を楽しみにしてたのに、話す事も何度も何度も考えて待つていたのに・・・仕事であつという間に打ち消し。そのショックを分かる?!」

「だけど帰ってくるんやろ？ やつと帰ってきたのに、お前が居なくて親はどう思う？ 親もお前と同じ気持ちかもしれんやろ？ …確認した事ないんやろ、親の気持ちなんて。お前はまだ確認できるんや、幸せやんけ！」

迎えてくれる場所があるのに帰りたくないなんてふざけるな！

そう叫んでやりたかったが、ソルが自分より年下だという事がそれをさせなかった。そして、その頃になるとソルが少し怯えてしまっているのにも、レイスは気がついていた。

押し黙ってしまったソルは、今、おそらく必死に涙を堪えている。自分より大きなものに怒鳴られて怖い感覚は、痛いほどレイスには分かってしまう。

「…あくまで、俺の考えやから。お前がどうするかは自由やけど」  
そう言つて立ち上がると、レイスは窓を開放した。秋の少し冷やかな風が部屋に吹き込んでくる。喧騒けんそうを含まないこちらの世界の風は、とても穏やかだった。部屋の中の重くなっていた空気も、吹き込む風に流されていく。

振り返つて窓辺に凭もたれてソルを見る。

孤独という点では、ソルとレイスはとても似ていた。

ほしい言葉も、期待している気持ちも分かる。

「俺はお前迎えに来たんや。ソル、一緒に帰ろうや」

言われた言葉にソルの表情が驚いて、その後とても嬉しそうな笑顔を見せた。

あきらめていた期待が、ソルの中で実った瞬間だった。

「…うん」

小さな声で返事をして頷いたソルに安堵する。他人に対して笑顔を見せられる、期待を持てるだけ、ソルはまだ大丈夫だ。後はスイに元の世界に送ってもらえばすべて片付く。

そう思っただけで済んだ次の瞬間に、それらは一掃された。部屋中が異様な空気に包まれて、ビリビリと建物が軋むような音が響くと、部屋が小刻みに振動し揺れ始めたのだ。

まだ実力が浅いとはいえ、魔法力を持つソルが青ざめて辺りを見回した。

「・・・なんだよ、この魔法力・・・!?!」

おぞましい空気に圧倒されながらも、レイスは思い出していた。石の城の最上階で出会った人物を。

## ソルとレイス（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

一度UPボタン押したら、タイム何とかエラーでて全部消えてびっくりしました；

別作品「encounter」を読んでいる方とそうでない方では全く感じ方が違うお話だろうと思われます。読んでいない方にとって、レイスの過去って謎だろうなど。

ちなみに、昔はGAMEが先行公開、encounterが後公開でした。

作者も驚きましたが、レイスがencounterの頃より成長していました（笑）

## オープニング終了

『お前に決めた』

突如割って入った第三の声に驚いた時には、レイスの首が後ろからつかまれていた。

「レイス！」

ソファから立ち上がってソルは叫んだ。そして、その手がどこから来ているのかを確認して、ゾツとする。窓の外の空間にヒビが入り、その裂け目から手が出ていたのだ。

「お前に決めた。より深い負の力がお前の中に見えた」

窓の外から低い声が聞こえた。腕に窓から引き出されそうになり、レイスは窓枠に手をかけた。引き出そうとする腕の強さは半端なく、指先が首を圧迫する。首に触れている感覚から、手の平、指があり、大きい人型の手だという事は分かる。爪が皮膚に食い込んで、独特の刺すような痛みが首に走った。

「・・・っ・・・」

大して動かない首を少しだけ捻ってみるが、それだけではもちろん離れてくれない。首を持つ手を解きに動きたいが、窓枠から片手でも離せば、それこそ力負けしてしまう。

こう着状態が続くが、その場に耐えているにも、強くなる痛みに堪えるにも、限界が近づいていた。何より、異常に大きな手はレイスの首を完全に掴んでいたため、呼吸がままならない。その事がレイスを一番追い詰めていた。

そんな状況の中、レイスは背中に強い風を感じた。それは、狭い範囲で下から上に向かって起こった、自然ではありえない風だった。それと同時に手から開放されたレイスは、反動で数歩、窓から離れてから、居た場所を振り返った。自分の身に何が起こっていたのか、そこで初めて視覚を使って確認する。

空間の裂け目から出ていた腕は浅黒く手の甲に深紅の宝石が埋まっていた。さらに、明らかに人間としては大きすぎる手で、それに掴まれていたことを認識し背筋を凍らせる。鈍い痛みを感じ、掴まれていた首に手を触れると、爪の食い込んでいた辺りから血の感触を確認できた。

空間の裂け目から現れた巨大な手は、風により裂傷を負っていた。大量の流血に、ソルは直視できずに顔を背けた。

間もなく手が空間の裂け目に消える。その時、ドアが開けられて、スイが部屋に入ってきた。迷うことなく空間の裂け目に向け、魔法を放つ。

白い光が一筋、スイの手の平から打ち放たれて、まっすぐに空間の裂け目を射抜いた。もう完全に手が入り込んだ裂け目から鮮血が噴出した。もともと閉じ始めていた空間の裂け目はすぐに消え、普段の風景が戻ったその場所に、クレージュが姿を見せた。

窓から見える空中に、風を操り浮いている。漫画の世界でもなく、映画の世界でもなく、現実に目の前で行われていることが最早信じられない。

だが、緊迫した時間は突き進む。

「囷だ！」

叫びながらクレージュが窓から部屋に飛び込む。同時に、部屋に居たソルとレイスもその気配に気が付き、スイのほうに視線を向けた。先ほどまで人影など無かったスイの後ろに、黒い法衣をまとった男が立っていた。

「プレイジ……！」

クレージュがうめく様に名を呼び、召喚した剣を手に持ったが、スイの首にナイフを付けられてしまい、そこから先の動きが封じられてしまう。

（プレイジ……？ 俺が見たのはもつと子供……）

レイスは驚いて相手を凝視した。状況的に、クレージュはスイにナ

イフを突きつけている男がブレイジだと言っている。確か、つい先日レイスが見たブレイジは、小学生ほどの子供だったはずなのだ。なのに、そこに居るのは20歳前後の男にしか見えない。

細身の長身、紫黒色の長髪しよくと同色の切れ長の瞳。持っている存在感が、引きずり込まれそうな重さをもし出していた。

一目見るとすぐには忘れられそうにもない、強烈な存在感。そのブレイジの視線がレイスを捕らえた。

「少しはまともに物事が見れるようになったようだな。かけていた低級の幻の魔法は効かなくなったか」

「幻・・・？」

「…ああ、違うな。さすがは最高位の結界がめぐらされた城というわけか」

ブレイジが愉しそうに笑った。その表情から発せられる空気は、石の城の暗がりの中で感じ取った空気と同じだった。

いつから幻などを見せられていたのか？愕然がくぜんとするレイスの髪が、ふわりと風に吹かれた。それに気が付いた次の瞬間、強い風が巻き起こる。強風の元に視線を向けると、そこにはクレージュの姿があった。いつもの笑顔のかけらも見られないクレージュの表情を見て、ブレイジが魔法力を高め始めた。

本来なら魔法力を持たないレイスには、その力は見えない。だが、あまりに強力な魔法力はレイスの視界にさえ、しっかりと現れていた。

ブレイジの周りに、黒い魔法力がオーラのように見える。それは、空気を伝い肌を震わせる。

「そう怒るなよ、風竜の騎士。用事が済んだらすぐに帰ってやるさ」

「スイから離れる」

「慌てるな」

ニヤリと笑ったブレイジの魔法力はスイに刃を向けているナイフに集中し始める。それを感じ取って、スイが口を開いた。

「魔法封じでもするつもり？ 私も甘く見られたものね。 そのナ

イフを突き立てたとき、貴方にも私の魔法力が伝えられる事は知っているでしょう？」

一つも焦りを見せないスイに、同じく焦りのかけらも見せないプレイジがその言葉をせせら笑う。

「確かに、これをお前に突き立てれば俺にもお前の魔法封じがまわり着くんだろうな。だが、今の弱りきった魔法力では、俺に押し負けるくらい理解しているんだろう？」

「さあ、やってみなければわからないわ。それに、どちらにしろあなたの魔法力は明らかに低下する。その後は・・・」

そういったスイは一瞬クレイジユに視線を向けた。その視線の意思を受け取り、クレイジユが何か言うより早く、スイは行動を起こした。

「?!」

レイスとソルは驚きで声も出なかった。スイは突きつけられたナイフをに手を伸ばすと、自分の胸の中心につき立てたのだ。

時が止まったように静まり返る中、白い魔法力と、黒い魔法力が互いに、火花を散らし始めた。互いが繋がるナイフの表面で、大気の中で、触れる場所全てで音もない魔法力の戦闘が展開される。部屋中の空気がその対立に振動し、レイスやソルの肌を直接震えさせ、部屋中を揺らした。

その威圧感から恐ろしく長く感じたが、実際は僅か数秒の出来事。

やがて魔法封じのつなぎに使われたナイフが鞘と刃の付け根で真っ二つに割れた。それは魔法力の戦闘が終了した合図だった。

柔らかな絨毯の上にスイが倒れこむ。

ほぼ同時にクレイジユの剣がプレイジの左胸を貫いていた。

プレイジとクレイジユの視線が交わる。ここで、倒れるはずである

プレイジが倒れない。その表情が、勝利を確信したように口角を上げた。

「ざんねん。オレの心臓は、右なんだ」

笑ったその表情が、一気に苦痛の顔に変わったのは直後だった。

プレイジの背後から、右胸をもう一本の剣が貫いたのだ。

「来るのを待っていたよ、プレイジ。お前は、力を過信しすぎた」  
プレイジの背後から、レオンハルトの声が聞こえた。

「終わりだ」

レオンハルトの持つ、黄金色の大剣の周りに小さく稲妻が走るのが見えた刹那、クレージュがスイを抱え、素早くそこから身を退く。それと同時に、窓からまっすぐ大剣めがけて雷光が走った。

レイスもソルも、そのまぶしさに目を開けて居られなかった。地響きを伴った音と光が収まると、レオンハルトがゆっくりと剣を引き抜いた。

プレイジはその身がこげる異臭を立てながら、膝から崩れる。

終結した？

少し開いた視界で、状況を見たレイスはそう思った。いや、誰もが思った直後、プレイジの声が木霊した。

- 契約を結びし導きのナイフよ、我が魔法力と共鳴し封じし魔法力を散らせ！ -

「・・・！？」

「しまった！」

プレイジの言葉が終わると同時に、スイの体に残ったナイフの刃から白い球体が6個浮かび上がった。それらは高速の光となり、散り散りに壁を通り抜け、窓を潜り抜けて遙か彼方に散らばっていった。

それを見届け、プレイジの体は完全に崩れ去った。  
その表情は、最後の最後まで、口元に歪な笑みを浮かべたままだった。

## オープニング終了（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

状況を説明できているだろうか…この章だけは何度読んでも、何度修正しても、それを心配しながらUPに至ります。

修正しすぎてわけ分からなくなります（汗）

とりあえず、10話目にしてオープニング終了、です。

ここから、長い長い異世界生活が始まります…。

この展開、脳内でプレイジからいつも苦情がきます。

どうせ殺され役なら、せめてもう少し遊びたかったと…w

## GAME START

ブレイジが死んでから一週間とちよつとが経過した。オレはまだあの世界に居る。

PCのゲームソフトの中…もとい、剣と魔法がはびこるとてもリアルな異世界。

ブレイジの死は、俺にとって、ものすごく衝撃的な事件やった。

それはオレと同室にしてほしいって言って聞かなかったソルも同じらしい。怖くてしょうがないんやか。

こんなとき、子供ってのは楽やよな。・・・正直ちよつとすらやましい。

あれから数日は残像が記憶から消えなくて寝付けんかったし。

横でソルは思いつきり寝てたけど。

スカイゲートの城は、このごろバタバタ忙しく人が動き回ってる。

そして、今夜は夕刻からさらに騒がしい。

ブレイジを倒した祝いの宴が、スカイゲートで開かれてるからや。

レオンハルトが言い出したわけやないらしいけど、ブレイジを倒した事でいろんな国が盛り上がり過ぎたらしい。どこかで歯止めをか

けるためにもこういう機会が必須になってしまったとか。

そつえば、一つ一つの国や貴族が何ヶ月、何年に渡って何か送ってきたりするよりはマシかって、兵士が話してるのを小耳に挟んだ

事があつた。

世界を統一する城、その王様っていうのも、結構大変なんかもな。

一応、俺にも正装が用意された。とりあえず着て、会場にまぎれてみたけど、こういう社交辞令の飛び交う大人の世界は、正直、大の

苦手や。

ソルのやつは、さっさと城内のどっかに消えていったし、レオンハルトは次々話しかけられてて、取り付く島もあらへん。

つまらんから、適当な酒と果物のジュース、氷、グラスを拝借して、オレはパーティ会場を抜け出した。あれから、一つも顔を上げへんあいつにも、酒を飲ませてやろうと思っただから。

白い髪、白い肌、白い法衣。唯一、僅かに灰色の瞳は開かれる事は無く。

魔法力の大半を失ってしまった最高位の魔法使いは、眠っていた。電気もつけず、部屋の中、ベッドの横で絨毯に座り込み、クレージユはその横顔をただ、見つめていた。

真っ暗な部屋の中では、あの淡い水色の髪と瞳は、光を浴びずに黒一色で、終始笑顔が絶えなかった風竜の騎士とは別人のように見える。

彼は悔いていた。

プレイジとの戦いするとき、スイと目が合ったとき、彼女が出ようとしていた行動を読んでいた。それなのに、静止の言葉さえも間に合わず、行動を起こしてから、静止に入れなかった自分を。

どうして、静止できなかったのか？

あのとときの自分の中には、答えがあった。スイがプレイジの魔法封じを始めた瞬間、止めに入ろうとする自分と、それを阻止する自分があった。

魔法封じでプレイジの魔法力が弱れば、必ず倒せるじゃないか。

スイが魔法封じをされても、プレイジが死ねば、奴の魔法効力はなくなるから、スイの魔法力はすぐに戻る。ほんの数分だけ、スイが魔法を封じられるだけ。

スイとプレイジ討伐を秤にかけた自分。まさか、死後も効力の残る魔法分散をされるとは思っていなかった、浅はかな自分。

どこまで、違法とされた魔法を習得していたのか。

他人の魔法力を分散させる魔法は、もう知る人間も少ないというのに。

だが、だからといって自分がその魔法を知らなかったわけではない。そのことがクレージュを更に悔やませていた。結果として、プレイジに一步先をとられて戦いは終わってしまった。スイの魔法力は、今、世界中に球体の固体となつてちらばってしまった。それが、どこに行つてしまつたかは、スカイゲートが国力を上げて調査中だったが、まだ良い情報は入つてこない。自分には魔法力のありかを探知する能力はない。あまりにも無力だった。

クレージュにとつてスイが自分の視界で動かなくなる事など、予想もつかない事だった。

それは、考えもつかないほど、ありえない事だったからだ。

「オレは・・・スイが居るから、こつちの人間になつたのに・・・」  
つぶやいて、この現実は自分のせいじゃないかとうなだれる。

スイがもし、自分より先に死んでしまうような事があつたら、そのときは精霊の意思に反していようと、輪廻に乗れなかつたら、自分も命を落とそうとまで思っていた。

「・・・この状態は、どうすればいい・・・？」  
返事の来るはずもない質問をして、クレージュはベッドの端に顔をうずめた。

レイスがドアを開けると真つ暗な部屋に光の道が一本出来上がった。何も聞かずに電気をつけると、クレージュが口を開く。

「何をしに来た？」

「何つて、入つたらあかんのか？」

そついいながら、両手に持つたドリンク一式の入つた木箱を床に置く。氷と酒をグラスに入れて、果物のジュースで割り、簡単なカクテルを作るとクレージュに差し出す。

受け取つてもらえないので絨毯の上に置き、自分の分を作り始める。

「それ、お前の分な」

「いらない」

瞬間で断りを入れられるが、それはなんとなく分かっていたので軽く流す。

「そう言わんと飲めよ。　せつかく人が入れたんや。　飲むのが礼儀やで」

「頼んでないが」

「頼まれた覚えもないし。　まあ美味いから、俺の作る酒。　だまされたと思て飲めつて」

そのレイスの軽い口調に、クレージュが少し眉を寄せる。

「・・・お前、かなり飲んでるな・・・？」

「ん？　んー・・・まあ、そうやな。　ストレートの酒はもういらんつてぐらいは飲んでる」

言いつつ、レイスは自分のグラスの中身を半分ぐらいまで減らして言葉を続ける。

「あのさ、スイがこうなったのつて、半分ぐらいは俺のせいなんやろ？」

「・・・は？」

「オレを移動させるのつて、かなり高度な魔法で、さらに回復もかなり大変やったそうやん？　すごい負担やねんでな。　スイがプレイジなんかに負けてしまったのはお前のせいだつて、スイのファンらしき兵士に言われたわ。　オレ、そんなん全然知らんつてな」

早口でしゃべつて、笑つた後、一呼吸おいてクレージュに問いかける。

「いつまでへこんでる気や？」

「お前に言われる筋合いはない」

「それが大いに関係ありなんや。　聞くところによると、オレとソルを元の世界に帰せるのつて、スイだけじゃないらしいやん？」

「転移魔法の事か？　確かに、オレとレオンにも出来ない事は無いけど・・・。　命の保障は出来ないよ」

「・・・え？」

「転移魔法つてのはものすごい技術と精神力と集中力と魔法力と……早い話が総合的に高度な魔法なんだ。スイほど確実な転移魔法が出来る人間を俺は知らない。オレとレオンは、スイほど細かい魔法の構成は出来ないんだ」

「……え？ちよつと待て。それはつまり、オレとソルは帰られへんって事か？ それは困る！」

驚いたレイスが直球の言葉を投げかけた。それは、クレージュの行き場のない苛立ちに火をつけてしまった。明らかに語調を強めた言葉が返ってくる。

「困る？ 自分から来ておいて勝手な事ばかり言つなよ」

「勝手か？ 大体、プレイジみたいなのをいつまでも野放しにしておいた、こつちの世界が悪いんやろ？」

「一度、スイに帰してもらつたんだろ？ どうしてまた来たんだ！」

「それはソルを連れ戻す為に……！」

「聞けばあいつは勝手にこつちに残つたんだろ？ それをお前がどうして、お前の意思で連れ戻す事が出来るんだ！？」

「連れ戻す事が道理やろ？！ オレ等の世界で行方不明扱いされてるあいつは、このままやつたらあかんはずや！」

「ダメだと気が付いたら自分から帰るだろ？ それをワザワザこつちに飛んできて、プレイジに殺されかけて、拳銃にスイに高度な魔法を何度も使わせて……！ 大体飛び降りるとか、どういう考えしてんるんだ、お前！？ その後動けなくなるくらい明白だろ？」

「結果的に、上手く逃げれたやろ？！」

「動けなくなつてスイに助けてもらった、が事実だろ？！ 逃げれてなんてないよ、お前は！ あの時……お前が森に飛び降りたとき！ 俺が上空でプレイジに睨みをきかせてなかつたら、お前は森の一部と共に、魔法で欠片も残つてなかつたんだからな！」

「……？！」

いつの間にも立ち上がって今にも掴み合いそうになっていた2人は、事実を聞かされたレイスの引きで、ほんの少し間を作った。ストンと絨毯に座りなおして、クレージュが口を開く。

「・・・俺は、何度も・・・そう、何度も何度もプレイジの居場所に行つてたんだ。　だけど、オレが一人で動いて何かをする事は、レイスの判断が遅かったと回りに思わせてしまう。　オレがそこで死んでも、レオンやスイが非難されるかもしれない。・・・」  
「だけど、こんな結果になるんなら、全てを捨ててもプレイジを殺せばよかった！」

クレージュは左手で絨毯を一度だけ殴りつけた。しっかりとした厚手の絨毯なのに、かなりの力で殴ったらしく、その下の硬い床が鈍い音を響かせた。

「スイが死んだなら、オレも死ぬ。　だけど、この状況は・・・スイはただ眠っているだけで、生きている。　話せない、笑わない、怒らない、動かない・・・！　オレが現場に居合わせたのに！」  
絨毯の上のこぶしが、更に固く握られた。

そんなクレージュの様子を一部始終を見てしまったレイスは、他人に対しての思いの強さに、驚いていた。

元居た世界では、こんなにも他人のことを思う人間が居ただろうか？大抵の人間には、そんな物見たことがない。

自分も含めてだ。友情とか、愛情とか、真面目に考える方が毛嫌いされる世の中で、そんな事をいう奴は、ほとんどが集団から突き放されてた。

自分も、周りがそういう流れになると体裁だけでもと、それに習う。それが、生きる術なのだと思っていた。　ここは、元居た世界なら笑うところだ。　相手が強かったんだからとか、適当な、もってもらいしことを並べて、責任を緩和する状況だ。

なのに、目の前で他人を守れなかった事を深く悔いているクレージュを見て、そんな言葉が口に来ない自分が居た。  
かけていい言葉が分からない。

戸惑っている、うつむいたままのクレージュの手が酒瓶に伸びた。握ったと思うと、蓋を開け、ストレートでそのまま飲みだす。

「!? お、おいおいおいおい! それ直飲みは幾らなんでもやばいって……!」

あせったレイスの静止の言葉など届かず、三分の一ほど一気に飲み終えたクレージュが、口元からこぼれた酒を袖口でふき取りながらレイスをにらみ見る。

「こんな奴に誰にも見せてない言葉を吐いてしまった事にも腹が立つてきた。お前が酒持ってきたんだから、付き合えよ」

「えええ……マジでえ? オレちよつと酔い覚めてきたんやけど・

・

そんな言い訳は聞くはずもなく、クレージュのヤケ酒が始まり、それに付き合うレイスは、元の世界では考えられない量を飲む事となった。酒が切れると取りに行く事を繰り返し、2人はそこで飲み続けた。

その翌朝、二日酔いのレイスと、ケロリとしているクレージュと、寝不足のソルは、謁見えっけんの間のレオンハルトの前に集結した。

「クレージュはもう聞いてると思うけど、スイの魔法力のある場所が割り出せたんだ。探しに行つて欲しいんだが?」

レオンハルトの言葉にクレージュが不満げに答える。

「オレに頼むのは分かるけど、オプシヨンの2人はどうして?」

「ソルが昨日オレに言つて来たんだ。スイの回復のために何か手伝えたら、って。で、ソルが行くなら、レイスも行くんだろ?」

「……そうみたいや」

気持ち悪いのに耐えながら、そう答えて、横に立つソルを見る。視線を見返してきたソルが、なぜか得意げな笑顔を返してきた。投げやりに答えたレイスに、クレージュがますます不安気に言葉を口にする。

「オレだけで行つた方が早いんじゃない?」

言葉を聞いたレオンハルトが、満面の笑みを浮かべる。

「しつかりリードをつけてないと、帰ってこないかも知れないからね」

いくらなんでもスイの事が関わっているのに、どこかに立ち寄るなどするわけがない。しかし、放浪癖の話をされると、普段の行いを否定できないため、クレージュは言い返せない。そのことを把握してのレオンハルトの言葉に、勝てないと踏んだクレージュの抵抗はこれで終了した。

「そういうことで、準備が出来次第、出発してくれ。地図は後でクレージュの部屋に届けさせるよ」

「了解」

ため息交じりの返事をしたら、三人は謁見の間を後にした。

数時間後、出かける準備を整えて、ソルとレイスは城門に来ていた。二人の姿はお互いが見慣れてしまった魔法使いの法衣姿と、盗賊衣装、に似せた布の服だった。

よく考えれば当たり前である。一国の城に盗賊の衣など存在するものではない。

城内のコーデイネーター達が色々と頑張ってくれたようだが、もともと上品な服を扱う職人達のためか、二人の想像する『盗賊』の衣装には何かが足りない。

そんな小奇麗な盗賊衣装だった。

どうせならもつとジャラジャラと何かつけたほうが様になるんじゃないかと話す二人の後ろに、軽装備ながら鎧を身に付けたクレージュが現れる。

「徒歩で往来するつてのに宝飾着てどうするんだ…。ま、なるべく、足手まといにならないようにしてくれよ」

言い放ったクレージュにソルがムツとしていると、レイスが一番に城門を潜り抜けた。

「とりあえず、オレとソルにとっては元々ゲーム始めるつもりやっ

た訳やし。こうなったからには楽しませてもらう事にしたで。 G

AME STARTや」

レイスに続いてソルが駆け出し、納得いかない表情のクレージユが最後に続いた。

## GAME START (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

ちよつと小話です。

この一話、ソルがどうして寝不足になっていたのか、気になりませんか？

作者は気になったので、脳内でソルに聞いて見ました。

作者「ソルはどうして、パーティの翌日、寝不足だったのか教えてください？」

ソル「見張りの兵士やお手伝いさん？の控え室で、夜中までボードゲームとかして遊んでたんだ。それでだよ。町の話とかも沢山聞いたよーw」

だそうです。それはそれで、ワイワイと楽しそうだなー。

いつか小話で書けたらいいなぁーと思ってしまいましたw

## 一つ目の魔法球

最初に割り出せた場所は山脈が連なる方向。城から半日ほど歩いた先の山々は、昔は沢山の人が商用のために使っていたため、一応山道がある。しかし、昨今は魔物が頻繁に出没するようになったため、人通りは無くなってしまっていた。草は生え放題で、枝は突き出し放題。そんな荒れた山道を歩きながら、クレージュは二人を伺い見る。

昨夜飲み明かして気分が悪そうな方は、こちらの世界ではあまり見ない黒髪、黒い瞳で、年齢は十六歳だとか。ごちゃごちゃ文句をよく言っではいるが、結局のところ、盗賊の衣が動きやすいらしくてそれを纏って軽快に歩を進めている。その後ろで、一冊の本を持って、ヒョコヒョコとついて歩いてるのがソル。金髪の髪に、黒い瞳。来た当初から魔法使いの法衣を着ていたので、職業は魔法使いらしい。年齢は十三歳、まだまだ幼い顔をしている。魔法を少し覚えたらしいが、それは本を開いてやつとのレベル。正直、どちらも全然頼りになりそうには見えない。

そんな二人に、呆れた目を向けて声をかける。

「ところでさ、なにしてんの？ おまえら」

「何って、お菓子食べてるんや。向こうのやつ、来的时候に鞆に詰めてたらもってこれたんや。食う？」

「いや、あのさ・・・ハイキングじゃないんだから。お菓子とか食べるのやめてくれないか？」

「気持ち悪くて朝食べてないんや。腹へってきてさあ・・・」

「いいから、しまえ。何かあったときに動けないだろ」

「・・・誰のヤケ酒のせいで朝食えなかつたと思ってるねん・・・」

「ブツブツ言いながらも手に持っていたラムネ菓子をしまっレイスを見届けて、ソルに目を向ける。

「オレのは、片せないじゃん」

そう言ったソルがくわえているのは棒つきの飴だった。クレージュはイライラするのを抑えながらソルに尋ねる。

「お前は戦闘になった時、唯一できることはなんだ？」

「……」

「……」

「……まほう」

すばらしく考える間を作って答えたソルの言葉は、飴のせいでちゃんと発声できていない。

「おまえはまだ魔法書の文を読まないと発動できないんだろ？その口に飴をくわえててどうする？」

「……でも、食べてる最中……」

「捨てる」

「えー、好きな味なんだけどなあ……」

「……」

「……わ、わかったよ。怒らないで。なるべく早く噛める様に努力するから……」

「まったく。俺一人なら『風竜』に乗ってここに来るのもあつという間だったって言うのに……」

クレージュがぼやいた言葉に反応して、ソルが早足で駆け寄る。

「『フウ』って、帰ってきたときの？ あの、ドラゴン？」

「見てたのか。あれは、風の竜だ」

「乗れるの？なあ？俺も乗れる？乗っていいこうよ？乗りたい」

「あれは主に戦闘用の竜だ。それに、乗り物じゃないからな」

「……でも、さっき自分ならって……」

「あれは、俺の竜。俺がどう使おうと勝手なの。分かったら、

さっさと飴を噛む」

「チエツ。 けち」

半分すねたソルに変わって、レイスがクレージュに視線を向けた。

自分の目線にちょうどどこか見える淡い水色の髪を見て不思議そうに尋ねる。

「お前の髪の色って、生まれつき？」

聞かれた言葉を聞き流すように、一瞬前から風が吹いた。まるで、操られたように吹いた風は、スカイゲートの風竜の騎士を呼び戻したようだった。端整というには少し幼い顔立ちの好青年が、風が過ぎ去った後、緩んだ笑顔を作る。

「どうして？」

「城の他の人は金髪とか茶系やったし、俺等の所では皆黒が基本だから……」

言われて、クレージュはソルを見る。

「あれは？」

「あれは、染めてるんや。あんなに金髪はめつたにないわ」

「……ふうん。皆黒なんだ？」

「そ。俺の髪が基本」

「そか。……俺も元は黒かったよ。昔の話だけだね。風の精霊の力を授かったら、こんな色になったんだ」

「レオンハルトの髪色も、似たような感じじゃん？ むこうのぼうがちよつと青いか……？」

「お前、仮にも王を目の前で呼び捨てに……ちよつと、止まれ」

会話の途中、不意に真剣な目になって、クレージュが二人を静止する。

何かあったのかと聞こうとしたソルの言葉も、眼前に手を差し出して静止されてしまった。クレージュは風が葉を鳴らす中、耳を澄ました。

「……何か、来る」

3秒ほど間をおいた後、まだ遠くの空に小さな影が見えた。それが、巨大な鷲のような鳥だと認識できた頃には、三人めがけ、降り落ちるように猛スピードで襲い掛かって来ていた。慌てる二人を尻目にクレージュは左手に剣を召喚し、大鷲めがけて上空に飛び上がった。人間のものとは思えない跳躍力で飛んだクレージュは上空で大

鷲の首を両断した。

大鷲は地面に落ちる前に腐食し、その身を失った。それを見あげていたソルの腰に何かが巻きつく。

「なに…?!」

腰に三重ほど巻きついたのは植物の蔦だった。ただし、巨大に育ち、魔物と化した植物だ。巨大な花の蕾を頂点につけた植物は、同じく巨大な葉を手のように何枚も揺らしながら、周囲の木々をなぎ倒して、姿を現した。捕らえたソルを、空高くに引き上げる。

(なんて大きさや・・・)

レイスが蕾部分を見上げると、空が後ろに見えるほど大きな植物。その顔と言える分部の蕾からは刺々しい不ぞろいな歯を覗かせている。そこから垂れる濁った大きな水滴は、触れた地面の雑草たちを溶かしていく。

大鷲を倒しに離れたクレージュとの距離は、少しだったが、とても遠くて、植物がレイスに向かって猛スピードで襲い掛かってくる事を阻止するのは不可能だった。

「・・・!」

一気に距離を詰められて、手のように葉が振られる。レイスはそれを紙一重でかわすことが出来たが、かわした先にも葉の起こした風圧が届く。レイスの足が地面から離れ、軽々飛ばされ始めた。どこかに強打するしかなかったレイスの背を、追いついたクレージュが受け止める。

「よく避けた」

軽く肩を叩かれたレイスは、体から緊張が解れて行くのを感じた。強風が正面から吹いたため、無意識に体を縮め、体の前で交差していた腕を解いた。そこでようやく風圧によって手の甲に出来た一本の深い裂傷に気が付き、痛みを覚えた。そんなレイスの横をクレージュが走り抜ける。あっという間に巨大植物の前に行ったかと思うと、茎を蹴りながら花をのぼり、剣で斬りつけて行く。蕾付近まで上がったと思うと、茎を強く蹴り、ソルを捕らえている蔦を断ち切

った。

ソルを抱きかかえ、レイスの正面に着地すると、ソルの体から鷲の先端をはずして呼吸を確認する。

「頼んだ」

無事を確認したソルをレイスに差し出して、レイスが受け取ると即座に魔物に向き直り、駆け出していく。そして、地面を強く蹴り、高く、魔物の上空まで跳躍すると、一瞬そこで、クレージュの体が滞空した。手に持っていた剣が消え、その手にランスが現れ握られる。刹那、クレージュの体が恐ろしいほど早く落下を初め、鈍い音の後に植物は真っ二つに裂け、腐食臭と共に消えてなくなった。

(・・・すごい。 ホンマにすごい)

クレージュの動きに、ただ、レイスはそう思った。圧倒的な強さというものを、肌で感じたというのか、着地したクレージュが立ち上がるのを見たときに、全身が総毛立った。

ランスを手から消した後、クレージュはレイスからソルを再度預かると、鷲が撒きついていた箇所を確認するために服を捲りあげた。腹部が強打したように広範囲で赤黒く腫れていることがレイスからも見て取れた。この分だと、背中も同じ状況だと推測される。その箇所に手を添えるように触れて、クレージュが呟く。

「痣になってるけど・・・大丈夫そうだな」

ソルは地面から急激に高く吊り上げられた為に、気を失っているだけのようだった。呼吸も、とても穏やかに続いている。何度か幹部に触れてソルの様子を確認したクレージュは、ようやく肩の力を抜いた。

そんな様子を見ていたレイスは視界に光るものを見つけ、そちらへと歩み寄った。見つけたものを拾い上げると、ソルを地面に寝かせたクレージュに声を掛ける。

「敵のおった場所に、こんなもん見つけたけど？」

そういつて見せたレイスの手には、スイの魔法球が握られていた。

## 一つ目の魔法球（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

植物の魔物は、作者の中ではRPGで出てくる弱いボスキャラの基  
本イメージになっています。踏み台というかなんとというか…（笑）  
魔法使いがとても強い人であれば、炎の魔法とか効果があるんでし  
ょう、きっと。

## 芽生えた焦燥

戦闘が終わって数時間後、ソルは目を覚ました。

目が覚めて、見上げていた天井は三角だった。どうやらテントの中のようなと、頭が理解した。

夜なのだと、肌を感じる。独特の静けさが周囲を覆っていた。身を起こして、動かした体に痛みが走る。

「・・・痛・・・」

鈍痛を感じる腹部をさすっていると横から声がかかる。

「目え覚めたんか？ 寝てた方がええで。痣になってるから」

「痣・・・？」

「お前でつかい花の魔物の蔦に巻きつかれとったんや。覚えてるか？」

「・・・あんまり・・・」

聞かれて考えてみたが、そんな記憶はほとんど無いに等しい。記憶にあるのは、すごい速度で地面が離れて行った事ぐらいだった。それが、吊り上げられたせいだとか、魔物のせいだとか、理解する前には気を失ってしまったっていた。

「・・・魔物、だったんだ」

横で自分と同じ、携帯用の寝袋に体を預けているレイスをチラリと伺い見て、ソルは独り言とも取れる言葉を口にした。一瞬の間に、レイスの返事は無い。

「・・・怖くなかった？」

今度は確実に疑問文として成り立つ口調で聞かれた問いに、レイスは落ち着いて答えてくる。

「怖いっていうより、『驚いた』って言うほうがピッタリくるわ」

鳥類の魔物が襲ってきた事、植物の魔物がとても巨大だった事、そして、それらをおつという間に寸断したクレージュの事も。レイスは恐怖するより先に、驚いていた。

そして、考えていた。

自分が初期から持つている刃の大きなナイフで、どう戦うかを。恐怖の変わりに驚きの横にあったのは、戦闘意欲だった。

何も出来ずに終わったけれど、長引けば何かしたかもしれない。

けれど、あの時、自分は敵の攻撃をかわすことが精一杯だったうえに、触れる事も無く、体は軽々飛ばされてしまっていた。背を支えてもらって、クレージュに肩を軽く叩かれたのは、自分の体が震えていたのをクレージュが見抜いたからだ。まるで子供をあやすような行動に、自分でも気が付いていなかった、極度の緊張と困惑が、ふと、解かれたのを思い出す。

「ねえ、クレージュは？」

戦いを思い返していたレイスの意識をソルの問いかけが呼び戻した。「ああ。外におるって。そのうち寝るからほっといってくれって言うてた」

「ふうん……。良くわかんない人だよ。冷たかったり、優しくったり……」

「会ってすぐの人間の何がわかるねん。つまらん事考えてんと早よ寝ろよ。日が昇ったら出発するらしいから」

「……うん」

促して、こちらに背を向けたレイスを見て、ソルも寝袋に身を預けた。

やはり疲れていたのだろう。しばらくして聞こえてきたソルの寝息を聞きながら、レイスはテントの布壁を見つめていた。

意識が張り詰めて、ひとつも眠れなかった。

こちらに来たとき、泥の手を倒したときは、相手も小さかったしナイフでも十二分だった。だけど、大型の魔物が出たとき、自分のナイフはあまりに頼りなさすぎる。どう考えても、クレージュのように、敵に致命打を与えることは不可能だ。考えていくと、魔法が幾分使えるソルよりも役に立たない気がしてならない。足手まといと

言う事になる。

現実には居た『風来』もパソコンの中に居た『レイス』も、それは嫌いだ。自分が出来ない事があるのは気に喰わない。何でもそれなりに、器用にこなす。それこそが、自分の描く自分なのに……。

「……」  
この世界で繰り広げられる事は、ただの喧嘩勝負じゃない。致命傷も受けてしまう戦いだ。

何か、決定的な……自分を確立する何かが必要だ。

外の風に吹かれて、テントの入口の布が少しだけ口を開いた。その先の焚き火の傍に、スカイゲートの城の竜騎士が見えた。

倒木を背もたれに、地面に座って焚き火の色に煽られる横顔は、見た目、自分とほぼ変わらない年齢をしている。背も全然高くないし、体格も自分と大して変わらなく、別段がっちりしているわけでもない。普通にしていれば童顔なためか、そんなに強そうにも見えない。戦っている時と、今の彼はまるで別人のようだった。雰囲気も何もかもが違う。今の和やかな空気は、嘘のように一瞬で消えうせて、戦闘の空気へと変わる。

そんなことが、こちらの世界では当たり前なのだろうか。考えながら火の傍を見詰めていると、いつから視線に気がついていたのだろうか、クレージュの顔がこちらを向いた。そして、手招きをする。

「どうやら、こちらに来いといたらしい。」

ソルを起こさないように、そと寝袋から出ると、レイスはテントをしっかり閉めて焚き火の傍へと歩み寄った。

ほんの少し、夜は冬の気配がする。

秋の夜風に、レイスは無意識に腕を擦りながら、クレージュに問い掛けた。

「……何か用か？」

「それは俺の台詞。ずーっと見られてると気になるんだけど・・・座れば？」

視線で横の位置を進められて、レイスは少しだけ隙間を空けて、隣に腰を下ろした。焚き火から流れてくる空気が触れて、肌に熱が伝わる。

「で？ 俺に何か用？」

「用って訳でもないけど・・・」

「ああ、それが見惚れた？」

「アホか・・・ああ、そうや。ソルが目覚ましたで」

「具合はどうだった？」

「痛がつてたけど、吐いたりするようなことなかったし、今また寝てる。大丈夫そうや」

「そうか、よかった。・・・それで？」

クレージユは会話を最初の問い掛けに戻した。それに対し、レイスは焚き火に視線を逃した。

「・・・別に」「よく避けたって、俺、褒めたよな？」

同時に言われたクレージユの言葉に、レイスは驚いた顔で見返した。クレージユは得意気な笑みを浮かべて繰り返す。

「俺、褒めたよな」

「・・・けど、あれは避けただけで・・・」

「避けるって行動は重要だろ？ 食らっててみる、今のお前なんて一気に動けないまで追い込まれてたはずだ」

「・・・」

「お前があそこで無事じゃなかったら、俺はお前とソルを守りながら戦闘することになってたんだぞ？ お前が動けて、ソルを預かってくれたお陰で俺は不自由なく戦えたんだぜ？ お前が居たからってのも、勝利の材料に入ってる」

「・・・そ、か・・・」

同時発言に驚いた表情が、意外な答えに驚いた表情に変わり、最後には顔を背けたレイスの変化を、クレージユはしっかりと見取って

いた。僅かに眉をひそめ、少しからかう様に声を掛ける。

「お前、調子よさそうな性格にみえるけど、実は人との付き合い薄いだろ？」

「は？ って、ちよ、何すんねん」

髪を荒く撫でられて、レイスは慌ててその手を掴み頭から離れた。手をつかまれたまま、ニヤリと口元で笑うクレージュを軽く睨み見る。

「いらんことすんなっ」

「褒められたときにされるだろ？ そう照れるなよ」

「余計なお世話やて言うてんのや」

「お前・・・スキンシップ薄い上に悪い癖ついてるな。照れ隠しとはいえ、好意をはねるなよ？」

「放つとけ。オレもう寝るしっ」

「はいはい。おやすみい」

掴んだ腕を軽く投げ離して足早にテントに戻ったレイスを、クレージュは困った笑みで見送った。

## 芽生えた焦燥（後書き）

ご一読ありがとうございました。

見た目そんなに変わらない。

レイスはクレージユを見てそう感じていますが、細かいことを言つと、根本から鍛え方が違います。

筋肉のつき方とか：脱いだら違いが分かる。脱がないけど！

あ、でも、クレージユ、背は確かに低いです。

## 帰還

日が昇ってすぐテントをたたむと、クレージユが空中に魔方陣を描き、別空間に一式を片付けた。レイスは野宿準備の時に見ていたため驚かなかつたが、変わりにソルが目を丸くした。一連の動作を見届けた後、クレージユに質問を投げかけ始める。それを会話としながら三人は、スカイゲートの城へと足を向けた。

来た道に戻って城に帰還した三人は、まっすぐにスイの部屋へと向かった。

静かな部屋の中でベッドに横たわるスイは、当然迎える言葉を発してはくれない。

クレージユは魔法球を入れておいた袋を取り出すと、封を解いた。その袋は昨日、魔法球を拾ったレイスに、クレージユが入れておいてくれと行って渡した袋で、少し特殊な布で作られているのだと聞いた一品だ。魔法力が漏れにくくなるのだという布の説明に、レイスはなんとなくだが、魔物達に魔法球を持っていることを分からなくするためののだと理解した。

本体が近くにあるのを感じてか、魔法球が光を発していた。それは袋の口から光が溢れて見えるほどだった。

クレージユがレイスを見ると魔法球の入った袋を差し出した。

「お前が見つけたんだ。お前がスイに戻してあげてくれ」

「戻すって…どうやって」

「スイに残ってるナイフの刃に魔法球を触れさせてあげるだけでいい」

「わかった」

まさかこんな重要な役割を任されるとは思っていなかったが、断る理由も無いため、レイスは魔法球の入った袋を受け取った。魔法球を取り出すと、スイの胸に刺さったままの魔法封じのナイフに接

触させようと近づける。すると触れる寸前に、魔法球は緩やかな光の波となって、ナイフに流れ込んだ。溢れた光はレイスの手をも包みこむ。

「レイス、怪我が！」

ソルが驚いて身を乗り出した。スイの魔法力に触れたレイスの手の裂傷があつという間に完治してしまったのだ。

「すげえ……」

魔法力が全てスイの体に入り込み、白い球体も光も消えてしまった。傷が治った手に少し感動して見入った後、スイの様子を伺い見るが、スイには何一つ変化は無かった。

「さ、報告いかないとうるさいから、レオンのとこ行くぞ」

少しはスイが動くとか、光るとか、そんな反応を期待していた二人は、拍子抜けた表情をしていた。クレージュに促されて、流されるように部屋を後にする。

廊下を歩く間、誰も何も喋らなかった。レイスもソルも無反応だったスイに、シヨツクに似たような感覚を受けていたのだ。考えれば当たり前なのだが、あの時力は数個に分かれて飛び散っていた。それを全て集めなければ、スイには意味がないという事だ。

今はまだ、たったの一個目。変化や動きなんて無くて当たり前なのだ。それは、テレビの画面に映し出されていたゲームとは違い、これが現実であるということ、二人に知らしめていた。

城の中央付近にある謁見の間に着くと、秘書が一人立っていた。

「あれ？レオンは？」

クレージュが秘書に尋ねると、少々驚いた顔をして秘書が答える。

「クレージュ様、お忘れですか？今日は……」

「あ！そうか。じゃ、帰ってきたら俺達が帰ってること伝えておいて」

「わかりました」

秘書に伝えて3人は部屋を後にした。レイスとソルは、先ほどの会

話の意味が分からずクレイジユに問いかける。

「逢わんでええんか？」

「ああ。とりあえず、お前達は休んでおけよ。次、いつ出発かわかんないからな」

言い捨てるクレイジユはその場を去ってしまった。仕方なく、二人は部屋に戻る事にした。

たった一日と少し出ただけだったのに、久しぶりのような気がする広い部屋は相変わらず塵一つ無い。

「俺、もう一回寝るー」

朝が早かったせいでふらふらとベッドに向かうソルを見送り、レイスは返事をする。

「そうかー、ゆっくり寝てくれ。俺は風呂に入る」

その言葉に、ソルが素早く反応した。

「お風呂?! 入りたい。俺が先に入る!」

言うが先か、行動が先か、ソルは浴室に駆け込み、個室を占領した。「・・・ほんまに我侂な奴やな・・・」

仕方が無いとレイスはソファに腰を落とした。が、数分も持たないうちに時間をもてあまし始める。当然と言えば当然だ。テレビどころか、娯楽アイテムが何一つ無いのだ。しばらく考えたレイスはあつことを思い出して自分の荷物をあさつた。

中から取り出したのは小型の音楽再生機だ。かなりの数の曲が入る優れもので、小さいし邪魔にもならないため、鞆に詰めてきていたのだ。けれど、この荷物は自分と同じ高さからの落下を経験している。壊れているかも知れないと、諦め半分に再生してみる。

「・・・やった」

やわらかいものの中に入れておいたのが功を奏したのか、無事に動き、久しぶりに聞く音楽が鼓膜に響く。好きな音楽を集結させたデータは、久しぶりに聴くとなんと新鮮な事か。まるで、元の世界の自分の部屋に戻った感覚にとらわれる。

「極楽やー…」

手足を広げてベッドに転がると天井を見上げる。音楽に再生ボタンを押されたように、脳内に元の世界の風景が思い出されて、ふと思いつ。

「・・・待てよ。この調子で行ったら、オレも行方不明か？それは、かなりまずいなあ・・・」

ポツリと一人つぶやいたレイスのイヤホンが急にはずされた。見るともう風呂から上がったソルが自分の耳に持っていつていた。

「いいもの持ってきてるじゃん！ わー！久しぶり！」

「あほか！ 返せ」

「いいじゃん！ 貸してよ！ あ、これ俺知らない、新曲？」

「話聞いてんのか？これは、俺のや」

「レイスがお風呂の間だけかしてよ！・・・ダメ？」

「…風呂上がったら返せよ」

「わかった」

笑顔で頷いたソルを見届けて、レイスは浴室に向かった。

それから数時間後、夕食を伝えに来た女官が見たのは、イヤホンを片方ずつつけ、気持ちよさそうにベッドで眠る二人の姿だった。

貴重なアイテムがすっかり充電切れになっている事にレイスが気が付くのは、もう少し後になる。

## 帰還（後書き）

ご一読ありがとうございました。

## 二つ目の魔法球

「えええ…マジでえ？」

レオンハルトに次の行き先を告げられたクレージユが珍しく嫌そうな声を上げた。

その小さな島は共通して、鉄くずの島と呼ばれていた。島には一応、人が住んでいるとされている。『されている』ということからはもちろん未確認の情報であるし、人が住んでいたとしても大陸のスラム地区よりずっと性質の悪い状態だろうと予想されている。

船を付けられる場所があるのは分かっているので、島には船で向かう事となった。

島に近づくにつれ、明らかに海の色が透明度を失っていくのが見て取れた。そして、この世界に似合わない匂いが鼻腔をつく。ソルとレイスはその匂いを元の世界で嗅いだ覚えがあった。

街中の汚水の流れる川だ。臭いのせいでほとんど甲板に出ず、船内で到着を待つのはとても退屈だった。

都合よく眠気がきてくれるわけもなく、退屈をもてあまして数時間、ようやく到着して、上陸すると、その状況を見て二人は啞然とした。積み上げたコンテナこそ姿は無かったが、錆びてほぼ全壊した鉄筋の倉庫跡に、どうしても、元の世界の港が重なって見えてしまったからだ。

けれど、そこが同じ場所であるはずが無い。

錆びて曲がった倉庫、その奥に見えるのはやはり錆びた鉄骨。何本も何本も重なり、土に吸収されることなく、鉄の山になっているそ

れらがいくつも見受けられる。

壊滅状態の元の世界に戻ってしまったような錯覚に襲われて、ソルとレイスは、顔を見合わせた。

空が恐ろしく高く広く見える。吹き抜ける錆びた匂いが、鼻腔をかすめる。

違和感が拭えなくて周囲を見渡していたレイスが、そうか、と納得の声を上げた。

「背の高いもんがないんやな。違和感はそれか」

「あ！そうだ、なるほど。すつきりした」

声にソルが同意した。鉄材なんかを目にしてしまうとつい連想して見慣れたビルを思い出していたが、それが目に付かなくて違和感が拭えなかったのだ。

そして、違和感の正体はそれだけではない事に気がつく。あたりまえにあるべきものがこの大地にはなかったのだ。

木々、雑草、昆虫から動物まで、自然というものの姿が見当たらなかったのだ。

視界に見えるのは鉄の山と地面、そして空と海。それだけだ。

その景色は眺め続けていると、心を重くするものだった。

「とりあえず、離れて歩くな。何があるかあまり予想が付かない」

「え、う、うん」

クレージュの声に少し慌てて、ソルが傍に寄った。

相反して周囲を見渡しながら歩み寄るレイスが、ソルの代弁も兼ねてたずねる。

「その警戒ぶりはなんなん？」

「この島本当に分からないところだから・・・」

「って、誰も住んでないかも知れんのやろ？」

「ああ。地上には…な」

「地上には？」

「……」

クレージュが動かした視線の先に、数人の人影が見えた為、会話が

止まった。ゆつくりと近付き、数メートル先で足を止めた集団は、10人ほどの子供の団体だった。

中心に立つ少年が、目の部分を覆っているゴーグルを押し上げて声を掛けて来る。

「・・・そんな驚くなよ、竜騎士様がここに来るのは、俺達、とっくに知ってたぜ？」

少年が小ばかにしたように言葉を吐くと、他の子供達もクスクスと笑みを漏らす。なにやら不穏な雰囲気周囲に漂い始めた。

ほんの少し間をおいて、クレージュが小さく肩を竦めて答える。

「それは失礼、まさかお目にかかれるとは思ってもいなかったのだから、なんて、正式な挨拶をしたほうがいいのかな？ ジュン」

「いらねえよ、そんな物。腹の足しにもならねえ」

クレージュの行動に、自分達に対しての余裕を見つけたのか、ジュンと呼ばれた少年の声に少し棘が見え始めた。そんな会話の最中にも、三人の周りを子供がぐるりと囲みだす。

「・・・こんな場合はどうすんの？」

ソルが小声でクレージュに問い掛ける。相手は、自分とそう大差ない年齢なのが見て取れる。戦闘なんてものにはならないだろうが、なるべくなら争いは避けたいと思う。

「もちろん、戦闘は避ける」

不安げなソルの顔にはつきりと言葉を返すと、クレージュはもう一度ジュンに目を向けた。赤茶色の前髪から覗く瞳は、その視線を真っ向から受けて逃げない。強く意思を秘め、輝いていた。

「突然：ああ、失礼、もう知ってたんだっけ：、とにかく、無断で立ち入って申し訳ない。少し探し物してるんだ。君等のテリトリーには迷惑をかけないよ」

風竜の騎士として笑顔で言ったクレージュの言葉が終わると、すぐに、準備されていたかのような言葉がジュンから返ってくる。

「探し物ってのは？」

「：白の魔法球だ。それももう、知ってるんだろ？」

「素直に答えるんだな？お前らは、そういった自分達の落ち度や汚点を言うのを嫌うと思ってたんだが」

「敵意の無い事を証明するには、そうするのが一番と思ったんだけど？」

「…まあね。お前達、もういいぞ」

ジユンが声をかけると、仲間の子供達が3人の包囲を解いた。同時に警戒が解かれたのか、周囲の空気が軽くなる。

「相変わらずだよな。俺達をビビリもしない」

先ほどまでの刺々しい空気を振り落として、ジユンが呆れたように息を付いた。声色が少し、子供らしさを取り戻しているのがレイスにも聞き取れる。

「いろんな意味での差を図りきれずに、噛み付いてくる野良じゃないだろ。お前らは」

「・・・それ褒め言葉あ？」

「一応そのつもりだけど？」

「まあいいけどさ……」

言いながら、ジユンはポケットから小さなリモコンを取り出してボタンを押した。

何を作動させたのかはすぐに分かった。少し離れた場所の地面が口をあけたと思ったら、そこから鉄の塊が姿を現し始めたからだ。

それを作動させたのは分かったが、その場で驚いて声が出ないのは、そんなところから、そんな物が出てくる訳が無いと思っているソルとレイスだ。

ガコン、と、鈍い音をさせて、出てきた鉄の塊の姿は、縦長の長方形。正面のドアが左右に自動で開く。

それを見て、二人の脳が連想したのは、エレベータだ。

取り巻いていた子供達が鉄の箱へと向かい、歩き出す。

「もう日暮れも近い。ついてきなよ、俺達の城に招待してやるよ」

「それはありがたいね」

言われるがまま後ろに付いて歩き、鉄の箱にまもなくというところ

で、ジユンが足を止める。

「…ああ、そうだ・・・」

ワザとらしい言い方をして、ジユンがニヤリと笑った。

「最高位の魔法球なら、ある場所知ってるけど、教えようか？」

「?!」

「この島、くまなく探すほど危険な事は無いと思うぜ?・・・ど

う? 風竜の騎士様」

さすがに驚いたクレージュに満足したのか、ジユンの笑みが深くな  
った。

それを見返しながら、クレージュは返答までの間を、ほんの少し要  
した。

彼等の情報網は膨大であり、きわめて正確であるのをクレージュは  
知っている。この場で嘘をついて、いい事があるとも思えない。

ただ、彼らの情報には必ず見返りが必要となるのも事実なのだ。

「…情報の見返りは？」

「もちろん、お金。野暮な事聞くなよ」

ジユンは満足そうに勝ち誇った笑みを見せた。

## 二つ目の魔法球（後書き）

ご一読ありがとうございました。

## アンダーグラウンド

ジユンの案内の元、訪れたのは『アンダーグラウンド』と呼ばれる場所だった。

名の通り、地下に出来た都市である。

頑丈な壁に囲まれた町は、地下とは思えないほどしっかりしていて、普通に建物が並んでいる。

エレベータから降りて連れられるまま、道を歩く。

その町並みは足元から建物のほとんどが打ちっぱなしのコンクリートだった。

地下に巨大な要塞が出来上がっている。そんなイメージだ。

ビルまでとは呼べないが、3階建てまでの建物なら建築可能らしく、時折ある店らしき建物の看板にはちゃんと電飾もついている。

興味深く周りを見て歩くレイスに、一番後ろを歩くソルが小声で話しかけてくる。

「ねえ…？」

「どした？」

小声で声をかけられたため、レイスはソルに歩調を合わせ、軽く腰を折って小声で聞きかえした。列の一番後ろで、ひそひそと話が始まる。

「…男子、だよな？あの子」

ソルの視線が指す先にはジユンと名乗った少年の後ろ姿があった。

レイスはその言葉を聞いて苦笑いした。

クレージュと会話をしていた様子を見てみると、度胸も据わっている大人びた少年だ。

だが、その見た目は、どちらかというとまだ少女といっても通用するような容姿なのだ。

瞳は少し大きめだし、背も今周囲に居る子供たちの中でも低いほうに位置する。

中学生男子の平均身長を大幅に下回るソルより小さいのは確かだ。離れて回りと見比べればその比率はよく分かるもので、体つきもかなり華奢なのではないかと想像できる。

よくよく思い出してみれば、変声期も迎えていないのではないかと  
思う声をしていた。

考えれば考えるほど年齢性別不詳だ。

「…男やる…と思ってるけど」

「…けど、だよな」

「ちよつと話してみよか？」

「え？なんか危ないからやめといたほうが…、それに初対面だし」

「初対面やから適当に触れるだけの会話が出るもんや。お子様は後ろで控えてろ」

「レイスつてば…！」

引き止めるソルを置いて、レイスは集団の中のジュンに近づいた。

ほかの子供に妨害されるかと思っていたが、案外あつけなくその横にたどり着いて見下ろす。

近づいた自分を見上げてくる視線は、やはり深い光を放っている。

遠目に分析して、この瞳がまだ幼いと知っていなければ恐ろしいほどの底光りだ。

「…何か用？」

視線が合うと、ジュンは短く問いただしてきた。それにレイスは天井を指して問い返す。

そこには地下とは思えない青空が広がっていた。

「あの上の空はどうしてるん？」

「あれは天井に、機械で実物そっくりな映像を映し出してるんだ。

ま、スカイゲートから来た人間には理解できないだろうけど」

少し得意気に言ったジュンに、レイスから予想外な言葉が返ってくる。

「よつするに、バーチャルって事やな？」

「お前、理解できてるのか？」

「仕組みまでは知らんけど、なんせ高度な技術で幻影を映し出して  
るって事くらいは理解出来るで」

その答えをもらって、ジユンは表情を僅かに変えた。

「お前、あれか、異世界から来たっていう・・・」

「そうそう。 それ、オレとあいつの事」

そう言っただけでレイスはソルを指した。そのレイスの腰布をクレージュ  
が引っ張る。

「余計な情報は回さなくてもいい。黙ってる」

「はいはい」

小声だが強い口調で声を掛けられて、レイスはそれ以上のジユンと  
の会話をあきらめた。列の最後尾、ソルの元へと戻って報告を始め  
る。

「男で間違いないわ」

「どうして？」

「…俺らと同じ文化やったら、シャツのボタンが右についてたから」

「そんなの決定打にはならないじゃん」

返答を聞いてレイスが口元を緩ませた。

「決定打を聞きたいか？」

「そりゃもちろん・・・」

「あいつをお前と同じくらいやと想定したら、女子やったら多少、  
上半身に男子との違いがでてるやろ」

「は？」

「なかつたのが残念や。まあ、子供に興味はないけどな」

「…っ何見てきたのさ！バカじゃない！？変態！」

「お前、ほんまガキやなあ。そう興奮すんなって」

団体の最後尾で空気を済し崩す笑い声と叫び声が起こった。  
思わず全員が足を止めて後ろを振り返る。

からかわれて必死に抵抗するソルとそれをかわすレイスが視線を気  
にすることなくじゃれ合っていた。

ため息混じりにジユンが呟く。

「目的の割には案外、楽しそうな旅路みたいだな。クレージュ」

「…はは…いや、そんなはずないんだけどな…」

「もつと暗い顔でくるかと思ってたけど…あの二人はスカイゲートの王に連れて行けって言われたのか？」

「ああ、そうだけど？」

「なるほどね。役に立たなさそうな人間を連れてるのは、そういうことか」

「…？」

「なんでもない。先を急ごうか。目的地はすぐそこだ」

ジューンが再び歩き出したため、クレージュは二人に駆け寄り、それぞれの頭を一度ずつ軽く叩いた。そのまま、問答無用で二人の背を押す形で、はぐれない様に集団の後に続いた。

## アンダーグラウンド(後書き)

ご一読ありがとうございました。

## 魔獣

たどり着いた先は、周りのどれより敷地の広い建物だった。もちろん、最大である3階建ての立派な建物だ。

無機質なコンクリートの廊下を歩いて行き当たった扉に、ジュンがIDカードを通し入室した。後ろを歩いていた子供達も続いて入室すると、無駄口一つきかずに全員が椅子に向かった。

レイス達も続いて部屋に入って、周囲を見渡す。子供達の前には大きな机、そして、パソコンの画面が3〜5台分。奥には全てのパソコンから配線がつながっているとされる巨大なハードディスクが見える。ハードディスクの巨大さはものすごく、一見するとすぐにそれとは判断できない。実際、部屋に入って数分はハードディスクとは分からなかった。広い部屋の端から端までの長さ、その本体の大きさだったのだ。

クレージュにとって苦手なこの空間も、ソルとレイスにとっては興味心を駆り立てる場でしかなかった。

ジュンが部屋の一番奥にある机に席を置いた。

その机の周りにはパソコンの本体や小さな機器などが数十個、所狭しと積み上げ、置かれていた。クレージュより機械慣れしているソルとレイスが見ても、そこだけは少し異様だった。

特有の電源が入る音が鳴り、熱を逃がすファンの音が僅かに部屋に響く。ジュンの前に積み上げられている画面全てに文字が羅列し、本体が稼動し始める。数秒すると、全ての画面に何かのソフトが起動した。

ジュンは今額にあるゴーグルをはずし、机においてあるもう一つのゴーグルで目を覆った。他の子供達も、各々、ゴーグルをつけてパソコン操作を始める。青白い光を受けながら、ジュンは三人を椅子越しに振り返る。

「今から中央のモニターに映し出すから、じっくり見ておいて」  
ジユンが喋りながらとは思えないほどの早さでキーボードを叩く。  
ジユンのパソコンとハードディスク、子供達のパソコンデスクの群  
れ、その二つの塊の間に床から自動で現れた巨大なモニターに光が  
伝えられた。

モニターに映し出されたのは、『グラウンドゾーン』、先ほどまで  
居た地上だった。そこに、たった一つ、崩れずに建築物として残っ  
ているビルが映った。建物の映像は画面の半分に狭まり、残りの半  
分に黒い羽根の生えた生き物が映った。見るからに剛毛そうな体毛  
が体中を守るように生えている、皮布を服の代わりに体に纏った、  
ゴリラのような姿。その体躯の背筋が伸びた。そんな感じの生き物  
だ。

その映像を見て、クレージュが訝しげに言葉を吐く。

「魔獣？」

聞き取ったジユンがこちらを振り返った。ゴグルをはずして机に  
置くと、クレージュの独り言に返事をする。

「ご名答。 彼の名は『ゴウム』 地上、『グラウンドゾーン』に、  
いつからか居座りはじめた」

「地上に人はいないのか？ 襲われたりしてるんじゃない？」

「あんたでも、確実にその情報は掴んでないんだな。いいよ、教  
えてあげるよ。グラウンドゾーンには人間っていう生物が残ってい  
ると思えないぜ。 形はそうだったとしても・・・人間としての  
一番大事な部分が欠落した魔物みたいなもんだらう」

「それはどういう・・・」

「そのままさ。 だから地上で何かに出会ったら容赦なく命をとって  
良い。 統治者が許可する。・・・話を戻すよ。 データをだしてくれ  
「はい」

指示された子供が間違う事無く、画面を映しかえる。

画面が先ほどの魔獣、ゴウムの鋭い牙の見える口元と、頑丈そうな

腕の拡大に切り替わる。

「ゴウムの武器はもちろんその筋力からのパワーと、よっぽどのでない限り噛み砕いてしまう顎あごの力。爪や牙で裂かれるより噛み付かれたり、殴られたりするほうが致命傷を負う。つまりは、ただの筋肉馬鹿の魔獣・・・そのゴウムが、最近魔法を覚えだした」

「・・・スイの力を利用してるって事か？」

「それしか考えられない。魔獣が魔法を急に覚えるなんて、あまり聞いたことがないし。それと、ゴウムの左腰の布袋から、魔法力が感知されるんだ。おそらく力の源は肌身離さず持ち歩いている」

「感知ってどういうことだ？」

「さっき俺がつけてたゴーグルは、相手の魔法力を感知することが出来るんだ。上手くいけば属性も解明できる。残念ながら、ゴウムの魔法属性までは解明できなかったけど・・・でも最高位の魔法力だとしたらそれも頷ける。彼女の魔法力は、世の中で唯一のものだから、分析にかけていないし」

そこまで話すと、ジュンは肩から力を抜いて、椅子を回して3人のほうを向いた。

「ゴウムが棲家にしてる廃ビルまでは、バイクを使えばそんなに遠くないから、明日の朝ここを発てばいい。そう立派な部屋じゃないけど、寝るには困らない場所なら提供できるぜ？」

「・・・そうだな。なれない船旅で二人も疲れてるだろうし・・・」

話が決まると席を立った少女が、ゴーグルをはずして3人に歩み寄ってきた。

「あたしが部屋まで案内してあげるよ」

少女はそう告げると、まだあどけない笑顔を見せた。

そこに、ジュンの声が割ってはいる。

「クレージュはちょっと残って欲しいんだけど。別に話があるんだ」

「わかった」

クレージュは短く返事をする。案内を買って出た少女に視線を合わせ、声をかけた。

「この二人、旅慣れしてないから迷惑かけるかもしれないけれど、案内よろしく」

「はい！」

「良い返事だ」

クレージュに頭を撫でられると、少女は少し照れくさそうに笑った。

## 魔獣（後書き）

ご一読ありがとうございました。

今回は予想以上に長くなったので、2話に分けました

## 秘め事

少女に連れられてソルとレイスが部屋を出ると、クレージュはジユンを振り返った。

パソコンの電源を落とすと、ジユンは他のメンバーに退出を促す。全てのパソコンの画面が消えると、部屋の奥の巨大なハードディスクがその役目を終えて働くのをやめた。機械音がなくなり、部屋の中が静まり返る。

「見せたいものがある」

そういわれて、クレージュはジユンの傍に歩み寄った。

ジユンは右手を乗せた机に黒い小さな錠剤を転がした。視線がクレージュを見る。

「あんたは、これを知ってるよな？」

「・・・知ってるも何も、『デーブブラック』だろ？」

「そう。飲む人間の深くにある負の部分を沸きあがらせる麻薬さ。自分の闇を知るために精神の治療薬に使われてるものもあるけど、

これは真正正銘、裏業界に出回る麻薬の錠剤だよ」

背もたれに体重をかけながらジユンはそれを見つめて言葉を続ける。

「この薬は、グラウンドゾーンに大量に出回ってる。・・・正確には出回ってた。現状はもう逐一調べていない」

2、3秒ほど間を空けて、ジユンが顔を上げてまっすぐクレージュを見た。

「オレは、仲間内にも公表してない情報を沢山入手してる。ゴウムは魔獣の中でも知能も高い。言葉も理解してるし、話もするようだ。元が動物だから、野性的勘も鋭いし、種別を嗅ぎ分ける鼻もかなり利く」

そこまで言ってもクレージュが表情を欠片も変えないために、ジユンは次の言葉を選ぶため時間を要した。その間の意味を汲み取ったクレージュがジユンを見据え話を促す。

「・・・それで？」

聞き返されるように話を促されたジューンは、一瞬のうちに少し圧力を増したを空気を感知取りながら言葉を続ける。

「オレが握ってる情報は、確証の無いものもある。・・・というか、信じ難いものもある。もう何を言いたいのかも分かってると思うけど...この薬は稀に、人を魔族に変える事も、また、元魔族の人間を、魔族に引き戻すことも可能になるとされている。その奥にある負の心と呼び覚まして・・・。・・・ゴウムはこれを誤って動物が大量に摂取したために、魔獣になったと思われるんだ。だから、麻薬中毒者のようにこれを携帯してると思う。触れることなんてないと思うけど、何があっても、あんたはこれを体内に入れるべきじゃない。万が一にもそんなことになったら」

「いい子だから、そこまでにしとこうか」

クレージュが穏やかにジューンの言葉を制した。その裏にある圧力に押されて、ジューンの言葉が止まった。

「その情報、誰かに売った？」

「まさか。さすがに世の中に出ないほうがいい情報かどうかぐらい判断できる」

「じゃあ・・・それ、嘘って事で」

「・・・は？」

そんな無茶苦茶な。そう付け足すジューンを無視して、いつものクレージュが笑顔を作る。

「それに、心配しなくても大丈夫だって。俺はディープリックには飲まれないよ」

「心まで強いやつなんて、人間にそうそう居ない」

「オレには風の精霊がついてるし、そうならないとスイに誓ったしさ。何より、『オレ達』の意思がそうだ」

その言葉の意味を理解したジューンが驚いて言葉を飲んだ。全てを否定しない、むしろ肯定したのだ。ジューンの髪をクレージュがそっと撫でる。

「だから何も、不安がることはないよ、ジュン。大丈夫だ」

「やめろよ！」

ジュンはクレージュの手を強く打ち払った。激しい嫌悪の色が瞳に宿る。

「勘違いするんじゃないよ！結果として割のいい情報交換になったぜ。まさかはつきりと本人の肯定がもたらえるとはな」

「俺の事でスイを助ける一歩になるなら、安いもんだ」

「俺はあんたのそういうところが心底嫌いだ……！」

「……気分を害したならすまない。さ、話は終わったな？そろそろ部屋に案内してくれよ」

クレージュは席を立つとドアに向かって歩き出した。

## 秘め事(後書き)

ご一読ありがとうございました。

## 凶器

一晩泊めてもらえる部屋は4人部屋だった。さして客用の部屋があるわけではなく、皆同じような部屋が各自分け与えられていると、少女は話した。

部屋の壁はコンクリートに類似していて、部屋にある家具などもほとんどがステンレスに似た素材で出来ている。やはり元居た世界とそっくりだと言うのがレイスとソルの感想だった。

「なんか、腹減ったなあ……。食い物はあるん？」

案内してくれた少女に問いかけると、ポケットから出した大判の地図を手に詳しく教えてくれる。

「ここがあるのは部屋が固まっている棟だから、一番奥のエレベーターでB2階まで上がって、渡り廊下を歩くとショッピングフロアに出るんだ。食べ物から生活用品まで全て買えるよ」

「ショッピングフロアで……。もしかして店？」

「そうだよ？あたりまえじゃない」

当たり前といわれて押し黙った。レイスはこちらの世界の金銭など持ち合わせていない。

思わずベッドに転がっているソルを見る。

「お前、こっちの金とかもってるか？」

「もってるわけないじゃん。衣食住、全部無料だよ」

「……」

「お金ならなくても大丈夫だと思うよ」

声にレイスは再び少女を見下ろした。

「金がないとさすがに買い物できへんやろ？」

「できるよ。クレージュ様の付き人でしょ？」

（付き人で……）

「だったら、クレージュ様の名前借りてサインしておけばいいよ。ツケっていうんだよ」

(いやいや、それってあいつの借金勝手に作るって事やる。大体ツケって言葉どこで…)

幼い子供からの発言とは思えない言葉にレイスは途中から返す言葉を失っていたが、変わりに胸中では収集がつかないほど、突っ込みどころが満載だった。

そこにソルの声が入ってくる。

「それでいいんじゃない？カード切ると思えばさ。元の世界では俺も父さんの名前借りたりした事あったし、クレージュも空腹を我慢しろなんていわないでしょ」

「…世間一般はそんなもんなんか？お前は どうする？一緒に行くか？」

「オレ行かない。疲れた」

寝返りを打ってスプリングが硬いだとか文句を言いながらも、ソルはベッドに沈んだまま起きる気配を見せない。レイスは一人でショッピングフロアを目指す事にした。

途中まで一緒に来た少女が渡り廊下まで来てくれたときに、地図を差し出して尋ねてくる。

「この地図、良かったら使う？」

「いや、ええわ。もう大体ここに入ってるから」

そういつて自分の頭を指差したレイスに少女は驚きの声を返す。

「大体って、…この地図全部?!」

「さつき見せてくれたやる？ま、そーゆう事やから、気持ちだけで十分」

じゃあ、と、軽く別れの言葉を残して渡り廊下を歩き出したレイスを、少女はしばらく呆然と見送った。あまりの驚きに手から滑り落ちた地図には、この建物の全域がプリントされていた。

ショッピングフロア

そう呼ばれるだけあって、一応な店構えがずらりと並ぶ。思ったほど店舗数は多くはなさそうだが、生活に関連するあらゆるものが売

られている。若干暗いが、照明も施されていて申し分ない。ただ、店に立っているのがほとんど中学生程度の少年少女だと言うことを除けばである。

とりあえず食欲を満たすため食品コーナーを目指していたレイスの耳が、不思議な音を捕らえた。

今居る場所はいわゆる十字路で、左右前後、どちらにも道は伸びている。音はその左側、道一本向こうから聞こえた。

興味本位でそちらに足をむけ、道を覗き見る。

そこはさつき歩いてきた道とは違い、かなり細い道だった。通りの奥は壁で行き止まりで、その道の店舗は数えるほどしかない。そしてそこは、まるで別空間のように武器や防具の店ばかりが集まっていた。

表通りと裏通りなんて言葉は、こんな場所でも有効らしい。先ほどの通りとは明らかに空気が違うその場所で、レイスは音の発信源を見つけて足を止めた。

その店は少しだけドアが開いたままだった。そのために音漏れをしてしまったらしい。

『射撃場 銃器取り扱い店』

看板を見て入るのをためらってしまった自分が少し情けない。

けれど、それはレイスにとっては当たり前なのだ。元の世界では銃器どころか強靱な刃物さえ一般人が持つのは違法だ。

それでも興味心が勝ったために、レイスは足を踏み入れた。

入るとすぐにフロントのような小さなカウンターがあり、そこに少年が座っていた。細身で小柄、前髪を逆立てていて、目つきもあまり良くない。そんな少年は客の姿を見て、少し口角を上げた。まだまだ悪戯好きな子供の印象を残す顔付きだ。

「へえ、珍しい客が来たな・・・見ていくの？ スカイゲートの間だろ？」

カウンターのイスに座ったままで問いかけてくる少年の言葉に、レイスは少々驚いた。さつきここに着いたばかりなのだ。自分がスカ

イゲートから来た人間だと、まだ知らなくてもおかしくない。

「・・・なんで知ってるん？」

「ジユンの奴から全員に情報が同時通達されてたからさ。アンダーグラウンドにあんたの存在知らない奴いないと思うぜ」

すんなり入ってくる言葉がここでは良くつかわれる。同時通達、という言葉は電子メールのようなものだろうと連想できた。どうやら分化自体は元の世界と近いものと思って間違いないらしい。

「もうすぐ射撃大会も始まるぜ、やってみて？」

少年からの言葉にレイスは素直に聞き返す。

「大会？」

「丁度、参加締め切りの時間だ。これも運命ってな」

少年が椅子から立ち上がった。身長はまだ、レイスの胸元にも届かない子供だった。

特に声をかけずに、少年が部屋の奥へと歩き始める。

その手が、おそらく愛用のものなのだろう、ごく自然に凶器を一丁、腰のベルトに収納した。

目の前で見ていて、不思議な感じがしていた。

とてもリアルなのに、まるで現実離れしている。

レイスにとつては、テレビや雑誌、インターネットでしか見たことがない、それらから得た知識しか持ち合わせていない凶器だ。触れたことも、間近で見たこともない。

ただ、脳裏をよぎったのはとても強力なイメージだった。ニュースなんかで良くやっていた、人をあっさり殺してしまう強さ。それに触れられる興味心が奥から聞こえる銃声に煽られて誘惑となり、レイスは少年の後に続いた。

一つドアをくぐると、広い部屋へと出た。部屋に入るとまず、射撃練習のレーンが続く。動物やら、魔物やらが映し出されたスクリーンを弾丸が貫いている。的の敵をたおすと、スクリーンには新たな生き物が映し出さる仕組みのようだ。バッテリーングセンターのよう

に並んでいる射撃レーンは、ゲームセンターのようにも見えなくない。子供達が群がってレーンに居るものだから、そう見えるのもなお更だった。

右手側にそれらを見ながら歩いていくと、部屋の一番奥に小部屋が設置されていた。

少年が小部屋のドアを開いて中を見せてくれる。そこは部屋全体が真っ白に塗りつぶされた部屋だった。床や天井まで真っ白な部屋というのは、実際初めて目にする。あっさりを通り越して、冷ややかな印象を受けた。

「ここに一人チャレンジャーが入って、戦闘することになるんだ」「戦闘？」

「そ。バーチャルの敵と戦うんだ。この部屋全体が戦場になる」

「戦場・・・ねえ...？」

「実際死ぬわけじゃねえし、殺すわけでもねえんだけど。四方八方囲まれると相当リアルだぜ」

出店の射撃のようなものを想像していたレイスは、大会の内容に少々引いてしまった。

そんなレイスなどお構いなしに少年は説明を続ける。

戦場となる部屋を一旦出た二人は、小部屋の傍にある長テーブルの前に来ていた。テーブルの上には大きささまざまな銃器が置かれていて、それらを管理しているらしい人の姿は、やはり少年だった。レイスはここに来て、これまで結構な道のりを歩いたと思っている。けれど、大人の姿に一度も出くわしていないことに気が付いていた。まさかと思っていたが、周囲を確認してもう一度考えがよぎる。ここには子供しか居ないのか？

銃器を置いているテーブルの向こうから、レイスを連れてきた少年に声がかかった。

「おいおい、ジン。誰を連れてきたかと思ったら、スカイゲートの客じゃねーか」

「露骨に嫌がるなよな、マコト。お前の悪い癖だぜ、それ」

「嫌いなモンは嫌いなんだよ」

マコトと呼ばれた少年は、ジンと同じような背格好だった。それだけでなく、声質も顔も実によく似ていた。

下から上へと遠慮なくレイスを見て、マコトの言葉は続く。

「…今日銃を初めて握るような奴にバーチャルに入れて言うのか？」

「大丈夫だろ。本人の意識の中の敵が敵と映るだけだ。 戦闘経験も大して無いみたいだし、それ相応の敵が映るさ」

「ま、別にいいけど。・・・で？おにーさん。どれにする？」

とても子供のやり取りには聞こえない会話に呆然と聞き入っていたレイスは、問い掛けられて我に返った。

「・・・触っても・・・？」

「とりあえず弾は抜いてるから気にせず触れば？」

「・・・」

正直、緊張していた。

レイスは一番近いところにある小型の銃を右手に取った。

鉄の塊はズシリと重い。これに弾丸を込めて相手を打ち抜くのだ。

いわば命をとる凶器。

元の世界のゲームセンターのものとは全く違った。

そして、現在武器として使っているナイフとも当然違う。ナイフはまだ、元々の生活でもそれなりに馴染んでいた。カッターナイフや、果物ナイフ、包丁。それらの延長上だという認識があるため、さして恐怖も無く、それに引きずられる使ってみたいという誘惑も感じない。例えばナイフで相手を切ったとしても、その傷も、程度も容易に想像がつく。けれど、自分が今手にしているものに関しては、全く想像がつかない。本当に使ってもいいものか、やめてこの場を去るべきなのか。そんな迷いさえ沸いてきてしまう。

「なっさけないなあ。オレよりずっと年上なのに」

マコトにそう悪態をつかれても、怒る気持ちなど全く湧き出てこない。出てくるのは手にしているそれに対しての興味と、恐怖ばかり

だ。どれほど解りやすい顔をしていたのだろうか。マコトがニツと口の端をあげて笑うと、レイスを突き動かす一言を口にした。

「撃ってみる？」

返事を口にしないが、マコトは言葉を続ける。

「しつかり手に合うものを選びなよ。イベントとはいえ、一緒に戦う相棒だからな。俺達の年齢の奴等がほとんどだから、小さいのが多いかも知れないけど…これとこれがサイズのにはベストかな」  
勧められた銃を持ち比べてみて、一つを選び抜き、あの射撃場へと向かう。一本のレーンの中でジンが教えてくれる。

「初めてだろ？両手で構えて…弾は…うん。そう。で、しつかり標準をあわせて…ここであわせるんだ。よし、じゃ、オレ出たら射撃開始するから。適当に撃ってみてくれ」

ジンが去っていく間も、高鳴る鼓動を押さえにかかる。得体の知れない高揚感に襲われていた。

(…落ち着け…)

やるならば、全てをやりこなしたい。

『風来』の中にある根本的な気持ち湧き上がってくる。

深く深呼吸すると、これまで生きてきた間に、もう癖のようになっている偽りの呪文を唱える。

(…出来る。オレは出来る。出来ない事は無い。ここに居る誰にも負けたくない。何に対しても強くありたい。…大丈夫。やれる)

気圧されるな 負けるな

俺は何にも負けない

もう一度深く深呼吸すると、レイスは銃を構えた。

## 凶器（後書き）

ご一読ありがとうございました。

アンダーグラウンドは、細部まで想像がいきわたるほど、書き込めば書き込むほど難しくなるところです。

皆様に少しでも伝わっていれば嬉しい限りです…！

## 凶器2

数分後、射撃を終えて困いから出たレイスは盛大に息を吐いて力を抜いた。

「やるじゃん！動かない敵相手とは言え、弾込めの後の遅れ以外全部当たるなんて」

驚きを隠せない様子でマコトが話しかけてきたが、レイスは先ほどまで敵が現れていたスクリーンに目を向け、悔しそうに愚痴をこぼした。

「全然や。急所はずしすぎたし、弾入れ替えにももたついた。．．．あーくそっ。腹たつ！」

射撃場に立つ前の戸惑いが消えて、レイスは笑っていた。

マコトにアドバイスをもらうと、二度目のチャレンジに取り掛かるレイスの中では、まるつきり新しいゲームのように楽しい状況になっていた。

その表情は、爽快さに似た物が見えていた。

その変化を見取って、ジンは一抹の不安を感じていた。

いい加減練習の時間は打ち切られて、少し遅れる形で大会が始まった。

部屋の中で繰り広げられる戦い。自分の番を待つ参加者も、観戦者もそれに食い入るように見入る。

バーチャルの敵は戦う本人が耳につけるチップが作用し、記憶の中から引き出される。つまりは自分がこれまでに戦った相手か、それらの特徴を混ぜ合わせた敵が目の前に現れることになる。

部屋の中の戦いは、外の大判スクリーンに映し出されて観戦される。見ている人間が評価し、すばらしい戦いだと思ったものに票を入れる。その投票数が多いものが、優勝となる。システム自体は簡単な大会だ。

ただし、バーチャルといえど、かなりのリアルさなので、精神的にも肉体的にもあの部屋に居る間は疲労するし傷も負う。が、部屋の中の事、全ては自分の記憶が起こしている錯覚に過ぎない。そういう部屋なのだと分かっているにしても、主催者のマコトの手元には緊急停止ボタンが常にあつた。頃合を見てバーチャルシステムを止めないと、時折、精神的に負けてしまう人間が出てしまうからだ。

数々の強敵と戦っていく参加者の動きを、レイスは食い入るように見続けた。少しでも自分のためになる事柄を盗めるように必死だった。ジンやマコトが話しかけても、声に気がつかないこともしばしばあるくらいだった。目の前の大画面で繰り広げられる戦闘は銃の強さをレイスに見せ付ける。

レイスの番は一番最後だった。エントリーが一番最後だったのでしかたの無い話だったが、ようやくといった感じで真つ白な部屋に入る。バーチャルといえ、これから繰り広げるのは戦闘だ。レイスは武器を確認した。

ナイフは腰の後ろ、腰布に沿うようにセットしてある、そして、未だ借り物だが、最強の武器、銃は右の腰にセットした。部屋を中心に立つと、レイスはイメージを膨らませるために目を閉じる。

(俺が、勝ちたい相手。勝負したい相手はただ一人や)

バーチャルの相手がそれになるように、記憶をなるべくリアルに思い浮かべる。四方の壁に映りだしたのは、石壁の暗い城。少しじつとりとした空気、明かりは蝋燭。少し高くなった場所に王座があつて、そこに……。

部屋の外でスクリーンを見ていた観客にざわめきが起こる。ジンとマコトが、お互いを困惑した視線で見合った。止めるべきか迷いながらも、映り行くスクリーンを見守る。

そこに現れたのは、紫の目をした子供だった。

(違う。俺が、挑むのは……)

レイスが目を開いたそこには、プレイジの真の姿があった。

周りの風景が明るい部屋に変わる。舞台はスカイゲートの客室だった。手も足も出せなかった、あの場所。あの時だ。周りの人間までは、バーチャルに現れない。当然だった。あのときレイスは、自分のことだけで精一杯で、周りの事など見えていなかった。記憶などあるはずもない。本当に何も出来なかった、許せない時間。銃を構える。

構えたレイスを見て、プレイジが嫌な笑みを見せた。

直後に視界が光った。

「・・・?!」

反射的に閉じてしまった目を開けると、景色は元の白い部屋に戻っていた。マコトの声がスピーカーから届く。

「はい、ゲームオーバー。よくまあプレイジなんてバーチャル創ったな。今は、あいつのお得意の爆発系の魔法だぜ」

「魔法…?」

「お前直接魔法くらったことないだろ?よかったな。下手すりゃ怪我どころじゃ済まなくて、精神ショックから死んでたぜ」

「お前が森に飛び降りたとき！俺が上空でプレイジに睨みをきかせてなかったら、お前は森の一部と共に、魔法で欠片も残ってなかったんだからな！」

プレイジを倒した祝いの日、クレージュが言ったことを思い出してレイスは舌打ちした。

不機嫌にそんなレイスの表情を見て、マコトの呆れ声が続く。

「しかたないじゃん。実力の差って奴だぜ。早く出て来いよ、残念賞の商品、多めにやるからさ」

スピーカーを通じて観客の笑い声を聞きながら、レイスは白い壁を睨んだ。

そんなレイスの様子を、ジンは黙って伺っていた。

(こいつは、打ち抜く弾丸の強さに心が負けはしないだろうか)

ジンは密かに、そんな不安を感じていた。

手に持っているものは、武器だとちゃんと理解しているだろうか。

レイスは銃より使い慣れているはずのナイフを一度も使おうとしなかった。プレイジ相手にナイフなど通用しないと判断したというならまだ分かるが、銃なら倒せる、と思ったのなら問題ありだった。

プレイジは魔物の姿をしていない、人間だ。彼を倒すということは、人間の命をとるということに繋がる行為だ。

(・・・大丈夫、だよな...? 旅の目的は魔法球集めだし、人間に向けることはもうねえよな...?)

考え込んでいるとマコトが柵から特殊な銃を持ち出しているのを見つけ、声をかける。

「おい、マコト。それ、どうするつもりだよ」

「ああ、銃買ってくつていうからさ、クレージュと旅するらしいし、多少強力な奴のほうがいいだろと思って。こっちのほうが高額だし、半分は思いやり、半分は収入のため、面白そうにマコトは笑ってレイスの元へ駆けていった。

結局、自由な時間をかなり割いてしまったレイスは、残念賞を手元に部屋へ帰った。

ドアを開けると一眠りして元気を取り戻したらしいソルが「お帰り」をくれた。奥の椅子では、クレージュがワインを優雅に飲んでいる。

「手土産や」

そう言って残念賞でソルの額を軽く叩く。

「何?」

受けとったソルの目に映ったのは一冊の魔法書だった。表紙を読み上げようとして首を傾げる。

「召喚・・・?これ表紙さえも読めないんだけど・・・使いこなせないよ?俺」

「そうなんか。ま、精進しろや」

「・・・む・・・」

なにやら眉間にしわを寄せながら本をぱらぱらとめくるソルに、もう一つと、レイスが袋を手渡す。

「今度は何？」

小さなフェルトの袋から出てきた三つの指輪を見て、ソルはますます首をかしげる。それぞれ大きな輝く石が一つずつ付いているが、装飾品としては少々派手すぎるデザインをしていた。ソルの手の平から、指輪を一つ取り上げるとレイスが説明を始める。

「この宝石の部分にお前が持つてる魔法書を封じることが出来るらしいで。宝石を本に当てると、魔法力が共鳴するらしい。そしたら、本がこの宝石に読み込まれて、お前が使いたい魔法をイメージするだけで、脳に直接魔法の一文が出てくるんやって」

「マジで?! なんかすごいじゃん! ホントなら、あの分厚い本、もう持ち歩かなくていいんだよね?!」

「魔法使いはよく使って聞いたで。 旅するんやったら、なおさらやって」

「うわーマジでうれしいかも。サンキュー」

笑顔で本の封印作業を試みるソルを横目に、レイスは一番に浴室を占領する事に成功した。

脱衣所で腰布の影に隠れている銃を手にとって、眺める。

その後、マコトが面白い銃を渡してくれた。それは通常の弾丸以外に魔法弾丸というものを使える、特殊な銃だった。

化学反応で相手に弾丸が当たると炎が出るのだという。

アンダーグラウンドでも数の少ない銃でとても高価らしいが、クレージュと旅をするなら強いものを持ったほうがいと勧められたのだ。

レイスはプレিজとのバーチャルの戦いを思い返す。

そして、巨大な花の魔物との戦いを思い出して眉を寄せた。

ここにきてから、負けごとばかりだ。

強くなりたいと願って止まない自分がそこにいた。

「お前に決めた」

不意にプレイジの囀の言われた台詞が思い出されて、鳥肌が立った。誰よりも近くで聞こえた、心臓を抉り取るような低くおぞましい声。首を持たれた感覚がよみがえった気がして、銃を収め鏡を見る。

「・・・なかなか消えへんなあ・・・痣」

少し伸びた長めの黒髪のお陰でぱっと見には分からないが、つかまれた際に出来た痣が未だ消えていなかった。鏡で確認しながら痣を緩くさすってみるが、独特の鈍い痛みや熱っぽさなどは感じ取れなかった。

痣というものは経験上なかなか消えないことも承知しているが、これに関しては少し消えなさ過ぎるように感じていた。

だが、違う世界に来てしまったて、時間間隔がずれているだけだとレイスは自分を納得させていた。それでも思わないと、何かあるんじゃないかという不安に苛まれてしまつて仕方がないからだ。

(そのうち消えるやる...)

レイスはいつも通り不安をかき消した。

## 凶器2（後書き）

ご一読ありがとうございます。

ちよつと書き方が不満な点があるため、後々修正するかもしれませ  
ん。

そのときはご了承ください。

残念賞でレイスが一番不満だったのは、魔法アイテムばかりだった  
ことだそうです。自分が使えるものが一つもない！と…。

だって、残念賞だもの…

余談ですが、アンダーグラウンドで残念賞とは自分に不必要なものを  
指すらしいです。だって残念だから（もういい）

## 現実とは？

その日の夜、アンダーグラウンドである事件が起きていた。統括者のジュンの前に、一人の少年が俯き立っている。

「…本当に、ごめんなさい…っ」

腰を折って深く謝罪する少年は、ある部屋の管理を任されていた一人だった。

詫びている理由は、部屋の鍵であるIDカードを失ったからだ。

「ジュン、許してやれば…？誰だつて物失くす事くらいあるだろ？」

一向に言葉を発することなく少年を見るジュン。その様子を見るに見かねて、傍に居たマコトが言葉を挟んだ。

「俺とジュンもまた明日一緒に探してみるし…」

「一緒に探す？そんな暇は二人にないだろ」

睨むではなく、じつとりとした視線を向けられてマコトは思わず表情を引き攣らせた。この表情のときのジュンは、とても機嫌が悪い。

「甘い。反吐が出るほど甘い」

「いや、でもさ…」

「紙やペンを失ったんじゃない。鍵だぞ。…わかってるよな？その辺の重大さ」

マコトに向けられていたジュンの視線が少年へと向けられた。縮められた小さな肩が少し震えて、俯いた顔から涙が落ちた。

それを見てジュンが盛大にため息をついた。

「泣けば問題が解決するわけじゃないぜ？許してもらえるわけでもない」

「…はい…っ、ごめんなさ…っ」

「もういいよ、部屋に帰って。マコト、送ってやって」

「ああ。わかった」

マコトに背中を押されて部屋から去り際に、少年がもう一度ジュンを振り返った。ジュンがそれに気がついて視線がかち合う。

「あの…っ」

「謝罪はもう聞き飽きたから要らないよ。俺はIDキーのプログラム書き換えと再発行を行う。君は何をするのか、よく考えてみなよ」

「…」  
ボロボロに泣きながら部屋を出て行った少年も、ジユンとさほど年齢は変わらない。

体格で言えば彼のほうがジユンよりずっと立派だった。

「…次から次へと問題ばかり起こしてくれる…。世話が焼けるのもほどほどにしてほしいよ」

一人愚痴りながら、ジユンは巨大なハードディスクに手のひらを付けた。

そのままゆっくりともたれ掛かる。

ひんやりとした機械の肌到人肌の体温が吸い込まれていく。

とても心地がよくて頭が冴える。

瞳を閉じて静かに考える。

今まで起こったことのない、IDカード消失。

来客のあった今日に起こったのは偶然だろうか？

『仕組みまでは知らんけど、なんせ高度な技術で幻影を映し出してるって事くらいは理解出来るで』

薄く瞳を開くと、ジユンは静かに声をかけた。

「『マザー』、今夜は少し大変な作業になる。プレイジの使用していた電波を拾うよ」

返事をするように巨大なハードディスクが運転を開始した。

その夜は遅くまでクレージユがワインを飲んでた。深夜になってようやく浴室に入ってくれたので、レイスは計画を実行するため部屋を抜け出した。

本当はクレージュが眠ってしまったてから動く予定だったが、どうも今夜のクレージュは長時間眠りそうに無い。行動時間は、クレージュが浴室から出てくるまでという短時間に大幅に縮小されてしまった。その間に自分がしようとしていることを済ませて、部屋に帰ってこなければならぬ。

レイスは部屋を出ると、赤い省電力の蛍光灯が照らす廊下を走っていた。夜は動いていないエレベーターを無視して階段を駆け上がる頭の中に広げた地図をたどり息を潜めて走り到着した場所は、パソコンがずらりと並ぶ部屋だった。

射撃大会のあと部屋に帰るときにその場所を見つけていた。通りすがりに部屋を覗いてみると数人の子供達がパソコンを触って居るのが見えた。同じ画面を指差して楽しそうに笑いあったりして、遊んでいるらしい雰囲気が見受けられた。様子からして、どうやら自由にパソコンを使える部屋のようだった。

レイスはそつと窓から部屋の様子を伺った。深夜の今、当然部屋には人影など無い。確認すると部屋を見つけたときにくすねていたIDカードをポケットから取り出した。後から持ち主が子供だと思いと少々心が痛んだが、カードの差込口の上に置きつ放しになっていたのを見つけた時には手が動いていた。思いついた計画には、部屋の鍵が必須だったのだ。

IDカードを差込口に入れてみると、予想通りドアロック解除の音が鳴った。見当違いでなければ、うまく行けば計画が実行できるはずだ。

「……………」

数秒様子を見てどうやら警報などは無いようだ判断し、足を進める。念のため柱に隠れる場所のパソコンを立ち上げる。見た感じ、つくりは自分が元の世界で使っていたものと変わらないため、触ってみれば操作方法は分かるだろうと考えていた。

プレイジはこの世界から自分達の世界にアクセスしていた。

もしかしたら、ここにあるパソコンでもアクセスできるかもしれない。

椅子に座って暗闇の中で画面からの光を浴びる。まぶしさを感じてデスクにおいてあるゴーグルを装着した。思った通り、目を保護するゴーグルはまぶしさを軽減してくれる。重くなっていたまぶだが、軽くなった。

それらしいソフトを手当たり次第に立ち上げてみる。万が一、大変なものに触ってしまったって見つかったらそれはそのときだと、レイスは腹をくくっていた。最後までばれないように最善を尽くすが、ばれてしまったらそこまで。悪い事をするときはいつもそんな感じだった。

思ったほど手間と時間を要せずに回線が繋がり、アドレスを入力する箇所が表示された。

慣れた手つきで入力したのは、良く通っていたホームページのアドレスだ。

「・・・頼むでえ・・・繋がれよ」

ENTERキーを押し、焦れながら表示を待つ。エラーが出ればそこでおしまい。連絡手段は無くなる。

『斉藤 風来』は行方不明、ましては勝手に死亡説などに巻き込まれては困る理由をもっていたのだ。なんとしても連絡をつなげたいどうか、現実の世界も深夜でありますように。

どうか、チャットに友達が居るように。

どうか・・・つながりますように。

画面が切り替わり少し懐かしい画面が表示される。

思わずこぶしを作った手をコードレスマウスにかけ、わき目も触れずチャットルームの参加者を表示すると、懐かしい名前が数個連なっていた。その中に目当てのハンドルネームを見つけると、思わず口元に笑みが浮かんだ。

(よし！)

ハンドルネーム、『レインストーム』

いつしか、レイスという愛称で呼ばれるようになった名前入室する。

入室すると部屋の全員が文字で驚きを表示した。それらに、ろくに挨拶せずレイスは言葉を送る。

レインストーム：悪い。久しぶりに来てなんやけど、リッグ以外今日は勘弁してもらわれへんか？頼む

ハンドルネーム、『リッグ』 は同じ高校で仲の良い友達だった。チャットで一人以外に退出してくれと頼むなんて、実際のところはルール違反だろう。だが、既に電波では数ヶ月は一緒に話をした仲間の集まりだ。他のチャット仲間が渋りながらも、レイスの頼みならと次々に退室した。無事でよかったと笑顔の絵文字をくれながらチャットルームにレイスとリッグの名前だけが残る。まるでリアルに会話しているように、空気が沈黙を漂わせた。

リッグ : 人払いまでして、なんやねん？お前、今どこに居るねん？もうすぐ期末テストやぞ？

レインストーム：悪い・・・オレの状況はどうなってる？

リッグ : 状況？それは、オレが聞きたいことちゃうんか？

レインストーム：ええと、オレは、元気。

リッグ : チャットに来た時点でそれは解るわ。そうやなくて、どこに居るねん？家にも何回行つても居らんし。どうしてん？  
レインストーム：ああ、話したらめっちゃ長いし、正直信じてもらえんと思う。だから、とりあえず世界旅行中って事で。

リッグ : はあ？ますます訳解らん。なんか事件にでも巻き込まれてるんか？例の見入ってた中学生の失踪事件か？

レインストーム：ちやうちやう！あれとは全く無関係や！

リッグ : . . . .

不思議なものだ、と、いつもレイスは思う。画面を通して声はもちろん表情すら伺えていないのに、入力された文字を見て嘘がばれたと直感した。

沈黙を表す『……（三点リーダー）』が帰ってきたのが何よりの証拠だった。画面の向こうから疑いの視線が突き刺さるようだった。

リッゲ ……意味分からんわ。お前、警察動き出すで？  
先生もどうしようかって話してるとこ見たで。

レインストーム：それは、困る！なあ、英次。オレの真面目なお願いや。休学届け、代わりに出しといてくれ！無理やり渡されたとか、ポストに入ってたとかでもいいから！マジに、真剣に。

リッゲ ……風来？お前、どうしてん？  
レインストーム：今は、聞かんといってくれ。頼む。

リッゲ ……訳解らんいうてんねん。そんな頼み聞けるかって。  
レインストーム：お前しか頼まれへんのだや！お前しかオレの状況知ってる奴おらんし、お前しか信用できへん！オレの身内や言う奴が来たら、連絡あった言うて、のんきに世界のどっか旅行してるって言うといってくれ。

リッゲ ……風来………？お前、ほんまにどないしたん？  
レインストーム：頼む！オレは、あいつ等に全て奪われたくないんや！わけ合って戻られへんけど、死んだ事にされたりしたら、それこそあいつ等の思うままや！それだけは嫌や！頼む！頼む！

リッゲ ……せめて、今どこに居るかぐらい教えるや？  
電話もつながらへんし。心配やんけ。

リッゲ ……風来？

リッゲ ……おーい？

リッゲ ……どうした？風来？！

レインストーム・じゅめん。すぐ、今日の分のチャットのログ、消してくれ。

## 現実は何？（後書き）

ご一読ありがとうございました。

文頭のジユン達の一こまは、今、まさしくアドリブで挿入しました。  
GAMEは何度かリメイクしてるんですが、このバージョンで初公開のシーンです。

2011・09・25 午後 修正

## 葛藤

気が付けば本名での会話になり、ひどく一方的な文字の会話をしてしまっていた。

レイスは相手の返事を待たずにチャットを中断して画面を即座に消した。

近くに人の気配を感じたのだ。

視線を向けると、今頃浴室にいるはずのクレージュがドアを背もたれに立っていた。

普段のクレージュからは想像できないほど、冷たい双眸がレイスを見ている。

ゴーグルを額まで押し上げて椅子から立ち上がると、レイスはクレージュを見返した。

「もう用事は終わったのか」

「…」

「そうしてそこに立っていると、つくづくそういう世界から来たんだなって思うな。お前」

パソコンの青白い光に背中から照らされたレイスは、スカイゲートの城内にいるよりしっくりくる。そんなことを一々言葉にする言いまわしにも、クレージュの怒りが込められているように聞こえるのは、自分に非があるからだろうか。

「何かたくらんでるなとは思ってたけど・・・」

その言葉でレイスの頭はどうしてここにクレージュが居るのかをはじきだした。

「はめたんか…」

浴室を使う振りをしたクレージュにまんまと騙されて、レイスは部屋を出てしまったと言う訳だった。少し距離を置いて尾行されていた事も知らずに。

「はめた？ オレから言わせれば騙されるほうが馬鹿なんだ」

「嫌な奴やな。 お前」

「それはどーも」

会話が止まった沈黙の中、パソコンの機械音だけが僅かに響く。空気に耐えかねて、レイスは会話の内容を主題へと移動させた。

「俺にも抱えてるもんがあるんや。何言われても、この行動は俺には絶対やったんや」

「・・・言い訳はそれだけか？」

「・・・」

「・・・ふうん・・・」

言いながら近寄られ、レイスはこぶしの一つや二つが飛んでくる事を覚悟した。が、襟元を持ち上げられて、眼前で小声で怒鳴られる。「終わったらさっさと電源落とせ！俺以外に見られたら言い訳どころじゃすまないだろうが」

言葉と同時に少々乱暴にパソコンに向かされたレイスは、意外な言葉に驚きながらも電源を落とした。クレージュから間髪をいれずに次の指示が飛んでくる。

「さっさとゴーグルもはずして元の位置に戻す！」

「あ、ああ」

言われてゴーグルをはずしデスクに置いたのを確認するとクレージュは出口に向かって歩き出した。

「部屋に戻るぞ。早くしろ」

「お・・・い？」

怒られるどころか全く無視されて、レイスは後味が悪いまま足を進めた。廊下に出て足早に歩くクレージュに追いついて肩を引く。

「なんか言いたいんやないか？ 黙ってられる方が気持ち悪・・・」  
言葉の途中で肩の手を払い落とされたレイスは、振り返ったクレージュと視線が合い息を飲んだ。赤い光に照らされて、クレージュの髪も、瞳の色も、元の色と混ざり紫に変わっている。それをプレイジのものと一緒にダブらせて見てしまったレイスは、思わず言葉を止めてしまっていた。

一秒にも満たない時間の後、クレージュが言葉を切り出す。

「言っておかなかった俺にも不備はある。他国の物を勝手に触るな。これは常識の範疇だ。それから、この世界で別の世界に影響することを許可なしにするのは重い違法行為だ。良く覚えておけ」

自分から言いたい事を言えと追求したが、実際に歯切れ良く言われてしまうとレイスは言葉を失った。返事を待たず歩き出したクレージュの後ろを付いて歩く。

「・・・悪かった」

背中に向かって言った言葉に、クレージュは振り返らずに返事をする。

「何に対しての詫びだ・・・？」

「・・・何も考えずに行動して」

「お前さつき、自分には不可欠な行動だったって言ったよな？ どうしてもやらなくちゃならなかったんだろ？」

「そうなんやけど・・・」

「じゃあ聞くけど、お前先に俺の言葉を聞いてたら今の行動は起こさなかったのか？」

「・・・いや、やったと思う」

「だったら行動に対しての謝罪はおかしいだろ。やったことに対して悪いなんて、お前は僅かにも思っていない。取ってつけた謝罪なんて、オレは受け取らないから」

「詫びも受け取らんってじゃあどうしろって・・・」

「取ってつけた詫びは要らないって言ったんだ。少しは頭で考えろ」  
そこでレイスは押し黙ってしまった。確かに、先に違法だとか色々聞いていても、元の世界へのコンタクトは必須だった。だからどんな状況でもレイスは今の状況を作り出しただろう。

どっちにしても迷惑を掛けてしまっていた。だから、行動自体に詫びたというのにそれが却下された。

「・・・意味分からんわ・・・」

レイスが背後で苦々しく呟いたのを聞いて、クレージュが盛大な溜

息と共に振り返った。

「お前さ、少しは俺に相談しようとか思わなかったわけ？」

「・・・は？」

問い掛けにレイスは目を丸くして返事をした。クレージュは大きく肩を落とすと脱力した声で会話を続けた。

「一人で動いてる訳じゃないんだぞ？オレに行動したいと相談してくれれば、俺だって少しは顔が利くん。ジュンに話を持ちかけることくらいやってのける。なにも行き成りこんな強攻策とることないだろう」

言葉を聞いて、レイスは本気で驚いていた。誰かに行動を相談するなんて、今言われるまで頭に浮かばなかったのだ。

「そうしてくれてれば、少なくとも行動に、他国に対しての問題は発生しなかつたはずだ。こんなにこそそとしくなくても良かっただろうしな」

そこまで言われてレイスはようやく気が付いた。

自分という立場をクレージュは決して軽視していない。スカイゲートの中と外ではクレージュがまとう雰囲気が違うのは、おそらくそんな意識から来るものだ。スカイゲートの風竜の騎士と広く知られている彼にとつて、全ての行動はスカイゲート全域を掲げて動いているようなものなのだ。別の国でその国のものを勝手に使うなど、おそらく許される行動ではないはずだ。

「・・・悪い・・・俺お前の立場とか全然考えてなかつた」

レイスの口を割って出た言葉にクレージュは目を細めた。

「・・・四十点だ 他は？」

問われてレイスは自信なさ気に答えを続ける。

「相談しなくて・・・？」

「五十点。あとは？」

連続の質問にレイスは口を閉じてしまった。他に回答が出てこない。

「じゃあこれも言うておく。お前をつれて歩いて決めた瞬間からお前の取る行動には俺にも責任があると思ってる。つまり、こん

な行動が公になれば俺とお前は何かしら処分を受ける。少なくとも処分が決まるまでの謹慎は免れない・・・お前のせいでスイの一大事に俺まで謹慎とかくらつてたまるかつての」

「それって完全にお前の都合やん」

「・・・少しでも反省してるなら黙って部屋に戻れ」

再び二人は部屋に向かって歩き出した。

レイスはクレージュ自身にも好都合になる理由があったことに、自分の罪悪感を削ってもらえた気がしていた。

けれど先ほどの問答でクレージュが納得していないのは嫌でも感じ取った。頭の中で会話を反芻してレイスは後の五十点を考えた。

会話中に、少しだけ引つかかったところがあつたのだ。

普段のクレージュを見てみると、他人のせいで謹慎の処分を受けたとしても、それをきつく責めるような人間ではないはずなのだ。

なのにどうして、今回はそこにこだわつたのか。

レイスは知っている限りのクレージュという人間について思い出し、違和感の答えを探った。

そして、クレージュのスイに対しての思いにたどり着いた。

今回の一件は下手をすると処罰を受けてしまい、『大切な思い人』を助けるための旅を中断させてしまうところだったのだ。

スイが今の状況に陥ってしまったときのクレージュの落ち込んだ姿が思い出された。レイスは真剣な恋愛など、まだしたことが無い。

その思いは想像できないが、あの時のクレージュの姿はとても痛々しかった。

クレージュは一日でも、一分一秒でも早く、スイを助けたいはずだ。それなのに勝手な行動で、クレージュにとって最悪の状況を起こしかねなかったのだ。加えて、それは他国のものを勝手に使い、下手をすればこの世界の違法行為に触れるという、普段のクレージュではありえない重大な事を起こさせてしまった。それらの行動は、公になれば間違いなくスカイゲートの名を傷つける。

クレージュ個人の抱えたスイへの思いと、スカイゲートへの思いを、

レイスが踏み込み荒らしたのだ。

自分が大切にしているものへの思いが、他人の自分本位な行動で崩される。それはどれだけ怒りがわいてくるものだろうか。

クレージュはレイスが行動に出たとき後を付けていた。いつでもとめることが出来たはずなのに、それをしなかった。

それどころか、レイスがクレージュを見つけたとき、彼はなんと言っただか。

『もう用事は終わったのか』

レイスが自分の行動を終わらせて居なければ、おそらく彼は終わるまで待ったのだろう。

総じて自分のことより、レイスの事を尊重そんちようしてくれたのだ。その言葉を発するのに、その行動に、どれほどの葛藤があっただろうか。

クレージュの思いをたどることで、レイスは心臓が痛む感覚を覚えた。

「・・・泳がさんと先に止めればよかったのに・・・」

それは丁度部屋の前に到着したときだった。考えた結果の答えが、レイスにそう言わせた。

クレージュはドアに伸ばし掛けていた手を止めて、表情を緩めた。

「お前言っただろ？ 抱えてるものがあるって。お前にだって譲れない事くらいあるだろうと思っただ。満点おめでとう」

クレージュがレイスに笑いかけた。本当は怒っているはずなのに、とても柔らかかに笑いかけて見せた。

「忘れるなよ。お前は一人じゃない。もう少し、周りを頼って良いんだ」

クレージュは子供をあやすようにレイスの頭を撫でた。いつかの夜のように、レイスは手を払うことをしなかった。

相手の心の柔軟さに、心臓がジクジクと痛む感覚がする。傷を消毒液に付けたような、ジワリと沁みるような痛みだ。

この感覚に、レイスは覚えがあった。先ほどチャットで会話をした

友人が、一年近く前に与えてくれたものだ。

レイスは眉を顰めた

(・・・俺の目的は・・・)

それこそあいつ等の思うままや！それだけは嫌や！

チャットに入力した言葉を思い出してレイスは唇を噛んだ。

(スイは命がかかってるんや…その回復に比べたら、俺の事情なんか…)

心臓が握られたように痛む。

自分の思いとその感覚に焦り、慌てて心で首を横に振る。

(…違う。あかん。流されるな・・・！このためにオレは生きてるんやから・・・！オレはオレのために生きてるんや、他人なんか関係ない！)

心を無理やりに塗り替える。生きている為の目的を忘れるなど、解れてしまった箇所を硬く塗り固める。

レイスはクレージュに続いて部屋に入りドアを閉めた。その僅かな時間の間に、湧き上がってきた感情を自分の奥に押し込め封じていた。

## 葛藤（後書き）

ご一読ありがとうございました。

ちなみに、今回のレースの行動はギリギリ違法行為にならないそうです。

異世界に関与はしたけど、悪いことはしていないから、もしくは、事件、事故を起こしていないから。という逃げ道で。

でも、バれてしまったら何かしら罰則はつけるでしょう。

## ホームシック

部屋に帰ると寝ていたはずのソルが起きて椅子に座っていた。その横のテーブルにはワインがあり、しっかりと手にはグラスを握っていた。

「お前何飲んでるんや」

まだ中学になったばかりの体なのだ。さすがに少し焦ったレイスがグラスを取り上げに走った。意外とあっけなくグラスを取られたソルだったが、明らかに拗ねた表情を見せる。

「別に初めてじゃないよ。向こうでもアルコールは飲んでたし、いいじゃんか」

「あほか。何してんねん、おまえは」

「未成年だからどうか言われても無駄だからね。どーせレイスも飲んでるくせに」

「お前とオレとは明らかに年齢の差があるやろ」

「でもレイスも未成年じゃん！」

「それはそうやけど…お前ちょっと飲みすぎやぞ」

叫び返されてレイスは少々言葉を濁した。どう見てもアルコールに飲まれている雰囲気が見て取れる。

とにかくと、取り上げたグラスをソルの手の届かないところにおいて向き直る。すると、ついさっきまで絡み具合だったソルが酷く俯き加減になる。

「大体、レイスが悪いんだから」

「は？」

突然つぶやかれた言葉の意図がつかめずに困る。そんなレイスに気づかず、ソルは言葉を続ける。

「親の気持ちなんて話するから悪いんだ…帰りたいよ。母さんと父さんに会いたい」

声が震えだしたと思ったら、ソルの膝に雫が落ちた。

「え、おい…？」

一度泣き始めると、ソルは堰を切ったように泣き始める。

他人に近くで盛大に泣かれるなど、レイスにとって初めての経験だった。困惑するレイスを知りもしないで、ソルが声を絞り出す。

「…俺っ…いらないなだと思っただ、けど、もし心配かけてたらどうしよう…！俺のこと待ってくれてるなら早く帰らなきゃ」

「ちよつとまてって…」

「もし迷惑かけてたらどうしよう！仕事にも影響出したらどうしよう！俺ほんとに要らない子になっちゃうよ…！」

「落ち着けて、そんなことあるわけない…」

「嫌だよ！父さんと母さんと一緒に居たいよ！一人はやだよ！」

「…っ」

ソルの言葉にそれまで困惑と動揺を見せていたレイスが大きく息を飲んだ。

少し離れた場所で様子を伺っていたクレージュは、僅かな空気の揺れからそれを感じ取った。反射的に見たレイスの表情からは悲観しか読み取れない。

すぐにレイスの表情からそれは消されて、落ち着きを取り戻したように見えた。

だがそれは表面上の話で、クレージュの耳には必死に平常を取り戻そうとするレイスの呼吸音が届いていた。

先ほどの悲観の表情から、徐々に表情が変わっていく。

眉を顰めて歯をかみ締める。

レイスの手が強く拳を作っていた。

クレージュはレイスに近づくと背中にとつと手のひらを触れた。

瞬間、背が大きく竦んだ。

すぐにレイスが一つ大きく深呼吸することが出来たのを感じ取った。顔を見ると視線が合う。レイスは居心地悪そうに顔を背けた。

何も言わず手を離して、クレージュはソルに目を向けた。先ほど命一杯不安を吐き散らしたソルからは嗚咽が止まる様子がなかった。

椅子の前に両膝を付くと、クレージュは躊躇なくソルを抱き寄せた。  
「どうした？…大丈夫だ、誰もお前を一人になんてしないぞ」  
背中を緩く叩いてやりながら声をかけると、ソルの体から緊張がほぐれていく。

ソルはクレージュの服を掴むと、顔を埋めて呟いた。

「…俺、ほんとには、戦うの怖い。出来ると思ってたけど…怖いよ」  
画面で見ていたゲームとは何もかもが違っていた。怪我をすれば痛いし、敵は恐ろしい。

脳裏から消えない、雷に打たれて倒れたプレイジ。

魔法はもつと綺麗なものだと信じていた。敵が倒れるときもゲームでは綺麗に消えて無くなった。

腐敗臭も立たなければ、血も流れない。争う音も、何かが倒れる音も、空気の振動も張り詰めた雰囲気も、声色も、モニターの中では綺麗にしか変化しなかった。

目の当たりにしたら、それらはとても恐ろしいものだった。

「戦うのが嫌なら、戦わなくても良い。スカイゲートでおとなしくしてろよ。誰もお前を非難したりしない」

「…だって、スイがいなきゃ帰れないし、待ってるだけなんて、俺、やっぱり必要ないって事だよ？…それは、やだ」

「どうしてそう思うんだ？誰もお前を不要だなんて言っていないぞ」

「俺まだ魔法も実践で発動させた事ないし…邪魔なだけなのかなって…」

酔っている上に気持ちが高ぶっているせいで、ソルの言葉が少し支離滅裂だ。

だが、言葉を順序良く並べられない今だからこそ、言葉の全てが、内々に仕舞っていた事なのだろう。

幾分落ち着いてきたソルを少し押し離して、顔を見る。

頬から涙を拭ってやると、クレージュはあえて砕けたものの言い方をして話し掛けた。

「あのさ、戦闘に関して言わせて貰えば、お前の活躍なんて、俺は

これっぽっちも期待してないんだ」

親指と人差し指で少しだけ隙間を作って言われて、ソルの涙腺が再び緩みだす。潤んだ目で見てくる顔にクレージュはその指を近づけて軽く額をはじいた。

「痛っ…」

パチン、と良い音が響いて、ソルははじかれた額をさすった。

「期待もしてないけど、別に足手まといだとも思っていないよ。考える暇があるならイメージトレーニングでもして、今より少しでも先を目指す努力をするといい。目指す自分になるためには何が必要か、考えて、求めていこう。それが、不安を払う方法のひとつだ」

「…出きるかな？俺に」

「できるさ。人間って、生まれた瞬間から努力してるんだぞ」

「？」

「生まれてすぐは歩けないだろう？言葉も話せない、自分で何も出来ない人間が、一つ一つできるようになるために努力を繰り返して成長してるんだ。生まれて間もない頃からお前もやってることだぞ。出来ないはずが無いんだ。帰るためにも、頑張ってみないか？」

「…うん…俺やってみる」

優しい笑顔で言われた言葉に、ソルもつられて少し笑顔を取り戻す。小さな子供にするように宥めあやして、やがて寝かしつける事に成功したクレージュがソルをベッド運んで一段落がついた。

「…慣れてるなあ？」

「慣れてなんてないさ。ただ、少しでも俺が和らげてやれるのなら、そうしてやりたいだけだ。…お前は、大丈夫なのか？」

問われて一瞬返事に迷った後、何食わぬ顔で言葉を返す。

「大丈夫や。ところで、数時間で夜明けなんやけど、今日出発？」

「当たり前だ。少し遅くまでソルを寝かすけど」

「お前ってさ子供に甘いよな」

「俺の中では女と子供は特別」

「あっそ」

「言っとくけど、お前も微妙なところだから」

「どろろいう意味や」

「そろろいう意味だよ」

まだまだ子供だといわれたレイスの反応があまりにも予想通りで、クレージュは小さく笑った。

## ホームシック（後書き）

ご一読ありがとうございます。

不安を抱えていたら、それがたとえどんなに小さなことでも、そこから弱くなっていく。

人間ってそんな生き物のような気がしています。

マイナスは吐く事が大事。でも、相手から期待通りの言葉が返ってこなかったら満足しない。自分と全く同じ人間なんていないって知っているのに。

人間って結局どんな生き物なんだろう。って考えたりします。

10/01、一行だけですが、修正加えました。

## 魔獣

魔獣というのは、獣が黒魔法、もしくは負の力の『闇』『黒の力』に飲まれた後の姿。その上の魔族は人が持つている『負』『闇』の力の塊のような人間。魔族は背に黒い翼を持ち、強力な魔力を持つ。魔族にはまた別の種族があるのだが、それは知らなくていいと説明を飛ばされた。

簡単に話を聞いたレイスは、魔族は悪魔、魔獣はやはり、元の世界のゲーム内で見ていたモンスター、と自分の中で整頓した。

昨日酔っ払ってすっかり思いを言葉にしたソルは寝起きこそ元気が無かったが、会話をするにつれて徐々に前を向くようになった。

正午近く、アンダーグラウンドを出発する頃には、ソルはいつもと変わらず楽しげに歩を進めていた。

三人はジン達の操縦するバイクに乗せてもらって、一気に廃ビルの入り口まで到着した。

タイヤなどは無い、空中に僅かに浮き上がる不思議なバイクだった。地面を直接走らないため振動などが無く、とても不思議な乗り心地だ。

帰りの迎え連絡の為、小型の無線をレイスが受け取ると、笑顔でお礼を言ったクレージユを先頭に魔獣が住むといわれているビルに入る。

中は無機質な鉄骨と鉄壁で、一切窓も何も無い通路だった。

迷う事も無い、気持悪いほど一直線の通路と階段のみだ。薄暗い空間、壁の高い位置に設置された蝋燭が唯一の光源だった。

視界が悪いため、前と足元を確認しながらゆっくり足を進める。体を感じる鉄を踏む感覚が、ソルとレイスに懐かしさを感じさせた。

コツコツと足音だけが響く。外では建物が太陽に熱されているのか、じっとりと汗をかくが、特に敵が出てくるわけでもなくスムーズに

事が進んでいく。

ひたすらに最上階へと、まるで誘われるかのように道が出来ている。

「・・・ほんとに何も無いねー？」

一気にラスボスまでいけるんじゃないの？

そんな楽天的な考えをソルが言葉にした。だが、反面、クレージュは少し焦っていた。

ここには風が無い事に。

空気の通り道が非常に少ないこのビルは、人が一人通れるかどうかの細い通路のみ。それゆえ非常に空気の通りが少ない。

クレージュが通常使う魔法は風を媒体ばいだいとする。風と魔法力を融合させるのだが　　つまるところ、風が吹いていなければ力を発揮しない。

だが、その特性を知っているのは魔族の者だけだ。

たまたま魔獣が居座った建物がそんな造りだっただけならいいが、もしかすると背後に魔族の影があるかもしれない。

もし万が一にも、魔族が付いていたらどうする？この2人を守りながら戦う事など出来るだろうか？

風を自分で作り出すことは出来る。

だが、それは、出来る限りやりたくない事だった。

(・・・どうやら、そうも言ってられないみたいだな)

階段を上がりきると、初めて建物内で見えるドアがあった。

ノブを握る前にクレージュは嫌なものを感じて左手に剣を召喚した。少し大振りな、何とか片手で扱える大きさの剣だ。柄の先の飾り紐の揺れが落ち着くと、クレージュが静かに二人に声を掛ける。

「二人とも、階段を…30段ほど降りている」

戦う前から剣を召喚するクレージュを初めて見た二人は黙って頷いた。それを見てから、クレージュは静かに剣を構えた。

二人の足音が遠ざかり、やがて止まるのを聞き届けると、剣を強く握り締める。

「…風だ」

下からクレージュを見上げていたソルが、頬をすり抜けていった感覚に言葉を口にした。

だが、その風がレイスにはわずかにも感じ取れなかった。不思議な顔をしてソルを見ると、緊張したような表情でレイスを見返してくる。

「クレージュから、風が発生してるんだ」

ソルには感じ取れてレイスにはわからない。この状況はクレージュの魔法力が作り出しているものだからだ。

魔法力はよほど強大なものでない限り、魔法力を持つものにしか見えないう感じ取れない。ソルが感じ取った風は、クレージュの魔法力の流動だった。

そのため、レイスにはわからなかったのだ。

（でもなんだろう？この風、少し冷たい…）

ソルは冬の風のような魔法力の温度に、無意識に腕をさすった。

間もなくクレージュの魔法力が完全に風へと変化し、レイスの肌がそれを感じるようになった。

同時に、クレージュはドアの外から剣を振り下ろした。

破壊音と共にドアから反射した風圧が、二人の頭上を通り抜けていった。クレージュと同じ場所に居てあれをあびていたら、耐え切れず吹き飛んで、狭い通路の壁に打ち付けられていただろう。

風が収まると二人は階段を駆け上がった。

「…!？」

ドアは真っ二つに折れて、その先の部屋の奥の壁まで吹きとんでいった。

ただし、吹き飛んだのはドアだけでなく、アンダーグラウンドの映像で見た、魔獣、ゴウムも一緒にだった。

壁に打ち付けられてドアごと二つにされたゴウムは腐る音を立てながら溶け、ゆっくりと生存自体を消していった。

いつもと何かが違うと感じながら二人はクレージュの後に続いて部

屋へと進んだ。めり込んでいたゴウムという物体をなくして鉄のドアが音を立てて床に落ちる。

ゴウムが腰につけていた布袋が音もなく落ち、緩んだ口からスイの魔法力の球体が床に姿を見せた。

ゴウム以外、誰も居ないはずの部屋なのに、その魔法球を拾い上げた手が三人の目に映った。

長い真紅の爪を持った女性の手だった。

手をたどって視線をあげると、妖艶ようえんな女性がそこに居た。

ただし、腰から下が蛇である、情報には無い蛇の魔獣だった。

布が数枚、乱雑に巻かれているだけの、女性の裸体といっても過言ではない上半身。

それに続くのがうねる極太い蛇の尻尾だとしても、他人を魅了する容姿をしていた。

なにより、綺麗な肌色とほのかな薄紅色で出来た尻尾を覆う鱗は、ぬれた様に艶やかな色彩を帯びていて、とても美しかった。

僅かに鱗に走る濃紺色のラインが、より妖しさを誇張させていた。

その姿を視界に捕らえたと同時に、部屋に満ちている甘い独特の香りを鼻腔が嗅ぎ取る。

ゴウムの事も、魔法球の事も忘れて、二人はその姿に魅入っていた。そんな二人とは対照的に、クレージュは普段となんら変わらない表情で嘆息した。

「なんだ、ラミアかよ……はいはい、落ち着けお前ら。だらしない顔すんなつて。下半身をよくみるよー 蛇だぞー」

クレージュは振り向いて二人の頬を順番に軽く叩いた。一言二言、二人から文句が返ってくるが、二人の意識がラミアに魅了されていなかったことに一安心する。

ラミアの魅力に一度捕らわれると、敵味方の判別がつかなくなり、とても厄介なことになるためだ。

そんなやり取りをまるで気にもせず、ラミアが独り言のように言葉を発した。

「嫌ねえ。唯一、奇襲かけるくらいしか能の無いような獣だったのに…それすら出来ずに殺されるなんて。どうして待ち伏せがわかったのかしら？」

「…教える義理はないな」

ドアノブを握る前に、クレージュにわずかに届いたのは獣の呼吸音だった。そして、ドアの隙間から漂ってきた、僅かに鼻腔を掠める不思議な香り。

今にして思えば香りはラミアのものだったのだが、そうそう出会う種類の魔獣ではないために、すぐには分からなかったが…。

(まさか人に似た姿を持つラミアがいるとは…)

クレージュは昨夜、恐怖を口にしたソルを気にしていた。

どうせなら多少強くても異形の姿をしていてくれたほうが、今の状況では助けになっていた。

戦闘を始めれば否応にも血生臭い姿になる。

「ここに居れば風竜の騎士がくるのは本当だったのねえ。若い男ばかり、食べれば寿命が5年は延びそうだわあ」

長い舌で口元を舐め、唾液をすすったラミアに対して、クレージュは黙ったまま剣を構える。それを見て、ラミアは妖艶な笑みを浮かべた。

意志の弱い異性ならば、その魅力に己の意思を奪われてしまうと云われている笑みだ。その表情でラミアはクレージュを見続ける。

「風竜の騎士を食べれば不老長寿になるって本当かしら？ 私にその身を差し出してみない？」

「悪いけど、あんたは俺の趣味じゃないんだ。魅力の欠片も感じやしないんで、論外」

はつきりと拒絶を口にしたクレージュの言葉に、ラミアの表情から笑みが消える。

「そんな口を利いていいのかしら？」

言葉にあわせて、ラミアの両手に黒い靄が発生し始める。

それはあっという間に巨大な雲になると床に落ち、やがて液体とも

固体ともいえないものへと変化した。

「スライム?!」

クレージュが物体の正体を見抜いたと同時に二体のスライムは、恐ろしいスピードでレイスとソルめがけて飛び掛っていた。

「何?!」

「ソル!法衣を頭にかぶれ!顔を巻かれるな!」

スライムに襲い掛かれて、床に体を沈められたソルにクレージュの声が飛んだ。

スライムはかるうじて固体を保っているが、ほとんどが液体で出来ているため、顔を塞がれると溺死してしまう。

咄嗟の声にソルが動いたのはわかったが、法衣を頭に被れたかまではクレージュからは距離があつて確認が出来ない。

「早すぎや!スライムの癖に...!」

一撃目をかわして飛び去っていたレイスも思わぬスライムの素早さによけるのがやつとの状態だった。飛び掛られたときに、ナイフを抜きスライムを分断するが、半液体のスライムは一つの固体を二つに分かつ事で生きながらえ、今度は二対になってレイスに襲い掛かる。

「ありえへんつて! まじかよ!」

それらをなんとか避けているレイスを見るクレージュは、ラミアの視界の中に居た。

下手に動けば自分がラミアに狙われる。

「お得意の風の魔法も、この空間じゃあまり上手く構成出来ない見たいねえ?」

クスクスと笑いを響かせるラミアを睨んでクレージュは言葉を返す。「あんまり調子に乗るなよ、魔獣ごときが」

クレージュの言葉の後、部屋に銃声が響いた。音に目を向けるとレイスに襲い掛かっていったスライムが一体、溶け出していた。思わず口元に笑みを作ったレイスがもう一弾、飛び掛ってきたスライムに向かって打ち放った。

弾力性のあるスライムに丸め込まれたかに見えた弾丸が、次の瞬間、炎を放ちスライムを蒸発させていく。

シリンドラーが小さな音を立てて、弾丸一つ分、回転する。

レイスは、銃口をラミアに向けた。

「スライムは俺にはもうきかへんで」

人型なら、急所は同じだろうか？

レイスは高鳴る心臓を必死に無視して照準をラミアの額に合わせた。これを撃てば、殺傷行為だ。

唾を飲んだ。

そんなレイスを見ていたラミアの目が少し細められた。

「なにかしら、あの武器。少し面倒ねえ…！」

ラミアの肢体　尻尾がグンと伸びた。と、レイスは思った。だが、ラミアの移動の加速が早くてそう思えただけだった。

次の瞬間にはレイスの眼前に真紅の爪があった。

その爪がレイスに触れる直前で、横から何かにさらわれた。

右から左へと流れた空気に釣られるように、レイスの顔もそちらに向いた。

自分から数メートル離れた場所に、剣と爪を合わせているクレージユとラミアの姿を確認する。

ラミアの爪は今の一瞬で恐ろしいほど伸び、申し分ない武器と化していた。

遅れて、レイスの顔に横筋の傷が数本現れた。

深くはないが、切り傷特有の痛みを感じてレイスは傷に指で触れた。血液が少し指に付着する。

ようやく、現状を把握して、背筋に悪寒が走った。

「もう少しで頭を潰せたのに…」

ラミアが呟いた。だが、クレージユはその時すでに魔法力で風を作り出していた。

「ちよつと遊んでる暇はないみたいだ」

大量の風が、一気にクレージユから巻き起こった。

レイスは突風に吹き飛ばされそうになって、数歩後ずさって何とか踏みとどまった。

前を直視できないほどの強さだった。腕を顔の前に持ってきて防がなければ、目を開けることもままならない。

同時に聴覚も完全に風の音に奪われていた。その風の音に恐ろしい悲鳴が混ざった。

声に肩をすくませた後、レイスは嗅ぎ取った臭いに吐き気を催した。恐ろしいほどの血の臭いがした。

手で口元を覆って、こみ上げる気持ち悪さを必死にこらえる。

どれくらい経過したのか体感する余裕もなかったが、やがて風がやむと、ラミアの姿は部屋のどこにも存在しなかった。

何も見えなかった時間だったが、クレージュの後姿を見て、レイスは驚く。

クレージュは、全身血にまみれていた。

瞬間、クレージュが怪我をしたのかと思ったが、即座に違うと感じ取る。

あれは、返り血だ。

そう理解して、レイスは全身に震えが走った。

クレージュは剣を仕舞うと、背中からマントを取った。裏表を逆にし、体を覆うように巻きつけ、片方の肩で留める。

袖口で顔を拭いてから、レイスに向き直った。服の汚れは裏向けたマントのお陰でほとんどの箇所が隠されていた。

それでも足元や袖には、乾ききらない生々しさが見え隠れしていて、レイスはどこに目を向けていいのかわからず視線を逃がした。

「平気か？」

「…おう…なんとか…」

「そうか」

敵を倒した後だからか、クレージュの感じがいつもと違っていた。

平坦な声色の会話が終わると、クレージュはソルへと歩み寄った。

ソルはスライムに全身覆われたまま、うつ伏せに床に押し付けられ

ていた。

僅かにスライムを透けて見える頭の部分には、魔法の法衣が見える。どうやら上手く、頭部だけは免れているようだ。

横に膝を着いてソルに声をかける。

「返事は出来るか？ソル」

「…出来る、けど…重いよ」

くぐもった声が返ってきた。

水の塊ともいえるスライムの重量は意外と大きい。体を圧迫されているため、呼吸がつからそうな声をしている。

「いいか？外からはスライムはどうにも出来ない。お前が助かるためには、炎の魔法でスライムを焼くしかない」

「そんな…」

「出来るはずだ、ソル。炎の魔法は、お前が一番に覚えだした魔法だろう」

そう、初めて使った魔法は炎だった。

レイスがいらない間も、ソルは何度か練習で魔法を使った経験がある。出来ると思っていた、信じているから魔法は発動するのだと、その気持ちで魔法をより強くするのだと、スイが言っていた。

「お前は出来る」

頭に被った法衣の中で、ソルはクレージュの言葉を聞いていた。

スライムはとても重くて、どんどん重量を増してきているように感じていた。

怖くて法衣を掴んだ手は震え上がっていた。

「魔法…炎の魔法…炎…」

声を発して呟いていると、指輪が赤く光をともし始めた。

魔道の書を封じた、指輪だった。

指輪が光るといっなのは、ソルが魔道の書を開いたのと同じことを示す。

魔法発動のための言葉が、頭に流れ込んでくる。

我、魔道の力を使い現の具現化を可能とする者なり  
炎よ！

外からソルを見ていたレイスは、ソルが炎に包まれた瞬間を見ていた。

だが、魔法の炎はスライムだけを蒸発させると綺麗に消えていく。

「すげえ……」

初めて目の前で炎の魔法を見たレイスが思わずそうつ口にした。重圧から解き放たれたソルが勢いよく跳ね起きる。

「よくやったな」

クレージュが頭を撫でると、こわばっていたソルの表情がぱつと笑顔になった。

「やった、俺、今魔法使ったよね！出来たし！」

うれしくてソルは両手を握り締めてガッツポーズを作った。その表情のままレイスを見上げる。

「見た！？俺の魔法見た！？」

「見たみた。やるやんけ」

「でしょー！俺やったし！」

笑いあう二人の傍から離れると、クレージュはスイの魔法球を回収した。布に包み、専用の袋に収めるとようやく肩から力を抜く。

「さあ、帰ろうか」

二人の背を軽く押して出口へ促すと、三人は元きた道を戻り始めた。

## 魔獣（後書き）

ご一読ありがとうございました。

## 闇の事

ソル、クレージュ、レイスの順で、来たときはあの部屋に導いた一本道を出口へと歩く。

思えば道のりというのは、来る時よりも帰りがより長く感じるものだ。

薄暗い中、歩くのに少し飽きたレイスは先ほどの戦闘を思い返していた。

強風の中で何があつたのかと想像をめぐらせる。

剣でラミアを斬つたのだろうか？いや、返り血はクレージュの全身についていた。

背中にも、髪にもだ。

魔法を使ったことに興奮していたソルが落ち着いた時、驚いて目を見張つたくらい、それとわかるくらいだ。憶測だが剣で斬つたのは、あんなに返り血は浴びないんじゃないだろうか？

浅はかな知識だが、知っている限りのロールプレイングゲームから想像すると、風で相手を斬つた、としか思えなかった。

風で？

今、全身が触れている空気も、ある意味風というんじゃないだろうか？

まさしく、360度触れている大気が刃に？

想像して、少しぞつとする。

レイスの耳には、まだラミアの断末魔が残っていた。

幸い、ソルは法衣を被り、その上にスライムも被っていたためよくわからなかったそうだが、それを見越した上での行動だろうか？

前を歩くクレージュを見詰める。

強くやさしく、笑顔を絶やさない。

だが、厳しくないわけではない。

先ほどのソルに付いたスライムだって、本当はクレージュなら何と

か出来たのじゃないかと思っている。

けれどあえて、ソルに魔法を使うチャンスを与えたのではないだろうか。

魔法を使ったソルを褒めたクレージュを見ていて、レイスは直感的にそう感じた。

いつもは笑顔で褒めるのに、あの時だけは笑えていなかったからだ。だから、魔法を発動した後、言うべき台詞だと準備していたんじゃないかと思った。

その直感は、ラミアを倒した直後に感じた、いつもと違うクレージュにつながっていた。

違和感、というものだろうか。言葉では上手く表現できない何か、レイスに付きまとうていた。

ソルをほめた時、たとえ準備していた言葉でも、クレージュという人間は笑顔で言葉を発するはずだ。

そう思って違和感の正体に気がつく。ラミアを倒した後からこちら、クレージュの自然な笑顔を見ていない。

そして、今、歩いている最中でも、レイスはある事に気がついていった。

クレージュが、時折、まるで呼吸を整えるように、大きく肩で息をしているのが見て取れたのだ。

少し休むかと声をかけようかとずっと迷っていた。今も迷っている最中だ。

そんな、歩く音だけが響く階段に、ソルの声が響いた。

「思ってたんだけどさー、この蠟燭つてめずらしいよね」

言われて、クレージュもレイスも両側の壁の高い位置についているそれらを見上げた。均等に配置された燭台の上に、一本づつ、太目の蠟燭が火を灯している。ただでさえ暗いため、目を凝らす。二人が見上げたのを背後で感じてかソルが得意げに続けた。

「俺、目がいいんだよ。ここの蠟燭、色が黒いんだ。あんなものの

色一つでもちよつと気分暗くなるよね。どうして魔って付くものって黒色が好きなんだろ？・・・って、おーい」

言葉の途中で後ろからの足音が途切れた事に気が付き、ソルが振り返った。後に続いて階段を降りてきているはずのクレージュが蝋燭を見上げたまま、数段上で立ち止まっている。

その後ろで前が止まった為に進めないレイスが口を開く。

「止まんなって。俺まで進まれへんやろ」

「あ、ああ、悪い」

「何や？　なんかあるんか？あの蝋燭」

「いや、ちよつと珍しかったただけだ」

再び歩を進め始めたクレージュに続いてレイスもソルも歩き出す。

『何があっても、あんたはこれを飲むべきじゃない』

ジユンが言った言葉がクレージュの脳裏で反芻する。はんすう

（そんな事は知ってる。飲むつもりも、飲まされるつもりもない）

そう、実際、薬の姿も言葉も出てくる前にゴウムを一掃した。たとえ待ち伏せされていなかったとしても、最初から即座に倒す計画をしていた。

それほど警戒をしていた。

（だけど、これは・・・）

クレージュは胸中毒づいた。この建物に入ってから、ずっと感じていた体内の違和感があった。風が無い事でいまい魔法力が安定しないせいだと思っていたのだが、違ったようだ。

黒い蝋燭など、この世界で初めて見る。どこの国でも、表立って生産されていないはずだ。

確信という名の推測だが、あの蝋燭は、ほぼ間違いなくディープブラックを盛り込んで出来ている。火を灯す事により成分は大気に溶け込む。酸素を取り込むために呼吸しても、そして、肌からもディープブラックの成分を体内に取り込んでいたことになる。

クレージュは先ほどのラミアとの戦いを思い返す。たとえ己の属性のものだとしても、魔法力で何かを発生、召喚し操ることは、当人にとっても負担になる。魔法使い達が魔力を引き換えに炎やら雷を呼び出すだけで操る事をしないのはそのためだ。

実はラミアを倒したとき、思いのほか楽に風を召喚できていた。故に、思っていた以上に残虐な倒し方をしてしまっていた。

倒した後、しばらく気分を浮上させられなかったのはそのせいだ。いくら魔獣とはいえ、惨い事をしてしまった、と自分で自分の行動に驚き、打ちひしがれていたのだ。

だが、今なら対ラミアに対して、そうなってしまった事にも頷けた。人を魔族にするくらいに驚異的な力があるディープリックの成分を取り込んだせいで、自分の中の封印が緩んでいる。

気が付いてしまったせいでクレージュは認識してしまう。

自分の中に生きる、もうひとつの魂の鼓動を。

自分では制御しきれない力がそこに秘められている。

せめて小さな窓でもあればそこから風を呼び込んで大気を浄化させるのだが、この通路はまるで計算づくのようにそれをさせてくれる隙がない。

部屋までたどり付いた時間を考えると出口まではもうしばらくかかりそうだが…絶えられない距離ではないはずだ。押さえ込めない時間ではない。

あの薬は効果は高いが、即効性ではないはずだ。

『心配しなくても大丈夫だって。俺はディープリックには飲まれないよ』

ジュンに言った言葉が思い出される。

そう、飲まれない。飲まれてはいけないのだ。

自分は自分を固持しなくてはならない。それが、もう一人の自分との絶対の約束なのだから。

クレージュは唇を強く結んだ。

出口にたどり着いて、外に出た瞬間、頬に触れる風にクレージュは安堵した。とにかくも、ディーブブラックの充満した建物から開放されたのだ。これ以上の摂取は、まず無くなった。

そんなクレージュを横目にレイスが小型の無線機を取り出し、ジン達に連絡を取る。

軽量化された無線機はイヤホンとマイクをつなぐ線だけで構成されていて、耳につけるだけでその機能を発揮してくれる優れたものだった。

「おわったでー、迎えにきてー。もう建物の外に居るから」  
軽口で無線と会話をしてから、レイスは二人に報告する。

「すぐ来るって、空飛ぶバイク」

「あのバイクかっこいいよね。どうやって飛んでるんだろ」

「確かに。動力は謎やな。なあ？クレージュ、船乗る前にシャワー借りるんやろ？」

「え？…悪い何かいったか？」

「船乗る前にシャワー借りるやろって言うたんや。お前血まみれやし…」

「ああ、そうだな。確かにこの姿のままじゃ乗船拒否されそうだし、レイス、スカイゲートに戻るまで預かっておいてくれないか？」

差し出された袋を受け取って、レイスは少し驚いた。

「ええけど、これって…」

「スイの魔法力」

「…お前自分で持つとかんでええんか？」

「シャワー浴びたりする間、その辺においておくわけにもいかないからさ。頼む」

「別にええけど…ちょっと顔色悪いぞ、大丈夫なんか？」

「心配ないさ。少し戦闘を派手にやったからな、疲れたただけだ」

「そか…」  
嘘だとわかったが、相手が嘘で済ませたいのならレイスはそれ以上追求したりしない。  
現実世界でもそうだ。深く相手に入り込む追求は、レイスにとってあり得ない行動だった。言いたくないならそれでいい。言いたくなったら聞く。簡潔な考えがレイスの中にはあった。

しばらくすると迎えが到着して、三人はアンダーグラウンドへと一旦戻った。クレージュが浴室に入っている間、レイスは弾丸の補充のためにジンの店を訪れていた。相変わらず数名の子供が狙撃の練習をしている部屋の隅のテーブルで、ジンが銃を受け取る。

「助かったで。この銃なかったらスライムの相手、俺には出来へんかった」

「そつか、役に立って何よりだぜ。ついでに状態見ておくから少しだけ時間くれよ。もってくんたる？」

「もちろん持っていく」

間違いなく、ジンは自分より年下だ。

だが、彼が今行っている作業はレイスには出来ない銃のメンテナン  
スだった。

一度使っただけなので、中まで開けて部品を触るわけではないが、銃のどの辺の調子をみているのかさっぱりわからない。

「…何を調べてるん？」

「言っただってわかんねえだろ。黙ってな」

なんとなく予想はしていたが、やはり軽くあしらわれてしまった。仕方なく近くにあった椅子に座って、ジンの作業が終わるのを待つことにした。

それから数分が経過した頃、入り口のほうが少しざわめいた。

ジンとレイスがつられて顔を向けると、ジユンがこちらに歩み寄ってきていた。

「え？…めずらしいな、お前が出歩くなんて」  
「うん」

少し驚いてジンが声をかけたが、ジユンは愛想のない返事をさらりと返した。そのまま、言葉をつなぐ。

「奥の部屋、借りるよ？」

「いいけど…散らかってるぞ」

「人が入れれば十分だ。あと、レイス。君も来て」

「え？俺？なんで」

「問答無用だ 黙って従いな」

「…しゃーないなあ…ジン、銃のメンテよろしく」

「おう」

一連の出来事は珍しいことらしく、その場にいた全員があっけにとられた顔のままレイスとジユンを見送った。

部屋の中は本当に散らかっていた。

壁沿いのいたるところに金属の部品が入った箱が積み上げられていて、そこに入りきらなかった部品や収まらない大きさのものが床に転がっている。

中央にある大きめの机は作業台、といったところだろう。

がっしりとした鉄製で出来ていて、脚は床に固定されていた。

そこにおいている電球の明かりを、ジユンが点灯させた。

レイスはドアを閉めると部屋全体の電気を探したが、スイッチを見つけれなかった。

仕方なく、光源がある作業台の傍に歩み寄る。その際、ジユンの姿を改めて見たが、やはり可愛らしい子供の容姿をしている。

（見た目だけで言えば、どっちかって言わんでも女子…）

そんなことを考えていたレイスに、ジユンは作業台の傍にあったパイン椅子を組み上げて差し出してきた。

そのまま質問が飛んでくる。

「何を言われようとしてるか。わかるよな？」

声も容姿も、誰もがだまされそうな愛らしい姿なのに、目の色だけが、鋭くレイスを見てくる。

このギャップには何時までも慣れない。

ともあれ、話に集中するべきだ。

レイスは一呼吸、間をおいた。差し出されていたパイプ椅子には座らず、背もたれを軽く掴んだだけだった。

話に集中し始めると、少し焦る。

何を尋問されようとしているのかはわかっている。

IDカードだ。

レイスは戸惑った。

たとえば、元の世界で教師に悪事がばれた場合、堂々とやった言い張り、悪びれない。はいはいと説教を聞き流し、開放されるのを待っただけだ。そこには、罪の意識は無い。

だが、今回は自分を優先してくれたクレージュの存在が思い出された。それだけでもう、罪悪感という文字がレイスの中に生まれている。

「ばれてるから、とりあえず返してくれないか」

言われて、レイスはずっと持ち歩いていたIDカードを作業台に置いた。

謝れば何か変わるだろうか？少なくともクレージュに影響は及ばなくなるだろうか？

だが、謝罪という行為には慣れていない。タイミングも、切り出し方もわからなかった。

更に間を要して、視線が揺れ動く。

「…ちよつと興味で…元おった世界にも同じようなのがあったから…」

「『ちよつと興味』くらいで盗まれちゃたまらないんだよ」

「そこらに置いとくほつても悪いかと思うけど」

「自分のことは棚に上げて管理体制の指摘か。いいご身分だな」

ジュンがIDカードを手を取った。手で遊ぶように机に軽く角を当

てる。

コン、と小さな音が立った。2回、3回、ジューンはカードを机に当たてて音を鳴らした。

その手の動きが止まった。音も止まり、部屋に静けさが帰ってくる。

「本来なら重罪だ。盗みも、違法行為も」

言い放つて、ジューンはレイスと視線を合わせた。

視線を捕らえられたレイスは、そこから外せなくなった。

感情が読み取れそうにない、暗い暗褐色の瞳が捉えて離さなかった。

「筒抜け、なんだよ。アンダーで起こる事はさ。特に機械事に関しては、俺から何一つ逃れる情報はない」

「……」

「事の隠蔽いんぺいに協力した相手がいることも知ってる」

どうにかして、クレージューが一緒にいたことだけは知られないように出来ないか。そう考えていたレイスの言葉を先回りして、ジューンが言い切った。

文字通り、ぐうの音も出なくなったレイスに、ジューンが思わぬ言葉をかけた。

「取引をしようか」

「取引？」

「あることをやってくれれば、昨夜の違法行為はすべて闇の中。悪くない話だろ」

「…取引内容による」

「これを、肌身離さず持つていてくれるだけでいい」

カードをポケットにしまった代わりに台の上に出されたのは、レイスの手のひらにすっぽり収まる大きさの黒いフェルトの袋だった。

口は紐で締められていて、開かないように硬く結ばれている。

「中身何や？」

「ちよつとしたレアアイテムさ。まあ、特別効果があるわけでもないけど、一つだけ。元の世界に帰るまでこの事は他言無用というのが約束事だ」

「つまり黙ってこっちの物、持って帰って事か。これも違法になるんちゃうんか？」

「心配しなくても、そちらの世界が滅びるとかそういうことはないはずだから。害は及ぼさない。直接、手も出していない。だから違法行為にもならない。…だろ？」

「…含みのある言い方やな？」

「そう？」

「しかも、これを知ってるのがお前と俺だけやとしたら、俺が勝手にもとの世界に持って帰ったアイテム。って筋書きが完成か」

「意外と頭が回るんだな。それともこういうことにだけ経験が豊富なのか」

ジュンが少し愉しそうに瞳を細めた。幼い少女に見える少年のその表情は、少しだけプレイジを連想させた。

「共犯者は多少罪の意識が無ければ簡単に裏切るからな。これで事が表ざたにならないなら、簡単な約束だと思っけど？」

「…わかった。それでクレージュの足ひっぱらんで済むなら、ええわ」

「それじゃあ、よろしく。俺の用事はこれで終わりだから」

最後の最後まで淡々と用事を済ませると、ジュンは部屋を後にした。

## 闇の事（後書き）

ご一読ありがとうございました。

## アクシデント 1

帰路に着く。

アンダーグラウンドに、普段から国交船が立ち寄ることはない。

その事を知ったのは、帰りの船を三人揃って部屋で待っていたときだった。

ほかとは明らかに違う国、さらに地上はあの有様のうえ、めばしい資源も作物もない。

どの国もあえて港を作れと要請もしないし、国交をしようとしないうまま数年が経過しているのだという。

地下に彼らが住んでいることすら知らない国だってあると、クレージュが言った。

アンダーグラウンドには、もともと作物などが育てられる高度な機械があるらしい。

そして、その加工も、食品にするまでも、すべて機械が行っていくれるそうだ。

どうしても足りないものは、彼らがどこからか手に入れているのだろう。

ジューンは自分たちの情報をアンダーグラウンド外にもらすことがないため、多くが謎に包まれている。

それがまた、ほかの国との交流を遮断してしまう理由となっている。どこも、どんな人間が住んで、そんな生活をしているのか、全くわからない相手とは手を取り合いたがらないものだ。

そんな状態であるから、船を準備するにはそれなりのやり取りが必要になる。

前もってジューンが立ち寄りを要請した船は、クレージュを乗せるという条件があるため立ち寄りを受諾した。

スカイゲートが絡んでいなければ、やはり好んで立ち寄る場所ではないということだ。

国交もない、流通経路もない。

彼らは普段どうやって足りないものを手に入れているのかとレイスが訊くと、クレージユは少し寂しそうな、複雑な顔をして返事をした。「わからない」と。

子供ばかりが集う場所だ、手の一つや二つ、差し伸べる気では居た力になりたいが撥ね付けられるというのは、なんとも表現に苦しいものだった。

スカイゲート行きの船に乗り、三人はその日の夜には波の上に居た。

人数分のベッドと小さなテーブルセットしかない簡素な船室で、ソルは暇をもてあそんでいた。

ベッドで転がりながら、同じく隣のベッドに転がっているレイスに話しかける。

「今現実って、どれぐらい時間たってるのかな？」

ソルと顔を合わせながらレイスはチャットを思い出した。元の世界とコンタクトを取ったことは内密にして置くべきだと判断し、曖昧な返事を返す。

「さあ。期末辺りちゃう？」

「期末っていつ？」

「ああ、そうか。お前って中学成り立てやから知らんか。十二月中旬や」

「・・・そっかー、もうすぐクリスマスなんだあ・・・」

「お前、出席日数足りんかったらどうなるんや？・・・義務教育中やから関係ないか？」

「どうだろ？ 知らないよそんなこと。まあ多分、親の名前で学

年上がれるけどね」

「親の名前？ 親は何してるんや？ 長期の外出が多いってニユー

スでゆうてたけど」

「大手の社長。両方社長だよ。オレが継ぐ頃に合併するらしいけど」

「ほんなら将来は合併した超大手の社長ってことか、お前。・・・このご時世に将来明るいなあ」

「そう？ 良くわかんないよ。金には困らないんだなって思うけど」

その悪気のない少年の台詞に少し顔を引きつらせたレイスが、今度は興味たっぷりの質問に答えるめぐりになる。

「ね、レイスは？」

「何が？」

「元の世界で退学にならないの？ 高校生でしょ？」

「べつつに、高校なんてどうでもいいし」

「そうなの？ 世間じゃ高校と、出来れば大学も出たほうがいいって言うじゃん」

「一般論やるあ？ それに大学出たほうがいいのはお前みたいに、大会社の社長のイスが回ってくる奴だけの話やと思うけど？」

「え？ なんで？」

「例えば職人なんかは、学歴より腕って事や」

「職人になるの？」

「例えばの話や。将来のことなんか考えた事無いわ。まともに働いたっていい目見るとは限らんしな。視点変えたら弱みに付け込んでぎりぎりのラインでヤバイ商売してる奴らの方が生活水準ええ見たいやし？」

「でもそれって、つかまるリスクもある。って事だよな？」

「そうや。けど、金が欲しいんやろ？ 遺産にしたって、取り合いになる世の中やから」

「……そういえばご両親亡くなってるんだよね。それこそ、遺産とかあったんじゃないの？」

「そんなもん残ってたらオレがこんな真面目に学校とか行ってる」と

思うか？遊びまくるで」

「そんなものかな？」

「多分な…俺ちよつと外でるわ」

「外？もう真つ暗だよ？」

「夜の海のご真ん中つて、そうそう行かれへんやろ？」

「そうだね…まつて、俺もいく！」

急に一人になりたくなつた。そのための「外に出る」発言だったのだが、ソルが付いてきた。

お陰でひとりになれなくなつた。

だが、それを思ったほど自分が嫌悪しないことに、レイスは少し驚いていた。

そして一瞬、元の世界の一番近い存在だった友人が思い出された。もともと友人はチャットなんかに頻繁に参加する人間ではない。

昨夜アンダーグラウンドからアクセスしたときにあの場に居たのは、レイスがよく参加していた場所だったからに違いない。

探してくれていた…のかもしれない。

チャットで並んだ言葉が怒っていた事を思い出して、レイスは少しだけ口元を緩ませた。

どうしてこんなことになっている？

知るかよ、俺だつてこんな状況招きたくないつての。

大体にして、最高位が眠りに落ちるとは何事だ。お前、騎士になつたんだらう

なつたさ。

ではどうしてこんなことになっている？

だから知るかよ！わざとじゃないし！一時的なものだし、しばらくじつとしいてくれよ！

その頃、甲板で。

クレージュは満月の映る海を見ていた。昼とは全く違う黒い色の海。

夜の海は月が太陽の代わりに地表を照らしているのだとよくわかる。船の際でそれを見下ろしてから中央に設置されたベンチに座り、夜空を仰ぐ。

「……はああ……」

大きなため息がもれる。海風が冷たいが、それは高まる気持ちを抑える協力をしてくれる。未だディーブブラックの効力が完全にぬけ切っていない体は、熱を帯びていた。

日が暮れると人の気配がなくなった甲板は、クレージュが全身の力を抜ける格好の場所となった。途切れることのない風がクレージュを包むようにやさしく触れていく。

心地よさに身を委ねて無言で夜空を見上げていると、横に誰かが座った気配を感じてそちらを見る。

「こんばんは。いささか、お疲れのようですが大丈夫ですか？」

柔らかかな雰囲気をかもし出す青年が同じベンチの端に座っていた。

すつきりとした顔立ちで、歳も若い。まだ三十手前程だと思われる。こぎれいに細かい刺繍をされた法衣からの香りが鼻腔を掠める。

「別に、心配されるほどでも無いけど……。珍しい人に出会うもんだな、僧侶？ 祭司？」

「祭司です。もつとも、今は各地を回っておりますが」

孤児院や教会で見るシスターや神父に似通った姿だが、根本で違うのは斜めがけの襷たすきと、それに染み付いた独特な香の香りだ。スカイゲートではあまり見かけない信仰が伺える。

「……宗は？」

「今は、私の思う神を崇拜しております」

「属さない祭司ってわけだ。それがどうしてこのスカイゲート行ききの船に？」

「先ほど申しましたが、今は、各地を回っておりますゆえ……」

「何のために？」

「天より授かった力で、人々を苦しめる魔の者達を封じて回っています。祭司という職は、今の私には合いませんね」

「スカイゲートには活躍の場所は無いと思うけど？」

「ええ、存じております。道は違うとはいえ、魔道の最高位、スイレン様の加護の大地でありますから。ただ、その地を訪れて見たいというのは、道の違う者の中でも夢描く事なのです」

落ちてきそうな星空の下、ゆったりと語られた言葉が終わる。

夜の海が静けさを取り戻し、波が数度、緩やかに船を揺らした。

その直後、突如として船が大きく揺れ、爆発音が響いた。

「何だ?!」

ベンチにしがみついた後、辺りを見渡していると、なおも爆発を続ける船体の側面から炎の色が夜の闇を染め上げてきていた。炎は瞬間に燃え広がり、甲板は助けを求めて逃げあがってきた乗客で一杯になり始めた。先刻までの静けさが嘘のように、悲鳴が周囲に広がる。クレージユが船室に残してきた二人を探し始めた刹那、船が大きく傾き始めた。

長く持たない。

直感で感じるが、決して、小型とは言えないこの船の乗客全員を助ける方法など到底思い浮かばない。

炎の前では風の力は無力に等しい。力を増幅させることは出来ても、燃え盛る炎を鎮圧することは出来ないのだ。それこそ、船を壊す勢いの突風でも作り出せば話は別だが、それは現状、何の得ももたらさない。

傾き始めた船体から、なおも爆発を繰り返す船は、闇の海に飲み込まれ始める。つかまる場所を得られなかった人間、炎に巻き込まれ、水を求める人間、逃げ場を求める人々が競うように海に飲まれていく。

(・・・まずい・・・!)

恐怖の悲鳴と混乱の叫び、嘆きが風に乗る、痛く殴りつけるようにクレージユに流れ込みはじめた。普段から他人の感情が乗った風に、己の感情まで飲まれてしまう事の無いようにと、クレージユは自分の周りに魔法防御を張っていた。それが打ち破られるほど、その場

の空気は荒れていた。

過去の経験が脳裏をよぎる。

ひどい感情に飲まれた時、自分の居た場所が竜巻に飲まれた後のようになっっていた事がある。

純粹な精霊の力を継ぐ者ならありえない、力の暴走。

分かる。もう一人も、感情の風に吹かれている。

（まずい。まずい・・・！ 飲まれるな・・・！）

思考に入り込む荒れ狂う感情に飲まれないように自分を保つ。そんなクレージュの耳に、近距離から空気を裂く様な叫びが届いた。

「イヤアアアツ！！！」

反射的に声のほうに手を伸ばす。視界に少女が映った。指さきを掠めて、小さな体が黒い海に飲まれていく。

風竜を、『フウ』を呼び出したところで全員は乗れない。

打開策は見当たらない。

船体は脆くも崩れ去った。

アクセシビリティ 1 (後書き)

ご一読ありがとうございました。

## アクシデント2

船の沈没は、スカイゲートの海域で起こっていた。

レオンハルトに沈没の報告が届いたのは、事故から数時間後だった。救援部隊の手配、医者の緊急収集、被害者の臨時収容場所。

深夜にして、レオンハルトの周りは忙しく動き始めた。

「レオンハルト様！ フウが帰ってきました！ 事故に巻き込まれてしまった様です！」

全速力で駆けてきた兵士の慌しい声を受けると、レオンハルトは中庭に走った。到着すると、ちょうど全身海水にまみれた竜がゆつたりと降り立ったところだった。近づいて、背中にぐつたりと身を預けているクレージュの様子を伺う。

大きな外傷はないが、気を失ってしまっている様子だった。心配そうに覗き込んできたフウの額を撫でてやる。

「潜ったのか？ 水は苦手だろうに……。クレージュを預かるよ、ありがとう」

言葉を聞くと、レオンハルトの手を鼻先で小突いたあと、フウはその姿を消した。残ったのは、海水まみれでピクリとも動かないクレージュと、なぜか、一緒に乗っていた祭司。

「……すみません、無我夢中で、気が付いたら助けられていました……」

そちらも海水まみれで、一目見るだけで海上の事故に巻き込まれた事は理解できた。とりあえず対応の処置をとらせるように祭司を兵士二名に任せる。その後、用意された担架にクレージュを乗せ、部屋へと運ばせた。医師の診断を逐一聞いていたのが本音だが、そうは言っていられない現実が次々と押し寄せる。レオンハルトの判断、指示を仰ぐ者は後を絶たない。

恐ろしく長くもあり、恐ろしく短くもあつた一夜が終わりを告げ、日が昇る。

船体は爆発と波を受け、形すら残っていなかった。船の欠片にすがりつき生き延びた者は、運が良かったといえるだろう。炎に飲まれてしまった者や、浮遊物にたどり着けなかった者、未だ、行方不明の者達。

日が昇り始めた頃から、彼等の思い人達が収容所に到着し始めた。一様に涙を揃えて。

スカイゲートの城で唯一、電気機器に囲まれた部屋にレオンハルトは立った。スクリーンの向こうに映るのは、船の経由地、アンダーグラウンドの統治者、ジユンだ。

相変わらずのゴーグルをつけた姿でジユンは声を発する。

「お忙しいところ、通信をお願いしてすみません。俺達の国に立ち寄った船が爆発したと聞きました。詳細は大体お伺いしましたが、正直、驚くばかりです。何か不具合があったのか、魔物が何かのせいなのか…、こうも船体がバラバラになってしまったのは、さすがに俺達の解析能力を持ってしても原因の見つけようも探りようもありません。…時に、風竜の騎士の一行は無事でしょうか？」

「残念ながら、レイスとソルの消息が判明していない」

「そうですね。こちらとしても、ゴウムと一緒に潜んでいたラミアまで倒していただいた借りがありますので、情報の収集に協力をお願いしております。よろしいですか？」

「手を貸してもらえらるならありがたいことだが…」

「残念ですが、国際的な立場状況を考えても、表立ってこのアンダーグラウンドに何かしてもらって喜ぶ相手はいないと思います。スカイゲートの王が願うような救護救助の助けは、俺達には出来ません。とはいえ、最大限の形で協力させて頂くつもりではいます。とりあえずは風竜の騎士と一緒にいた二名の救助をお任せ頂けませんか？位置が把握できるアイテムを、彼らは持っています」

「…わかった、では、そちらはお任せしよう。良い知らせを期待している」

「ありがとうございます。それと、こちらが普段使用している効果の高い薬品等はすぐに届けさせるので、ご自由に使ってください。ただ、あまりうちのものだと言って使用されるのは控えた方がいいと思います」

「それはどうして？」

「薬品がアンダーのものだと知れば、おそらく使用拒否する人が増えますよ。助かった後に問題定義する人もです。土地に踏み込むだけで足から腐っていくと思っ**て**いる輩も居るくらいですから。…それでは、用件ばかりで申し訳ないですがこれで…」

「ジュン、一つ取り違えないでほしい。君たちの国に立ち寄ったからといって、君たちが全責任を負わなくてはならないことじゃない」

「…ええ、当然でしょう。考えなくてもわかる事です…多少は覚悟をしています」

ジュンが珍しく会話のやり取りに少しだけ間を要した。僅か一秒ほどだが、レオンハルトにはそれが引っかけだった。

そんな空気を読ませること事態、ジュンという少年を相手には珍しいことだったのだ。

言葉を選んで、レオンハルトが返事を切り出す。

「何かあればすぐに話してくれないだろうか？場合によっては助力することも出来る」

「もう何度目でしょうか。その度に同じ答えをお返ししているはずですが」

「しかし…」

「分かりますよ。俺達に貴方方の衣を着ると仰っているのでしょうか。スカイゲートが付いているから手を出せない国になれと」

包み込んで話していたレオンハルトの考えを、こうまでの確に表現した言葉はほかにあるだろうか。それほどの言葉だった。

今現在、アンダーグラウンドは恐ろしい場所だというイメージで知れ渡っているが、それはあくまで想像が走らせた噂の痕だ。

蓋を開ければ中身は子供ばかりで軍事も整っていない。そんな場所だと知れたら、彼らは恐ろしい将来を歩むことになるかもしれない。レオンハルトは常にそれを気にしていた。故にこの手の事は何度も打診を試みているが、何度もかわされ続けている。

完全に配下に入れというわけではない。ただ、表立ただけでも繋がりを立てれば、今、スカイゲートに剣を向ける相手はいない。つまり、アンダーグラウンドは安全になる。

ジュンがいったん開こうとした口を閉じた。そして、間を置いた後、言葉をつなげた。

「人間というのは恐ろしい生き物ですよ。一を手に入れば、二が欲しくなる。例えば、衣をお借りしたとして、貴方が俺達の全てを知ったとします。貴方は、アンダーに手を出さないでおけるとお思いですか？」

「それは…」

「ないつもり。ですか？断言できますよ、無理です。貴方はより良い生活出来るようにしようと必死になるでしょう。スカイゲートを見ていればよく分かります。とても平和だ」

「…」

「どの国も口をそろえて精霊の加護、最高位の加護だとかいいますが、信じていないこちらからしてみれば全て貴方の政策のお陰だ。…強いて望むことを言わせていただければ、ここから旅立った者がスカイゲートに渡ることがこれまでもありました。これからもあります。彼らを受け入れていただければ、それが一番ありがたい事です」

「ジュン、君は行く末をどう見据えているんだ？」

「ここに住む人間の輝かしい未来を…？というところでしょうか。話が曲がってきましたね。お互い時間も惜しいですし、ひとまずこれで失礼いたします。報告があればまたご連絡させていただきますので…」

言葉と共にスクリーンからジュンの姿が消える。

相変わらず、子供と思えない落ち着きと頭の回転の速さを見せるジユンとの会話が終わると、レオンハルトは大きく息をついた。

ジユンはスカイゲートとの通信を終了させると、モニタに別の画面を映し出した。そこには地上、グラウンドゾーンの映像が映される。モニタの中にはジン、マコトの二人の後ろ姿がある。そして、彼らの前、浜辺までの間に大人の姿が2名ほど、一人はごく丁寧に訪問者まで着用している様子が見受けられる。

ジユンは機械類が置いてある部屋から繋がっている自室に入ると、衣類棚を眺めた。

実際は眺めるほどの数の洋服が掛かっているわけではないし、品質のよい衣装があるわけでもないが。

その中からアンダーグラウンドでは珍しい法衣を選んで身を包むように体に巻きつける。

布が余る作りである法衣は、ジユンの細い体を隠し、深いフードを被ると性別を判断させる顔を隠す。

大人の目線から見れば、見えても口元くらいだろう。

ジユンはその姿で地上に赴いた。途中、前を通過した姿見に、法衣で全身を隠した、少し不気味に見える子供の姿が写った。

きつとレイスが見れば、見覚えのある彼に似た姿に驚き目を見開いたに違いない。そんな姿だった。

風は微風で、砂浜に定着させている小船は波に乗って揺れるだけだった。

沖合いには大きな船が泊めてある。目的の陸地に港がない為、砂浜に小船で近寄った、そして、大人達は上陸した。

一人は小船を漕ぐ為の下働きなので、いまだ小船に乗ったまま。

一人は護衛兵だろうか。大層な鎧兜こそつけていないが、腰には剣を下げている。

そしてもう一人は、質のよい布で出来た訪問着を着用していた。

髪も乱れる隙がないほどに整え、表情は少し小難しい感じの中年男性だ。

左胸につけた国をあらわすバッヂは赤・黄・緑、三色に彩られた鳥の形をしている。

このマークは『マリエール』という国の国旗に描かれているものだった。

その大人に対してしているのが、アンダーグラウンドのジンとマコトだった。

きちんと足を揃えて直立する大人に対して、子供の対応は何かにもたれ掛かかったり、座ったりだ。

その上会話の対応は、下手をすると大人を小ばかにしているようにとられかねないものだった。

「君達の統括者と言う者は何時ここにこれるのかね？」

「だから、だまって待ってて言ってるんだろ。何回言わせるんだよ」

「ではせめて、室内で待たせてもらうことは出来ないだろうか？ どうもここは……」

そういつて訪問着を着た大人　マリエール国の外務担当らしいが、とにかくその男性がハンカチで鼻と口元を軽く覆って周囲に視線を動かした。

別段、何か臭うわけではない。強いて言えば海が酷く濁っているが、数年前に比べれば悪臭も色も随分とマシになっている。

先入観と噂と風評に、ただ、毛嫌いの念を露に男性の眉が顰められた。

相手の言葉と表情にマコトが面倒そうに答え、ジンが続く。

「あのさ、勝手に上陸してきた奴を中にいれるわけないじゃん？ あんたらの国だってそうだよ」

「そんなに心配しなくても数分で致死量に達するようなガスとか毒撒いてねえよ。そんな状態で俺らが出てくるわけねえし。大体、ここがどんな場所か分かってきたんだろ。我慢しろよな、それくらい」言葉に耐え切れず、兵士が一步步み出て剣の柄に手を添えた。

「お前達、いい加減言葉を正さないか！失礼の度が過ぎるぞ」

一喝された二人は顔を見合わせた後、示し合わせたように笑いあった。

「すげえ、聞いたか？今の。さっすが国の兵士って感じの台詞だったな！」

「あれか？国のためには命も投げ出す！ってのも言うのかな？聞いてみてえー」

全く怯えず、それどころか悪態をつき続ける子供に兵士が剣を抜きかけたその時、ようやく全員が待っていた人物が現れた。

「お待たせして申し訳ございません。二人が失礼をしたようで…。先ず、武器から手を離していただけませんか？」

ジンとマコトがいる場所の中央に、法衣をまとった姿でジンは現れた。

男性が手で制すると、兵士は渋々、剣から手を離して一步下がった。そのまま、男性はジュンへと向き直った。

「…君が、ここの統括者、という者かね？」

「ええ。マリエールの方と存じますが、わざわざこの様な大地に、どういったご用件でしょうか？」

しばらく、間が空いた。

出てきた統括者が子供の背丈、そして法衣で全身を覆っているのだ、相手が戸惑い、思考をめぐらせるのも、ジンの想像の範疇だった。

「失礼、質問の前に名乗るのが常識ですな。私はマリエール国、外務に携わっております、デザイナート：クープと申します。以後、お見知りおきを」

「ご丁寧ありがとうございます。統括者、ジュン：ハルカと申します」

「…お顔を拝見させていただいてもよろしいでしょうか？」

7割がた、そういわれるだろうと思いつつも深いフードを被ってきた。

体つきは体質や種族で小さく大きさまざまに変わるが、顔つきだけは人間

は成長度合いが大体表れる。

童顔や老け顔だって居るが、それにしただって大体が前後の年齢が妥当となる。やはり年齢、性別が一番分かりやすいのはそこだ。

自分が相手にどういう印象を与える外見をしているか、知らないわけではない。だから出来ればこのまま話すほうがやりやすかった。

更に言えば、会話をするにあたって、一番考えを見抜きやすいのも相手の目だ。

顔を見せずに話を続けることも可能ではあるが、背景にあるのが船舶の事故だ。

断ると今の状況では不利を招くだけになる。

「お話をさせて頂くのに、これでも支障はないかと思ったのですが

…」

ジユンがフードを脱ぐと、ディザートと兵士、二人揃って驚いた表情をみせた。

まさかと思っていたが、本当に子供だと判断したからだ。そして、顔つきからは女子だと思ったのかもしれない。

その間から容姿性別に関しての質問をされる前に、ジユンは言葉を切り出す。

「本題に入っていたいただいてもよろしいでしょうか？」

「ああ…それでは…。この度、私たちの国から出て、こちらに立ち寄った船が重大な事故を起こしました。無論、国を出る際には船舶の点検など行わせているので、こちらで何か異常がなかったか伺いに」

言葉の最中に、ジユンの目つきが変わったのに、ディザートの言葉が思わずとまる。

ジユンの瞳からは表情の色が消えて、無感情な瞳が彼の目を真っ直ぐ見上げていた。

「今、ご自身が体験なさったように、ここには港がありません。船は沖合いに停泊させて、小船で往復していただいて、乗船となります。クレージユ様が乗船された時も同じ方法です。従って、俺達に

船の様子はわかりません」

「ではどこでこのような事故が起こる原因が生まれたのか、今後このようなことがないように追求を重ねていかななくてはならないと私共は考えております」

「でしたら、わざわざお越しいただかなくても、母国で調査を始められればよろしいのでは？」

「もちろん、技師達が総出で調査を開始しておりますよ。それについて提案がございます。過去、地上に存在したグラウンドゾーンは、それは素晴らしい独自の技術を持った国だった。あなた方は、それらの知識をお持ちなのでは？数名の知識を持った者をわが国に派遣していただき、技師たちと力を合わせて…数名で心細ければ、在住の数によりますが全員をお迎えすることも…」

「… ああ、もういいよ、めんどくせえ」

デイザートの言葉をさえぎったのは、先ほどまでと同一人物とは思えないジュンの一声だった。

「?!!」

「言い回しがめんどくせえって言ったんだよ。長つたらしい言い方すれば子供は付いて来れず、言い包められるとでもおもったんだろ」  
驚くデイザートを、ジュンが今度は強く睨みあげた。

「うまく言い包めて技術盗めるところだけ盗もうと思いましたが、ってトコだろ？見えすぎてやってらんねえぜ。猫被るのもばかばかしくなつた」

「何を…!!」

「それに何だ？全員来いだって？あんたらに必要なものだけ獲られれば、行き当たるところは市民権も得られない下働きがいいとこだ。見え透いてんだよ」

「…っ」

「大当たり？顔に出てるぜ？ だいたいさーあ、あんたらえらく早いに到着じゃないか？事故からまだ一日と経ってないのに。どうして？俺がそこ、見落とすと思つた？」

「私達の乗船した船がたまたまこの近海に居ただけで」

「ふうん？たまたま？100歩譲って外交で外務担当が乗った船があったとして、だ？偶然、ここに立ち寄る分の燃料を積んでいて、偶然にご丁寧に小船まで乗せていた？すごいねえ？」

ジュンがそこまで言ったあたりで、兵士が耐え切れず剣を抜いて踏み出した。

「口を慎め！」

「抜いたな？じゃあ俺らも遠慮なく」

それが合図のようにジンとマコトが銃を構えた。いくら鍛えている兵とはいえ、近距離の銃弾の早さから主と自分の身を同時に守るのは至難の業だろう。

銃を構えた二人の中央で、ジュンは微かに嗤った。

「交渉は決裂です。どうぞ、お引取りください。お疲れ様でした」

## アクセシデント2（後書き）

ご一読ありがとうございます。

まったく予定に無かった新しい文章の登場となりました。

まさにアクセシデント…（苦笑）

終了章がまた伸びてしまいそうですが、お付き合いいただければうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2624v/>

---

GAME

2011年11月7日09時01分発行